貞享式海印錄

㊀発句照法第三之物表物等之傳

㊁表詩文物四句ノ裡句舉奉納追善人倫姿用情山水塲居處

㊂意旅名所神釈無常乾坤時分時節季節雜

一投茶碗

書圖

自序

吾亦もち免道を吟愛て学て歩ゝ発
ゞ疾やのみをつくし候迷乃一歩ゝも捨
ゆを却て除川の林多よ浴ゝ多ゝ
物をあひ服をさゝもり或ときも乾藏を
押て法句経を閲ゝ「森羅及多像
一法之所印」云ゝ一法所謂一心や是以即
攝一切を習出世間法即是一法東大師
おさ門経べ唯依安会而有差お若
就あ云唯一真め故云海印三昧や
とくれんを仮て説て聞ゝ者徳の
古奥我押ひ更めるゝ者ゝ要の要凡
を記せり後ゝる気法制恒あくゝてんの

海をあら絵い法方るまをんくホ
拾写して家家くの證とつるを照ー
あもてそれら叩ーを挑事変ま史孝式
海印錄と号く人そー安要を保乃
記をあーて蒼海の海印中ふんを
隆ーあて彼ら星左あの波風孝ーし
あまいます西に逆のわる祖跡のかる美の
ろ到竿ぜの帝ーも勢ふる開社
ぞもそうあれとて西風復古の教を
新て同ー海ふおもくやと西方の風土我
ふそのふものい関南数の海人
あ及云未弥生　西高

傳ま海くみ仰くれと春もあをたち乃
きとわりま連もあら弟ふ春く生いめの月を
思ーて宇ーく海印のま春を海ろれみ
来様寒をろう孝ふあてきまを
二三子ま伝あ空支ま一理乃南の
確論あれを之を伸ろ射を乾坤年
わろ社の月は星乃四より風ふまひ
くやる支る雲秋の木卅社喪ま
喜の英ふの雲あう四時の朗涼山ろ社
奇飢神寂あれも商等事あ人宿
一を乃五楽衣食宝財日用の乃事文
字て宝を渡の服ふ弟ふるとこの隆乃乃
うまみをも安演の真砂いまひ海社

○目録

一ノ巻 発句 掛物 花 月 三物 表物
二ノ巻 表書 祝儀 四句目 裡移 句数 奉納
発起 亡者 人位 時 年号 支体 病 述懐
山 水辺 雑 居所
三ノ巻 恋 旅 名所 神社 釈教 降雪 風 乾坤
時分 夜分 時節 四季 雑
四ノ巻 月 秋 日星 花 述懐 生死
五ノ巻 墳墓 述懐 字去 留字 体言 用言
六ノ巻 数字 重字 吹飯 衣裁 新字 名乗
出体 大体 五体 一字 一座 准対 単句 処格
死活 百韻 両体用 近江内外 禁制 並 要格
字余 俳諧 祝儀

○引書

本式 負態式 九五條 又 新式に

宛 九章の口訣 先師の秘伝

時 仏祖の位 世 執心の人 きるを
先師 為 報恩

暑月 新式 云 字 三 字 晋 頻 一座 俳諧 発句
挨拶 句 新 字 新式 の 俳諧 を 補 一 事後 門人 仏 大 ひろく 文的
▲両補 未 すさ 許 字 恋 祝 吉 今 あり 今
文祝 八 去来 伝 后 古 本 去来 伝 句 を
挨拶 字 世 句 本 去来 伝 句 を
ミ 死 文 字 新 祝 伝 忌
き 人 仏 云 新 挨 句 去来 の

そは文中ニ文祢六の名の表候のうるあるそれ
き角のに名字もれいるてのくもはひきこの物も
あきなるにてゝ補ひむさて陪布のあさ時
為生るよの連多ー
秘出要決 ▲白州人集ニ出そうえ祢六の夫和よう
許六ハ按るの名あれとも書中れ古式のさゝえ吾
家の式の手辞の従多れとも其比い古学ま事我
時ハ加字辞仮字まのるい本出る用捨多し
雅州ニ出 ▲吉舟ニもモ残左おとう為ニ字暦る
九発行とあるのに席破もあきい出版のひさや
大方古式のさゝえて本出ニ及されに用の一
格の一ツ条 ▲枕青芸ニより上吉ニ分句の従あるい
ひとまー吉通のるおあれとも古式の字あれも
用捨おこ下まニ辞のるのあるい例の従ふ及さ
○芭蕉談 去来抄 猿蓑ニ ○石碑実 歌ニ式
字配法附 花葉字 俳家問答 浪花問答 許六述

○本出古渓伝ほ古今抄 菊松条 猿五従 十従 お弁
東西抄話 支考述 ○芭伝ほ ▲支考より意并伝より
他社の従い為体あれとも多ハ従人さうらを加ーう字伝おこさるる多ー
○小枝考ほ ○丁本伝ほ 竹箱 ○ウヤムヤ関 空屋
○三冊子 土芳 ○独云 曳裳 ○今云祢ほ 磨え
▲氏号時名称の人の従ひー箱の考ニ例ニそう申ま
未没うめふあるおい補ひ又支非あるゆうも
いそれい人の弥ふむるのあめるそこーうきき
おこを筆写ニ依て文非の考るきるやもい
あてそしつはお 極秘伝おう 教琴ホの教
おる多あれともあるら古式を院ー或い字きの連
或い伝従の形或い雅陳のは名ニ矢ホあるおも比
次ほう弁記セきりれとも雅あれと雅あれい為歩
仍今何人の従ともんニ照そて従ニ背
そとるニ従すとら先哲の書ニ例あるを

○北条注 ▲南更著 記者名乎ともに誓文三我の
中そ文字後度の人々ハ本文の字法いえより口
決も考め人とえ白ら奥儀和ト出字も限ら
志乃のみを作法太うし 紅白吉縁の記ハ
拙名のさくし出字仮おさ文作ミ本ヤ
記も亦字法多れいおさ後て宝さ字把七寺

和義出席者 お集再出おい下二集名字記ス
巻印 ・白旨・丹 ・ヤ 巴ヒ・ま カ仙ま田
・羊 まム・カ仙無印・陰おハ 七八十二ト記ス

六、

延宝五丁巳正月吉日 「花の雲鐘は上野か浅草か」 梅の風俳諧 白
一花お集 式梅よ斗も
俳諧集 あ何とも分ぬいてふくと汁、
咲かぬ降ら小雪の宝のむ、
一
おのれも 風ふを秋「夜やさ、
春れり初の「まもうおな
古拾遺 実や月万口 梅ますいさ

七、

一 古拾 京卅条阪ふ京て馬れ茨 百
京集 さけくり二月中旬 初茄 八
天和之辛酉 次句 時の号 雑抄もく 雅そくて 廿
「丟津と之梅実 世ふおて京六 百
二 古拾 時名さそいふの山城 春乃吉
武発曲 俳諧
俳とる初 白 「生舟や梅吉
みの吉ム胡桃ま拒ふ木瓜もおき京ふ
ふ吉氏 ふ吉し名月のおや 茶印 山
三 古集 さろうき我伯 「夜ふの事ふく
古集 花ようき我伯 「おくやふ人を
古拾遺 花句風の初 「初吉のふ」も ・三八り
天和之甲子 「包ふて 「炭実の 「お月や
冬八日
茎 葉品 ほされて名の声 乃と白し 云
三カ仙 振ねう 布ら時ふ月よ ま俳
之花句 時の梅芳松ふし馬そふ ・ミう
〈イが越ま支ふ十ラま仕天ほふヨ入り之出

カイ印口

え　花よ花よと忙おそひそ友在　・イセ
　　何をかの日何やら「イ」ことゝ桜のむ
　　句を　かきつゝもまことあるの名ありま　三・ヘリ
　　拾遺　杜毋志を保く「時を宝と西ゝ　「金」
　　春秀ゟ　ゑろゟ木ゟや旧月の梅ゟり　土二
　　根本式　涼しさのゟ傍ゟゟ水車　百・ロ戸
　　野の景　日の去をさすゟ野の歩ゟゟ、　「初懐紙」
　　拾　久ゟやてゐれくゝと初ひもゟ　「老故」
　　一格　花ゟ入てゟく春ゟゟ梓ゟゟ　二
　　其俤　時玲の袋を抱ゟ西日ゟんま
　　〈此ゟカシマ行八月廿日発後の杜よゟ老名ゟ〉
　　句碑ゟ　時ゟ秋「ロ戸」掲ゟ時ゟゟまで白祇ゟ十
　　拾　冬ゟ春や人をゟゟぬ市乃掛ま
　　雑ゟ栗　わひ人とゐゐよもむわーれ乃
　　相笠ゟ　――ゟゟやさひゟ雪ゟ　ま・ヘリ
　　倒　来ゟゟいまゟ「早俵の雪を
　　枕白　なあなて雪ゟゟまゟる孤衣ゟる　拾

　　今　風乃きゝゟをよゐゐ山　ま「枕白」
　　雪老　麿雪かゟゟもはー雪のむ
　　冬国角　時ーや庵春の比乃ゟ羽ゟ
　　拾　第祇ゟて人もあゟし日ゟ雪「ゟ老」
　　仇　仏の米乃ひゟもあれぬ句ゟゟ　〈イか祇ゟ　・イセ〉
　　一幅ま　祇友のぬゟゟをゟむ雪のひま
　　〈吉里　ワカノウラ　スマアカレ　赤ウツウ　ホウ〉
　　仇　ひゟ白のゟゟゟと祇ゟる雪ゟゟ　・迫ロ
　　草庇　草庇の中ゟりのひ文ゟり　ユ・ミノ
　　拾　初杜やあゟまゟ角の一ゟとゟ　・ヘリ
　　秋ノ日　栗ひえゟゟくゟもあすゟ芋の花
　　元禄元戊辰九月改　〈祇友ゟを使てゟう文舟ゟう保川ゟ入　・名戸
　　句ゟ祇ゟ　白菊ゟゟるゟ郭公ゟ祇ゟゟ　・江ロ
　　拾遺　桂磨　月出ゟり灯ゟゟし社ゟる　「ゟ」
　　あゟの　丁ゟまも郭ゟゟゟけゟ宿ゟや
　　拾　ゟゟゟち「ゟの郭ゟ「ゟ毎ゟ
　　続ゟ　ゟゟやちゟ雪ゟ下ゟる孤ゟゟま

二見　　雪初めて二見の浦をうづむ　未舎

卒塔婆　水仙うるる　　白う　雪霽

麦秋　衣更へて梅波う　　紙衣

ダテ衣　卯木の垣うるる　　「釣」下史

雪月花　袖おり人を葬のうるる　　ムツ

「俗」表紙　風雨のもーめや　奥の田植寺　雪月

夕テ　降るや日ちむを新の栗　「俗」

拾　海を布晒　「釣」下史　ムツ

雪月花　名月を「すしさや　お彩の　雪月

もむ掏　ひとやをすすしのる　「俗」

初茄　卯ーや山を出初の　初茄　「奥」

「つくし」山　あつこ山や吹浦うみて夕涼

雪月花　文月やさくもま「星と雪降う　未・エチゴ

「永楽通」　秋景ちそーま毎と彩れ瓜苗　ま・カバ

コセムラ　まゐしきやかやかれてく萩屋　ま・ヨウ

「印の平　めれてあく人をヤ「おみなえし等

ツメ」花　るうてをを店あくおうる　「俗」

桃白　　雪気う鶏次うる　　ま・ミノ

卒　　あくさ升ともをーきくのむ

拾　　ろうの菜も一ツの白うる　　・えり

萩松　　一泊えうるる萩の　　・イカ　雨

名」押　　ろきともきあうむ玉あれ　「生宮浦」　・イカ

他　　時や雪をすきめくる菊の月　ヤ

雪雲家　雪おう今やや少斗の星乃雪　未舎

舟ヤ　降風むちの分うひやうひ　未舎

〈ナラよう降花　まさが降又降ひうイカ

壬　　号乃雪降ーくる　桔ふ

みの　　木のもとけ終るさくふ　桐

風表ヲ　　早「

巳ノ免　　桔梗やむの雪ふちの　「初夜

ひさご　　木のあそ什も　「ろくのろう　・まと

芦」ニノ　　市中おの白　〈初位庶人

アメ」子　　杉ろて千九　「ろくふく松のま

名義考　　月ろ今る降ふ雪きあり

芦　葦の初ゝ刈ぬ初一ぐれ
拾　引起こまろ〻さひきの荻枝
文稿　まばみをたゝやまいもし　〈乙卯之人〉
芦　梢あかまりうの春の霜ふけ　〈乙卯之人〉
仏　ひゝくとよる角やさの琴　奥
芦　芽出より二なよ戻る枝の枝　五
仏　根葦こさや初秋　河灯の流れ琴　〈乙卯〉
君空集　あゝと出てきよ月のさし　奥
星合一　手動やと枝の声よりし秋の風　梢白
集考　うるちき梢のお雫の加ゑ　蛇
洗濯集　そゝぬ花々吹白よ芽のやきま　〈乙卯〉
梢人ヲ　れ仙や白き唐ふのとろ〻り　主
奈良茶　芽白桃よ白一　れ仙冬　〈乙卯〉
桃白　守てそ山を宮白やそこり　〈乙卯〉
百明　号や焼一三人さら　梢の先
麦稈集　ちんやさ〻い麦ろ〻ろあゝ　ま宮
仏　水ろやふ面のさむ二股セ、　全

未来記　雨のふる梢と梢やさの焼
翁草　釣ろや秋の明ゆし　去乃色
小文庫　帷子ゆ一筋の声
芦日レ　初苺やまろ〻教へぬ秋のふ　琴
俳門　青ゝも「刈株や落ちふ　〈乙卯〉
句会　ろそろ〻人かまれ　おれ
宗牧　松行一さひとろる雲ゝな　十
桃白　月代をろゝさ風ふ　ま巨
秘実　ろゝとめそ白をひゝそ
句兄弟　おろそ冬人さられ梢枯
此　出頭帰りてみろむまの雪八
ヒト　ぬらるふの「今一
発句集　み人ちみまろく梢ふる序ふ　景色
発句ニ　八九ろ吉てろゆる
梢白　松高梢を　行ろむ宮ふろろ序ふ　景色
炭俵　出ろのむ吹ろろまの入り
梢白　名月やよ「さひ　千之助　早

炭　拾貫の丁哀　「雪の松おり口
七十　芹梅や祖ワの田井社和水
主家遠　主家や小ぬのうら　白乃僧　ま駿
きつ谷　生あつ一つ　ある　ま　繕を
伯ホテ　いさころ　庵　全
続九　——　嵐外

出　まろや家中の礼　里月工　八
炭　梅つ一のつとり　ある出跡外
七十　志の一春待　風俗の俤を
茶在多　あちさわや　義を小庵のお在安
小文　我名のつさとすめぬ金外
笈日記　水鮫あくと人のくや依伯　一カ　・子入り
・有海　斗原寸村のさりきや入月　西　・来
砥並山　学ま加さすし　座を江ケ出
南寿　松ちり行ふすー和志葉
拾　クふやつる南をとる友社妄　亜
続九　ろのや男て吟一次　お　・を口

秋をきんのよるや　「空の青
あれくて志い由ひみちり　・イカ
生　称ことともき未　羽る投ま称
みむ皿　打風よ我国をする称ヤ
続九　さるろもれる志の松秀外
他　打芽や志ろめ志のへそは
去北方ろ　——　ろくと
位去報　鉢栄てろ　山乃形　去
他　杜の夜をお名ろ　・大夜
女使　代乃やゆく人ゆ一杜のくれ、
業芸　白きくの目ろそろちりはし
業他社会業他冊ま一ふまの手次各清乱あり参
志一て夏痛を加えれるも杜後ろするおあろむさて
ちまの志ろ前一世の志を拾えれと志候お考むし
帯くいまと名ろの法思い女字を出拾ろ猪ろく
持て世ろ挑む雪ま　ゆのも表作る矢まそり高保
のろろ出待の出多れろ今求ろきおみて清回

ふさまわい又補む文字を活用の例を加ふ
[illegible]ふ[illegible]ふ[illegible]ふ

七甲申 松冬右 疾土木因
白夕之 合ㄈ 従者
キワ カ之 偕水
三正九 百二 考
二万 三月仙 カ古 、
三戌 赤山方 方良 、
百鳥 カ五 中
ㄈ亥 市ノ泥 カ二 圭
十仏仕 百一 考
五子 越多移 合八 六、
友衣 カ ㄈ 、
六丑 白羽集 合ㄈ カ古
八卯 赤山圭 百一 白狂
二辰 況干羊 カ二 た角
ㄈ申 山琴集 合古 方土 巴弓
角 カ之 知兒
五未 発変 、一茎二

新拼子 百三 カ土 角
中葉 、八 老
阪多 、六 和七
子ㄇ 隊 カ一 徐風
表ノ麻 合五 魯九
汝よろ カ十 老
阪橋伏 、二 百一 奇十
尾ノ記 カ五 亨門
ㄈ帆対 、ㄈ 東如
松変人 、ㄈ 柳士
東古風 合ㄈ 中
多ノウ カㄈ 狂
寺子仙 伯名
八夕亨 百一 乃亨
七き之 、七里冬
梅ノお 、一 仲

六申 ブリ 依 カ十 竹司
三戌 三月 悦 ゼ一 危之・享雪之 紀」 カ土 佐砂
六丑 又日カ仙 カ二 仲・七子多色 百花 カ五 四入
八卯 難医百 ㄅ二ノ守 陵、 百五 陵、
十七巳 ミ」お社 加計 岁多集 合九 古之
九酔 三千化 オ百 八ノ亨 百二 カ二 佐里
十巳 通念高之 カㄈ千梅 茨岩洋 合ミ 重卒
土午 布乳仙、三昇角 梅十治 百二 カ十 二
土未 寄白河 カ七 お十三 八多整 オ百三 お十 被
二月集 合ㄈ 嵐枝 和茄 カミ 呉天
ㄈ」ノ金 モ一 ㄈ 鵆矢 、ㄈ 路矢
文採 合左 庭文 鵆矢 合左 二
三申 又波 カ三 葉圃 文採 合ミ 二
イ七行 合二 二 ツ毛ハン 、ㄈ イ吹
ろ」枝 お十八 風竹 凡角 カ三 昇
水仙作 合ミ 杏ㄇ 門司祝 おお 祝十
市ノ向 カ三ノ 移土 キシン荘 加一 亨月
左乃 古良川 タㄈ 右琴 名一

カイ印口

さゝ蚊 カニ 五蒜 麦林菜 カニまた
蔵 天河、七ソ由 夜子金 合土 文
壱 五色雲、六七水・十七 文星歌、
十五 名匡、二ま十気・九 竹ノ秋、二哥那
九気 コハツケ 合九 百一 子魚 言文集、ロ 平
三お捨遠 文 孫む捨 カ十六 湖十
文 二丁 巳 唱ロ話 カ言土、 西荻 合九 カ五 肘人
三午 加川 合二 白々 お多 夕一雨水
冬ス楽 カま苔砂 六行会 カ北 被
ロ未 星月夜、幸糸松 冬く梅 合五 え
五申 三点谷 ち一 曲家 合土 カ二 梅屋
宝保 二戌 ロ胡菜 カ一 ロ杜 秋ノ風 カ二ま 忠士
三支 青瓢 ク一 五之 古ノ巻 合六 巴静
敦享 甲子 仏誂切 カ一 希因 芭蕉林、ロ原雪
二丑 百噺 ち一 風竹・二子 廿日月、三一色
ロ卯 孫我島 杜若 ち一 何声
尾芝分 カ七一 イ原

ロ大部分〈小部分之其部下之〇ある六の字と
ロ引出之文被きおい出りと切て亜梅を除う
引出て亜て▲を入候く出るい亜梅之但亜梅の〻花
をおさうく出て下を省く
ロ大部分〈小部分之其部下之〇ある六の字と
変格ある下ロ下あるあるい多体を省く一部あり
白及之〇ある其部の白去より多くをきおも
一部下は 七ヤ畳多体有と出てる大方の人社知る
るゆれい注ヲ挙う古体まとあるゆえのまゝ
一句及之一面の又仮丁面去 ロ平お去 ロ二お面おっ下
を入さる大方加之百句い辺 ロ一 あ〻下う
因去加の約付之二オ 陳氏七二仮之三字とかく
ま悲之五句のらまおあれい字とかくへ又始平仮名
そうトかい二おこう。ト後をそ平名之又表のカモテ
あれいヨとかく悲之さて古来後の約を名お十ウ 仁ハ
仮名あれい後ロ未ロ改ゐひ却て名称ロハ其字

□數句ヨ切字の道理あるヨリ

本文 本句の切字とする字多おのれ心の斟酌仮令切字
ある本句とする人の切めは本句ニあす「桐の木ヨ
鄭あくなる隈の門」は句上五ヶ
傍云方おいヨ始てお対する時ハ二ヶとなる文一ヶ名ヨ
却テ文二ヶ実と成て姿を傷ふる

古今一 切字の用ヨ云ふおハ対して文おの文ヨまい
ヨそヨ指を明ておを二ッヨする九ヨ始あり終
ありて二句一章の本句といふおきてり

▲切字ヨハ古来傳ふる名ヨ甚多ヨ切字ハ其ものを
載きヨ事あヨ寸一句の中間滞て後ヨの余情を
含む処を以り来れヨ後て実ヨ云ふる文字あり凡
傳云もてそく此字もあるを辞ヨおセ余
情ヨ包て十七云ヨ句ふおを本句とハ只句面

之那さらのことて余情も無言もおく十七字よ
るやうなるおを手まりの句といふり安を仮令初まあ
る句とても人のおめ時いある句とあす手ら俳諧
のやうに数て吉事多きの法出多くれども其比え
ば句の字数一時あれい孫きるやもあるこを
論じ初のお笑れてようく今も初たる山ふみのわら
まくも独千代の古乃よ分入き時代と成ぬるい
其琴を伝くー世ら俳諧平話の俳社と和歌
の辞仮名をい世用のおと笑ふ人もあらは歌当
るの俳社のやうに家ら教ととらふも俳句のあやのこ
あれい須臾もあるき乃あく手お祢の法図ホ
生て玄昊の華をふ理ふ掲きそいと悔きやう
と忌起ーてセちょんくきるやうまむ

△ホ句像やうのるや

本図 ホ句を屏風の画とふーー巳ら句を作て目
を閉て画ら准てみる時い死活自あらそおこ

斯あよ此計い等を先ーて情を後ますとふやう
あて有句句ともは目を閉て聴ーんこを主てするい又
▲武陵い実象は叶ふ叶まきるう分おセちこの城こ
初九 着い服界よ只今の姿を写て実を真俗と作
当る句ら的者の此乃古ふめをく真句い真日よ我こ
象学の目を写く時い唐ら鬼の面おは見ふ句の
体の再乃おのと昔ようら俳ー上まのホ句の形広と
成て一字も只今の姿ーえすかくても人のセ多時い
句の智屑をい集て上まの理い話ま及いさーむ
▲武城老陽心切く依句ら格ーのんり箱突旅
掃治ま象形三冊まおよくそーなお家ま男ま

△巻改るや

宛句の巻改あいたをちまる句才一之平句ま処ふ
句ある時いホ句ま高さくこホ句い大形の位あくてい
者及ま当平句い士平の俳あくての此ーて真句ま

立さ阿日也おかしい取合ハ
生る句いとさそふ処也て居古〜とやうなる

根本
旁 ・涼しさの滝砕るゝ水車 清風

・日乃そをさすらふ雲の おなき角

・山伏乃こゝろもしらぬ山さくら 許六

・夕くれを啼やきうりの花もちも 苔三

・帚ぎも乃まゝ庵や梅ちり ソチ

・風乃一日吹てをりけり 団友

・先生や 名筵うたれの花 木因

・名月の雲ひくやふや 音吹

・そもそも苔の下露ぞ世の 拙行

・梅うめ墨をぬりの皮うすき 文草

・蛍や吉野風邪乃吹ちらす 杉風

◆生字前後のちがひ百句手向ハ
まりて大形の撰あるべし 若百韻の主ハ千
跡を仕て其事定ハ是うも

□脇乃事

本文 掛合ハ発句と句まゝとおもひて居ハ先ハ初心の
て定字のみゝけむれるこゝろの名も孤ハ其の
ハれて懐の目を見てめ〻と句ハ始て俳諧の名目
是ら人の添ハの名目孤ハとそ或ハをそこ
一種を与られて懐の目を見てめ〻不一句お対して
口きの体とあれ句字辞の論文ハ
掛合句の余情ハ第色の面白くあるハ掛句の
おくる掛のんまあ〻口体
ハこゝろの位あれ巳ん〻を出てハ句ハ云ハ
山川草木の一字二字の風情を加てあの余情を
すこゝろ云掛も懐の字まゝて見ハあるべく掛を
◆一折 こゝろの名もおもしろや去の芭蕉の発
ぬるトアリ 三吟ハ中巻の通ふを云ふ〻 発の方先掛て
去の再挙ハおもしろ〻ニハヨリ孤ハ〻ニハ
後ヨリモ目を見すニハ方孤ハこゝろ〻きよ〻

偶去掛る句ありといふ事ハ必七句の後を心得べし掛句の始る不動ハ客を辞
客の対する字をもつて掛句の始る不動ハ客を辞
して留る時ハ前一客の掛る成て二句と命ずる故なり
字ゝて留るといふはワキも客と対し覚字を対
して句字に成る故ゝ辞留苦ゝ事ゝゝ

▲句字ゝハ古風ゝワキの留字をいふ俗ニ名目ニ云ふ
其名を仮用てお句の故を云歌ニ眼字汀俗の名を
それより意を得ゝ意の対する字をいふ事ハ
古風ゝ云ふゝ詞を仮て意の遠ニ不ゝ用ゝ事
多ゝれゝ文ゝようて両義ゝ少分ゝうすゝ さて
辞留ハゝ去ゝ次ゝ立ゝ辞ゝ 体ゝ 未ゝ
云余ゝ辞ゝて留ゝ大方連付ニおへ口テツクヨニ
ありセゝ時ゝ意余ゝて平句の
連句の事ニ一の手を分ニ
同体能の事ハ文をおゝて掛ゝ色在言ゝ
文を覚ゝゝゝお句を掛ゝて助ゝをゝり又世ゝ

お句ゝあのゝゝおワきゝ言立の付ゝあとんぢゝれゝと
掛ゝ寸お句ゝ客位掛ゝ言ゝ位ゝふ句体のゝゝ
[左衣]これゝ客ゝ成て文目の音便を口ゝゝ寸ゝふの形ゝゝ
仮ゝおゝんゝ能通て座おゝ考ゝ良ゝゝ一句ゝ
人を余ゝ起ゝ言の風情ゝ言ゝ已ゝんゝ寸ゝ
亭のゝ人ゝ忘て口ゝ云ゝゝ和を拙ゝて文好ゝ座ゝ
客のゝゝあれ言立ゝ言ゝおゝむ已ワきのんゝ如

▲本ゝ自柄ゝ、お句の一字ゝゝ次ゝ姿ゝ立ゝて掛ゝ首
已の体ゝ作ゝを以ゝ俗ゝ祝返ゝ本のワきゝ主客
向合位ゝ成ゝゝ自他を合ゝ力柄ゝて掛ゝ作ゝ
あゝ俗ゝハ五ゝ挨拶句ゝゝ掛ゝゝ
俗言ゝ一方の句ゝ掛ゝのゝゝ
答字をワきゝて返答ゝゝ
遥ニ以を立ゝテとワきゝ二人ゝてゝゝ
ゆふゝ立文ゝ位ゝゝ一体ゝお句の意を
汲ゝて余ゝ色物ゝ人品言語の姿を立句ゝの自句ゝ

作て付添ふて二句合する時一件と成故さ
おくまるんく此句は挨拶句より文あや他人の
掛すも作意なき句也挨拶の句いかにおもしろ
つきゐるても只のやり句とハ
古左あるくらふてく前書の包紙口上にてやり句
品おあれい掛者のまゝ後る時二要して包紙口上い
あきあゝ只其品おを称ふてゝ又活花の正んよ
添枝するてく今一件ゝて能きやり句ゝ成
山川草木の風情を加へよりおも祖ゝお始て立ふ
法あれい古風ゝ遠ゝて不調免門ゝてお好掛にハ
実ゝ捨ゝる刃柄のあゝ
う前の門ゝ入あゝも組ゝ刃柄掛七人あるを
前い俤の後て答す在御祝い許ゝもあれい其
宜あるを撰て後ゝせよ下ゝ挙ゝ「」の句かく
掛作あすゝ仮ゝ作設て其表をとく底まゐりさ
ゝ□の中ゝ二三云をおくゝ一件ある付方の事も

さうあゝ前ゝ件を口うゝ百千ゝも作おくゝむ
そを在故ゝ前ゝて只一件ゝ猪ゝて懐ゝせむる
学者の学ゝとするおゝ
定句 かる二月ゝ後る季あゝの掛ゝて其月を定むゝ
季掛 去来某ゝ兄のわきゝ「梅ゝ者の枝乃乃生」ゝ
くるを此掛ゝ二月のうきゝと評ゝむゝ
◆掛ハ正二月ゝ後まゝも作ゝまゝて季婚ゝ在ゝ事
季の用方変をゝて自知ゝむ
ハンモト 賀挨拶 返答懐紙記行移徒 銭お留お
神祇尺教恋 賛教釈教 名所 古実 古事 取格
右ゝ掛の歌帯式各ゝ風月の掛おゝ掛ゝ
◆式教組ゝ情を許するハ其姿の云たゝめおを其
物おの保て助る故ゝきゝを掛る時其云たゝて
平句ゝきゝ名を姿を添て補ゝ事掛乃不論之今ゝ変
ゝあゝ後仮ゝ此歌ゝおもゝとすれハそゝ句ゝ
掛ゝて情ゝ句ゝを姿ゝ仕立ゝすんゝ又ゝの

花も風月の句も自撰程よく独立され、一条を添てある句の位をすて上るを掬の位とする〳〵

△渇望

色こそ乃名も弥ちこ去の芽　弥放

おくまて膝の目を学一める　羽

右句も俤乃の弥を向うを探去い只芽の句こそ去こ去こ芽の芽乃弥を見透ふい俤あうと何ふ人さいあう去去牌の上をひく〳〵お四ふ探くえ去膝いうこと見るこん歯ふ見ふい伝芽あすやと止ろむとするもろ〳〵往き事ふ洩れてそろこち止てう見芽弥を自句の姿こと見ふたこおまて膝の六句う今芽を「俳有」と号ふい句も去の芽出の弥を見たふ情の句そやこ云うぬおあって平句ふをきを芽見ふおを探と定芽ふおまてこと句をうみ掬を含て句の姿と成る故こたくいうあくも見彩う去の牌、姿俤備る句ふ住芽書すこと一去付わきも

「うていおてふの目を学一める

とする時いうおい杖る扇とあり去人いおの芽掬よて

去芽の姿立されい平句ふ旅人掬の歩径を芽去ふ去ふ

こ式句を捉ふ掬ふ待て俤ふ留辞留の花乃く

あすかう接投句い情を許すおあるあこ乃その芽

情ふ学れて芽掬ふおたれい芽式を句ふ芽ふ芽

三ふまふ送訓ふり芽掬ふ婦ふふ芽掬

ふそい句あっていふる句も通ひ定字のんふあく

ぬ句くふる花今も古風とおあくふきてふる句ふん

「とそふ掬くむ意むかの裏

俺いやうて　あけあの　空

あく自他捨遣の句をかこ乃の保芽を向ふお芽

弟弐て句の姿いふ立す芽人をおむ力自拙位力

我芽花力俤ふ学ふ力いふんこ作てふ不辞芽と

見ふ人もあり句の姿を交さるこそふれあこやき

の辞交とん句ふこ低改する句を作るあこ花

友　栗庵元春うて冬木の梢多　霞川

小さゝそ乃ゝてみの虫一第

初て羽ふまゝ親ある教を春の挨拶ゝさるを奥

庭ゟとち巣一課本と云文捐ゝすく中ゝ目

ゟおを云生てく付うう今生を図付と号ゟい句

去の云ゝ拘す只承れ者ゟ云立て掬する衣ゝ帯人

命の伺一つ書き捐あれ隆物ゟ命ゟ命ゟ手つきを

ゟの虫一つ秋ゟう姿を一人生一小書ゟそを命セ

ゟゟ枯木ゟ塊を入ゟ妙を陰ゝ

「ゟゟも考ゝ元短日の仆

と已ゟお注のんを通ゟゟ刃柄ゝ依今世人を多獣ゝ

すとゟふ修注あり仙洲の泥お比奥あれ彼をて

試をくゝをゝ施行を陸ゟ陸ゟゝあすお自ゟの虫ゟ

命ゝあすゝ只去仲を木の姿をちゟのゝそ仍今

号為とふゟも支協支時の奥命れ伺の号卑ゟ

あくむさゟを［呼注］我ゟを注玉ゟの虫乃招ゟ成ゟ

も君ゟ脇の小去の陰ゟそゝを命すとゟふ掬ゝ」広仍の

説云をや仮今ゟ川をゟ去ゝ掬い通辞を応ゟ

お、もセよ外号ゟ人の一統ゝ助ゟゟく君ゟ脇命て

ゟゟくも祖命を当汚ゟゟ仍ほすゟゟゟゝ生代の

雛士奴式ゝり只をゝて候を流すゟいなそや

哥　をゝれい山又ゟゝ一里乃月　風芸

砧ゟ酒ゟる去ゟゟ多人ゝと称ゟるべそあ一　芸ゝ二

付ゟ旅人のコ却て辺地ゝ今りと傍ゝ立ゝ報と

ゝ立病求めむと砧去ゟ人ゝ一ゝゝたり来つゟゝゟゟ

ゟゟゝすゝ伏永まゟゟゟゟゟ一報を明ゟ

むと乃今ゝ脱ゟる体を付ゟ号ゟ図ゝ

世ゝ捨られ一芸ゟ　孫宏

とセむい私ゝえゟ山ゟ一兵、山のヲあるゟゝ已ゟ慶

触と引文て注ゟ却てゟれあゟ故ゝ菊門ゟい

お的付を刃拘と号て滅ゟゝり

[丗壹]暮日おもひ〳〵矢狹老人掘尼ありと云れる事
とも男附き古くかて承引を宜き事
▲古く成共猶客の心と共に乃の中猶お好掘の
誠を含う又承引を宜き事 [二八]上ニ以[四]の事
ニ乃掘いすゑ八九いと立てそつく〳〵と
仰付くと号くるも大方乃立の中ゟ小判ゟ
[三四]昔の恋あり挨拶を聞き者ゟく文て
挨拶を甘々ゟ改日掘ゟニとの句をゟ赤良挨拶ニ
雪月花の事のニ云ゟる句まても挨拶のんゟ
▲ニ只君へ挨拶の句ニ只承引を宜き事の掘あるを古乃の
挨拶て悟入て雪月の事のニゟゟも挨拶のんゟニ
ゟをゟを改ニ悟て出ゟる句の正意あり
ゟ好あり自己を悟ゟるあり宗旨門受あり
又後人のさゟらを加ゟるあれ乃ニゟあるヒト

△客挨拶

三　橿木乃花ゟ

宗ゟする土を日ふ処て ゟ 秋乃
花の事ゟる楼の姿を入て
事ゟ夜色を称ゟるを只楼の心と信ゟ〳〵世ま
ゟる企ゟ夫を云事て開き
ゟき極込と宗ゟり共ゟ圏員分と号く成ゟ亦多し
差已ゟ境界を差ゟれ〳〵ると思て演り

――ま据す――共ゟ私ゟ

ゟ

かきつゟを我ゟ発句乃ゟあり 菊
麦植居ゟ
艾姉の二条を添て陳ゟ地の足我ゟ孫植の彼
ゟ件をゟ宿ゟま花のニを
とおゟう□□祝係ゟあれま只艾物を結ゟり成件
方付合ゟとゟ〳〵さて客ゟ句一のんを出て
「矢ゟまゟゟむ夜の伏ゟ矢私」
西向一雪ゟやゟむ冬乃ゟ 菊
ホをたゟく田井の大ゟゟ 角次

西白くお眺むる向の一家を添うて大字乙ゑ
羽をそろへてくく尾の方を著もむ凡 畑 翁
及 石井の山張や方を著もむ凡 畑 翁
ニ、実ゑ之稲も山の城迄古井あり辺凡畑ゑて
山の民いと涼よ方を著もむ凡涼を歩てくる
掬ふ金苔は水汲上てそくき持て深さうきを
凡畑乃てそる椎下の件を打う
杖止くる三伏乃比
といそく方掬おてうくおよいあるものもたゑ
薇 弥呂そ多ま野辺迄凡茄 翁
短さまして杖乃日の午 一泉
多毎日雨き掬ふ短日の件を足ふてう
拳ゑ〻る椎乃夕月涼迄之
発一うき世狂小の山椒 翁
寺清弥る種根大根 白雪

浮世の祖を発むに凡菜根を咬て百年を寿ぐ俚諺を発むに作とえて大根ともそう言いわと橘の家眼之
乃乃去毛もめ俚来
と已ゑ住を発ゑすと名て薄うおめき止ゑかくる
付ゑ便もる会むに発一ト〻そく発むきおを打るてそ掬件あれ
霓 秣ゑふ人を葉乃及ぬ小 翁
青きいちこをつわす椎のそ 翠柁
金平ゑの挟抄之秣刈の俳て乃発号を歴めむと
いちこおろこをまゑ司ことる服を椎のそ凡
古ゑ〻ず一ううまず耳うぬまうゑまゑ去不
主ろる葉凡乃哀を足せくりおう金平のさま
あゑ内ゑて口きーても途中の指を付ふ勿論之
至て 笈の行さま 椎凡自已
栞
茶探手俳ゑの花を竹椎 翁
萩乃笑を扱うる身 珠雪

コハ医師ある所ヤウ居処あり何まの花伝の字
を上て除くる姿をとりて
字を上てくれさうも
芽
月代や稼ぎまをおく宵の宿　翁
芽　秋なけれ月をまち夜寒の衆をよそふ白くと
草花と月をまち夜寒の衆をよそふ白くと
月代のうろひそへて灯ともす風情を変り灯　正秀
風さそふ　秋の下汝伝自己と
補助月如何
芽　芽る庭や海てちるそみち　翁
一秋ありつまる張笠乃雫　李由
日秋歩め料理の笠もと青い実と庭を張て物
干石上の飯を指そ張笠にちるもみちの実と
荒くきやすく　孔雀の尾
と我句を作るおもの雑談を失ふ
芽　秋を泥んのようや白雲　翁

あとろうふする掛るの露　木節
支路地と人のよる菜おを足て秋暮の体を付う
あれ——
とそく花之の刃柄と成て句の余情とあす物を
己ら多柄をお句と与るおも平句い己ら力に位て発句
を云曲て発とるおもあれい与奪の境天地あそ

田植と目別ぬをふきの没せられまい
花故　旅衣早苗も包む食をむ　ソラ
阪をまを夜の性よる事の心葛をくすれ　翁
男の性格の苟清るを出せいきと花て阪打る
芽を設言の格よする事をきおするを没ていく一体く
はい独い居と名別うすきを翁代てもれる新い
春之よう他よう付よる句体同——　肩ヨタとます
芽　芽乗乃底もあや佰大根　許六
冬さーてもる小宅の煤　翁

すそを尾茅畑の廣き佐大根あるを見て
尾よ廣あやすやと見るに白と見て宗因れ
い小袖のそさおの茅畑大根畑のそ又白き指を分
うり外その白を内てひすに月と白茅の名を移動
考う○評注くる歌い必きてあてい心くきますの廣
をくる山辺の古乱とそう佐八移動の法をもぬれど

拾

沙弓そ山をに白や冬ごもり　支考
青うて神く焼く炭竈　侯水
に白の中より一おを見出う今沙弓と号くお多福考
時と共中の一を執てひくするの附句もあり
月ひくき烟立する——　去来

三お

秋乃夜を竹くそむる　枕　野雲
独熟柿乃落る木の下　二川
茅松を一株下と定柳の独居をさくと監反ごも
独起する指之君已乱のお自由を作て
月やそくき茅の葉戸　去来

訪柳子尾

考るとても頼む松あり木葉掻　木公
宮よ小去乃山も眠うす　芝二
夜今本のそをかよう寺とも本の下陰の為に数あり白
とそて艾佐を山張と定山も時すおれい庵根も
恐うしとふんを分うさるを為出と定めて
雪うりりを見するの先　去来
三月を未尽と立のん祝よ国俊之
狐衣そあらもれう去杜丹　木因
いびよい少すお乃山茅　巴老
秋の石垂を床よ正狐衣よ宮の風を伝く許柱好の
仲と見立月祈おの山栗を逆さうき角の白両茅のひ
きを悟れねそ人侯去評両の一件之杜好も山茅も残る園
よ脱るもの以きおうむ山つきい下よ多好白付之
去雪ふる音なの戸乃さひ
ふと客う暖と以いをと夜法と以そ物とふを

走行とて今も若き人あり矢門あるさもあらむ
ゐ掘そ出方の挨拶を勇麻まほ和一猪喜一
たくみかも七は世月そ孔方お猪あふを猪喜ひり只
あーと英ふのさん猪喜といえぬそも考る一

之深の姫おと上ー房物舎を却て

注考　承入や多羽の田植のう弓中　和七
うまーと包む和茄十　去未
かり尼舟より多羽上でさ房をまおすは易て
室哀重て来一出ん多るを掘老い承入ん河をあめ
承より多羽の田植とうー衣ゐおする招と挨骨一て
皮乃辺のあそ初都を之行あるとま多る件を行う
――みそ――
とさ〻招来たるを交る件をそ〻承入と多羽の風落
を矢もむえより多ねもさ房作て重級〻ふあれい
さ房そ姉ーとゐそれもも寺

清江十里うまー房老

あきうの海山まぶむ有多　イ松
比秋のいうー妻出寺　和七
ゐ辺まお衣のふ作ううるい漢村と之て都まきい
うー級と布出する件を付う老おまみて
室を房る宮の病の杜さひ比松
海人をねそ比て丁都七ふ行
店仕巴て丁　浦人をねセて比お拇を挨骨一うかくと宿く明
皮て浦人をねセ室丁の店仕巴てゐ之て招へ

久一く重まる人とあひて
白扇　如月乃ん七もと付て松多　限化
きまんう一房の落ま老芝　聖お
ん七枝七とれ如ふ和の都と足て老室ま皮関
を定て二月のうきをそうま老おおお一て
室あふ限乃風七利く比松へ
尾乃祢兵老まそ

冬梅　　淡梅乃そこまいもくさの中　　淀之

雪社志あ一の作ほとふを　丁牧

艾稽古情の作を同室の拙おゝて附句一ゝさ草作

の対こて我もいもくゝきの字眼と

△壬挨拶

宛柄糸もむ西行あくま杜乃雪　雷枝

幽

そせをと存ふ風社破笠　羽

西門と易るい杜宝衣のお似る次あを明去沢あ〳〵でも

多孔と宝多た作を見て風乱るくもをのまをと

也くの彼笠頃てそをを存う門先の作を付う笠

といそでい西門は似さ姿も新の志れめ招も少てす

笠を自着と号るい西門と向一い直程と存ふ広を自向

自答する九之○語云お対句は独い志れ対のおと定う

扱もて見る九之笠を羽の句ま方る時い風の枝笠ト容

作を肥さる句竹寺依彼笠二字を良ま下亜之

新い忍お対とあむさる時も只乃直出乃空注のこ

まて西行ゝと称〳〵故い少てま〳〵ソハ自巳乃情のと

宝てあ句の姿をちさるあく

花のさく多あるし

秋よ志あるし　　仕友古ち禄のむさく多あれと支を考ま捨泉葉

鶏のふいちきるを特々句あるを只義まのむさる

て志あおる句と見て杜よ志

吟ふ様の次めを扇う○評注系列を人の情ちよ翠て

笠いく加人ち句杜よ志あるし様の見ち身もあきろ

おゝと多て社人と直退の句之ロ又の系ち知そかる

掲い人向答するち成問ま者式人の句ま席あそ

人の句を本しイやくなるあすとふ報ゝ作ゝ一ゝ序

以昔易の変化格一法を改ふ正風を志ま前情

先古哉の古風ま概忌や

三

泰揺手更さくお　秋風

匂こうあく山ふちり花　羽

我病やせく共止牧なも彼て沼おれいろそれ牧て
ふん風の短おを祀をセむとふんは[訪]ちより○廿[廿]桑
立表各自句の遠付向ハ茶つ氏法あるやを
考ぬなく表句を更作ま牧の牧笠のあつくみき
を席ハおめのあ前世を持ち
そて旧楽を作て自換々他ーより

菜稚かす延のちーやタ涼　歩裂
発　若おお西くあちさわの郡　羽
木句を狭き門先と又立涼ふくー
あるちろ〜脚休るまれみあるる
狭かれいこあるとを注を膳て外[西]
実に涼風ちろ等あるを叩想
ま幼術秋ちろ○[評]追打トシテ俳会の注を入ふり

一　掛るとのる称くり
あくー月秋乃在さーきる　羽
句いきおやと出く振入む牧笠もわちとの風之

楠のまよあ西別てびそのちを並る作と入て凉よ
笠の水と法上てる更をあきれさそびとおこの夜窓を
もみて更夜さつむる招をなうう南字い夜ふう初ー
塗あれもま更の生てみる風待を入や楠ま夜と[望色]ー
ふう○[評]楠付そさもる京[京]片白窓ふ信あくて分
楠のあぢ付竹をぬあくちもも古人の春矢あるそ

後挨　まおさき掛くる牧笠をそ卜如行ふ
　古人やう乃秋秋風羽
牝まら秋思ま追て一秋化あるる愛入せむうる牧笠を
うそて古人も挨るやセー秋の風乃家をおしめむと
つさと計しくる招を付ふ光を[追]と号ふハ担あきふ
ま情を起て死を信ま秋するなと卜如行ふ
すいはあるちーくれあ[ハ]私と
　[恩]ま楼のあくくふあ病せま牧笠風凉
　おちまの春病せま牧笠風凉
ちー免てかをるる風の表羽

広ふるうを名狩をしむお柄を擦骨ーてよき月秋
を又投石切て候す投を射うす

奥　新うる焚よもうーて作麦　如舟
田棟と候よ　抜乃釣記　箱
麦陰ぎ田棟とる立焚よ出今言をたの釣記よ中
付る招うもうーコハ立の句書ろ
あう白他過言　かて抜ト作うーコハ句去の詞を抜老の
詞よ集ふ格之書ト釣すろ書ーて
抜の舎も　抜の
陰の旧ふれるよ今考人命ーー
茨やうを又釣ろーかこ子　号釣
茨敬　市のよ作乃名さる和布　ダラ
釣ろ与ろて茨ー後の詞ろ之芸柿を市中ぶて号号
の作を射う細布の又立の老くは
つきの姿ーくきかこ白去の句を国すーう
雪九　翠今青陰よ釣引て歩ーー石雪

名せ方もーーき初刈乃稲　ゾラ
釣りて歩る用を擦骨ーてよき月秋
せて投るあーーふうを射うう

弱を茅なよ招て
ゑーぬ祖ろふい時ろよ葉の敢根　斜茂
犬をうる声ゑ冬乃号　加行
ゆぬ祖時ろを云ひ用まて敢祖作てうを
又ろ抜ると立む茶焚射う作をもうう書ート
うう犬乃犬はつぬいろかこと作足て独ろ　ユ
株よ歩る姓ゆの犬おの考を友ろと号て書ーく
ト号ろる時ろとて釣の起ろと号ろーー度の
きうーこを分ろる自書の一件こ

越の十文よ多尾を汚れて
病乃秋弄よむ祖い菜よろ　支考
対　恒の木棟ーて釣ろ乃花　ダ涙ト
葬ろ多尾の犬防の生恒よ葬のまとひろ抜こ

旬ばかり後 乃ち彼
と菜宿を拳ゐ一枚の病も添ふり柳と日ぞ
時及捷をうれむ芳掬を対るまとんぐうる人まて
い才一他人の掲するまもロるまー
人くさの宿を分れそう
木乃あう四社みず木ねう手 表来
友実 夜一枚に宵ふ久月のもれ 妙童
木のあう西亀ふ月を月今ふ久月を又会う
おたとうめて
三お 芽や波う連ろ花と花 眉泉
巣う通ふ日い 閑呂二羽 苔二
地泊の萍とた水辺の春をセセと冬二羽
いへ[発]かて名を列う
漂泊乃芳をおむす風 広松
苔三花をとめて
乙ちやちの新も佛あり 丁牧

嵐色ある 後 彼
ちの杉ヨリお花の嵐久とう
ようう嵐をトハとるの菜の[同色]く
岡山てえて来る 卯月 広松
子釈矣悲い新菜乃仮ふ 麦士
ふるまをる宿の 楊 唐え
時をみくれこの人の尾仕ま来る共岡の新菜乃
仮ヨリ[イ脱]おてこの人の芳ねをこの菜ま受て時を
ぬする仮とする表の楊社時舌を対う菜ま新
春のほるも克今[月]き来あき未掲ある時もも楊
ま表くうあむ芽掲うめ氏体 又当イ新まの
格を作るい女中のまする体をりて□呉うり
[表]るのを作る袖の風のまい共松く
〈餞別送芳
検笠雪を表乃やうル 相なま
菜一生をう 号色中く 三羽

辛き宮中と宮一ふの舎を表とする力拾う歌おお
みな一末のつらよ旦白て辛苦を淡く姿を含うと
○評注 言を表とする風狂人と芸能者の
々きを好う庶非ふつらく旦をむ庶瓜を旦雪
中の果て季高まも出てそ誰ら雪をひ口ちて
旦をまちる老あむえよう浮注の彩をめまる
を一く注セもうるさられ巳下い岡ね

白妙　時ら秋すのを宮一拾のつと　芳活
丁を友春と風雪の月　羽
時ら秋の哀ある彩大和歌の本きと吉のを四字旅
るれい芳き沙のをとあむと宮一ふのつと
る次めと又互波る丁を含うと丁を友ねと六生産旅
より旅と拾と風やの方を旦白ふんや氏江戸よう
大和を友ふする白ふ国ふの姿を立すら宮注まる心

江戸橋ん通まむ我ちくれ　曲子
蓮座のまお　月　羽

仮令旅ちとるかく時白する波毎ふ白訓尾の棟の
橋よん通まむと白文を旁ふる白ふ氏白江戸よん通ふ
白姿を立でら宮注とある友と橋の橋を下駄一とさふと
此上ふる人の村れの枝くと浸向て宮脱るを足て依い
吉々の江戸よん通まむ白旅の陣ふ人物かる白の情況よ
海をちるおとん白ようへ

時ら秋と旅情旁む芽乃尾　峯白
大橋の栄と他をつぐ人　羽
白ふの尾をうふ時白の方とろてさびを歩まむと
くふるのを芽白姿を宮一ふも出てき大橋ふれい
栄を焚て先人の他を旅もむとくふをちうる白
未来ふれい給も未来の用ふを他をつく人と生白と
作て次生の仕とうと又栄白ふと指木立の尾よ
時白の宝海一ふも出戻とや時白の姿を笑まむ

白々と陰をめをおおの旅　松白
一和わうへ閑一むれ　羽

めもとさゝる方もる哈の捕狂等おを付う事
秋のうき虫の声を[匿]て庵の哉を訪ふ
よ紀淑望 捕りかれよこの雪 木因
冬
冬乃進とて風も後ろ〳〵ふく〳〵よき往ふつもり
かもれよといふんうて[斎]の連句
秋乃それも先この古家う 木
笈 萩う採やう萩ねやう哉 荷
乃先て夜て萩ある笈かもや萩ある草家うや
ねむとそる折そ旧伴の連句
ろうあよ杉は悌おく山の雪 会覚
栗 杉の残をとり 荷
栞を送そろうあと山上を寺伴うえて芳山
の杉乃の三月を訪る招を又ふ人の
窓と紀戸梶の梶と似て分方遠くりコ白うの梶と
旧伴くさろう古来出そろの梶をえろて帰おの梶う

「公房より引ゆく都の名残かなト其俤
所ろトうたいそくよきろやとんぐ事うり世俗のお
のうく取方うりゆりあふるやまあ
小文
又あひ牧笛の空 荷
口きと追ぬ日ヲ方二釜の麦飯お一人はおう招うえて
さうおう〳〵又あふやの松二陣れ〳〵ふ牧二米集む
とふんを其物のお牧笛うて行る[時]とかく欣食の
楊や民容伴うて分る時い句求考う
サル
栂老菜まうの病のうろ汁 荷
笠 杉しき まみ 暖 乙州
只まうの伴うえ旅人の往う動うきを付う
笠我一ハ 初冬の深て栂老菜の移ふ古物心深ま
砌寺て古池の歌を初うやれをを夢一情の句
れ実家まある招う梶する中宮居う

を比時より時おを更る時い代甚よ於て永一ト
んと作るを礼とんる虫でる人ありかくて楊まおく
ゆ一句よ夜秋冬の字を入くおも伝の句まるよ
含て千集不朽の文とあるむ宝をん当柄の祇を忌く

ヲタ　る借てでる庭也くおくる　小枝
花也ととくく山乃曲月　ヲタ
後を残すあく処さを私薬と比るを惜てでる
てをでる招を述され花也乱ると乱るあるを
立歩目と作てきよ為の後後をこなて追力は
ととる招をみくう
おまおるて

ムワ　尾代てそ為よ為
拾　時をさくを西へうひう一へう　如行
為しまるしさくれの為　ダ端
只時をみふ空の片きと屋　あとお残る招を付う
入梅と宝あぬさみの宝ハ為梅と
ふ力よ成てもそや頃屋山　相笑
布よ拾乃あとへ帷子　相リン

強力の為お招る招を付うう差分油の通辞もて
雲一おおる　乃先も森安き　麻乃さ衣ハ私と
白扇　拾きる〳〵むーもおくく。　支考
月秋の乃先の萩ある中よ　ハ私と
をぜて宝もね升ある不為とおもでる招心為の
乃先その店ハと升おれて　ハ吹なし

打　柿乃時を　乃る出来秋ハ私と

八夕　辞去や扇よ柄杓菓乃花　文衆
十内　面をきれも岑よ月升　其三
残念をこそ　ひとく菓　蕪次
あふおの本あ〳〵乃萩　二
三千風打せて菓の門出ふ　和什
くり及中よ市よ本名の　杖　二
足医れを更宝幸一月よ菓　山只
招乃柿もちて去ますふ時　二

をき笠又笠子柿の木乃実透て目隠おき仆之

三お　先陣子杖乃さ　月川　倚彦
　　梨もまやー石合の花　笠　芝二
川辺のまゝ先陣子先ゟ先ゟ先ゟ

もりつゝく風の音を枕て仲の冬く次第ゆく侍とそて
傳をそも打ふる庭荒波ごえやうう一京のおこ荒傳
の掲句をもて句を推定する理をきれり

三ゐ　　菜月や文ろ〳〵とある日を　芽二
　　冬ごもりも今格の秋そも　比旅
九月廿く侍と帰国セ一出んあれと時の白ある旅と
海を立文ろ〳〵あつ日を月秋を旅くそそのなよ
りも刈干る格のそを待一出んの育猪を分うう
ち一帰国のんを見そ〳〵寄い役売とあむ

病後稼ものんを
　　おろときおめ安の日れや陽巻　二
　　少ちのたひろ旅る出る朝　九阡
去やもと陽る之光明と対て小妻日れを立る曲ど
「寄まこあ」た十月乃ろひ
と病後を号る九時と速ち一定的放ろろむ
斉　二見とい又あふ秋乃おれ風等

笠きろろ〳〵の月い笠ぬく　抑む
二見に二月の新と容の[ヒキ]をもセ笠とおの姿をそろう
ち一再会を契る姫女の時と及ぶ一

「人まろむ一の病か方そ」

△着述
旅人と我名悔きむ初一れ　翁
　　又山茶花を病こなし一ム　由之
「誰やとそる笠の山茶花」冬日のつきを含て時るよ
風狂の姿をりふ[額]の一件そ述分く

我名よれむの句をゆて
たい人と我見もやさむ笠の雪　加行
相茶ラ　　翁
盃をし一うさひし〳〵
我ろそやさむ強く[雨]もて笠の雪を注き大盃と
奪胎一伯宴の情乃熱る分前あり一
哉
　菜乃香る山路い旅一病上　朱花
　的とり垂す杜乃新月　風乙

る事ゟ重九の宴と又て松山城の姿をそうさう

哥　理い花は千りのる乃そ遠うか　風ま
　　てものそ月乃　独るみ的　南に
千りの乃も一歩より始るとら多年生の件ゝ
　　例おまうをるそこちそ比ハ私ゝ

△行文

ウヤヤ　堺セよ行おすゑ乃友君　自淮
　　秋をおめくる　堺のさ一杉　翁
翁の酒を止る匂あるを只捌求る老と[重二]垣の
杉よ君の栖をすゑ止りクまいクニと連しおの作
をゑ知そ東ゑ垣をそ　　ゑり最古ゑゝ

潮　いく歳葉文社袖も終す　君兮
　　こひねり乃まおを見する脛　翁
夜こ房もの時迄も整れと文社袖も裾も終よ
呉後ろい呂のこと実つ見る振の[自他通ゝ]
射　風雅まそ渡てクーり処の杖　小枝

枝乃まおをふるくゑ菜乃まゑ　十丈
菜の山路のまおやせたる風雅の宿を行る[自他通ゝ]

　去年ろ子供や宮と異を杖の風　河菱
　皮こめれいろ及放の高もおゞ文
何きえてゞ云とゞ物を採るゑ河菱ゑ袖月花見
セむと皮こ宛くを思いお左出すと思てまを二年一た
見て作句とゑ立てうく待ゑ歳い杖風深ゑゝ
公情句い居ケ振ゑ考ゑゞ　　菜おゞて深を考ゑゞ
　一月のされ多成ゞ
　おもあ一風
ろ九ほー栗茨を一番ゑ入て
先とまれ左名い雪乃一よおり　正徳
多作乃居ゑさゑい水仏　魯九
泊みりくさゑ一親を生てまゑ居ゑさゑい水仏切ゑろ
客の自乃姿をゑてう水仏切ゑ出ずゑ声をの旅村
　行文の不浄途も客ゑ座て　見えます
冬柄　掃よそ拾ふや客乃山一ツ　史加

手水柿をいふ未て大樓ゐ　唐文
柿まセ狹き柿を又出し務ゐ考き件を務くり

△雜部

甚田の社久大ゐ根築地の例て羔ゐる彼ゐゐ
禰を法て小社の社を下ゐ外ゐ石を居て及井と
名のる苔ゐ茎ゐのまにゐさるそ中く企柿る

三

志のよゐ柿て焼うふ舎うゐ　羽
志そびふゐる根保大根　掛紫
往来を止る菜店の約苔ゐも柿ゐ拾ゐ招ゐ〔打〕ーて
艾店名の根保大柿も店行包ゐ未ひさる寂を
又ゐうゐ志社久の委きを名そく舎字志くおむ

例

承をそまゐ中宮や雪乃中く　羽
手ゐ志ゐくゐ社あ社　月　業言
承中宮の乃をおくゐ又拾ゐ志ゐれくきは御の条ゐゐふ
打柿の姿とおゐう志をおのゐとおゐ之ゐて

例

孫を井亜おの仏旅ま社和て

来乃可伸ゐ栗のうけ尾を結り

ダテ

庄家や月立めむを彩乃栗　羽
柿ゐ尝のとまるを西　州　栗紗
ち苔の義ゐ庄家の姿を立柿字ゐ月立めに〔旨〕き
村ゐう字ゐ度世ゐ味のゐを忌ふ辺拘く

菜根を喫て狩ゐる丈夫ゐ淡活す

出

志のくふ乃大根幸き灿れ　羽
一週むく本ゐ　しのゐ　云庫
大根相の辺ゐて大根の幸き学ゐる句と会社ゐふく
風を村ゐう何の答れ一ゐと引答ゐふめー

又

おゐ二柿を挽ま社そくれ一菜の汚　羽
苔の戸や日答ゐてくれ　あ桶乃月　ておゐ
掃まのする為桶乃月　ておゐ
苔の戸学根先ゐて汚くむと又そこの上水桶よ
投込ゐる菜をれて逃ゐさー苔ゐふく桶の

月ゟ仆をそゝぐ茅屋の仆を分ち

白雪ゝ三ゝ三ゝ梅ゟ桃ゟ後梅後の名をよて

春　艾句桃ゟ白〳〵ゟ仙花　翁

おかしつらやの垂ゝ雪　白雪

只桃水仙の白ゝ図艾仙をゝ出て白ゝ雪と

ひゝうセゝう号を茅一色をいゝ宣法とあむ

茅屋ゝ桃梅あり門人ゟ角児をおり

おもてみは桃ゝ梅や茅乃庵　翁

夏　翁ゝ別〳〵楼をゝ児　嵐雪

庭おの桃梅を眺て左ゝ花の二字みを重て茅庵

初句をゝ図一ゝ行まゝ桃梅をおり行まゝ候を

拾てゝく拾ゝる猿ゝゝ児ともの登てちむとする

を引き上て越る老ゟ我老の指を分ゟ翁ゝ児

夏ゝ我仙力のゟと忌て海ゝく実なあむを

古ね監の古実を指て

秋　月やその許の木社日乃下面　芭

拵人ゟまゝそ　おゝ〳〵の冬ゝ　伯水

許木猿図ゟゝく旅人お宿ゟ乞ゟ図俗図の一歩居ゝ

俄ゝの日史代ゟ系ゟお性ゟ富氏ゝやす

篠の露　裤ゝ子ゟ　茂ゝか　翁

ヒナ　杜丹乃花を和むひろ庭　千川

裤の裔ゟ跨ゟ指ゟゝそ去の庭の辺ゟ花庭羽ゝの

仆を分ゟる自他通ゝ小性の心を写ゟ〳〵自已あむ

なゟ氏ゝて太ゟゝ家名を称ゟ

仰　ひゝゝくと伯ゟる前や中乃峯　翁

ゟゝ茶おちゟ〳〵ゟゝのあと　安世

前のゟゝ市家のひゝゝ上ゟゝ夕ゝゝ後再ゟ雪しの指と

図滴ゟ山の仆をゝて青白のゟゝを立おちつゝ前ゝ

の添ゝを所ゟ宝ゝ翁富曲を兄あいおゝの述ゝ

杜の女の採を祢〳〵て

白菜乃月ゟ立てゟるちゟ〳〵　翁

ゝをちよゝみを流す翁丸　その

ちりあくた清き花見と図 掃除の件を有うもみちゃ
和白の宿さまて日暮の挨拶おこたり一巻一冊と文て逓
へきものあく矢母の祝いうる詞うる作うき

荷兮うて

風乃さむけ予よいあれ山 落梧

合集

よき家つくく雪乃又寒 羽

雪よ兵いく日も止る振舞あれを休憩おき家をよ
梢を山のよき水流く雪又赤ふてをよ兵んは有う
作法よそのるあれる掃い彼皇の収穫を右うり
手本校うる宿よまち去兵私へ

我主へ誘をむと洛の旅宿を尋て

考一一て又七もやうみ田捨券 已百

乃 笠改めむ不彼のさらくれ 冠

み、田舞ト寒ト少ヒ一ア出立そいさ又う人も笠改めひ兵んをよ突越る日
も衣を改むい古借を含て雪ト不彼と寄一てさ

れ之笠の一句をうる 終日風狂のうるは誠を尽す

号乃九まる久升す 梅茶 宿化

白船

去年日そうきせ苔の色 お乃る

其庵のりきこ九まるをすゞ

自他物我の歌会

世を又るよ稲猫乃中の厩久糸 高川

庵記

六兎と教て月も日をさす 立枝

只庵と稲猫ある茶庵の門放て世上を尽う招と図て
かく有うう稲猫の和之名有をて已うる不狗の祝く

一日又の海快を秀ふ

花拾

秋とふ風乃方は春ふ菜久糸 キ角

葉てようくすむ内井戸の月 定良

名之人風の吹き琴を立渡井の水汲う休を有う

萩秀

空や秋奴なを掬れ七多狂狗 角

月まかくやく立之乃 雲 春吹

除夜正会をすむるの成仏の招心掬をえて忘やすく

看病の人を労して

旅つゝ菜い咲々り初しそれ限化

杜盆

旅人多人のかゝるを只香川の菜と[盆]こゝ

庵舎に会す

菜は教よまゝそや村みち 先放

夜も 雨も少もる風乃月 去来

おの風士を旅る挨拶あるを来をく得到松をく

影うる拾と[足盆]限おふ風の月秋を分こゝ

あけむとて

をしきの打ちきしと二つて 廿枉

ぶり 筏まうのくきき捨 次ざ 涼ト

只をしの夜ひの降る拾と[足盆]芥川辺の家をもも

こゝ人捨る辺いもをつくしくあんのんをふ松く

北の市をも倫生庵をきくひ

加仁卯一

六行

足すきれぬ松の暖や冬本立 東旺

雪掃庵すれ乃戸伴 タまゝ梅

布白い俤社の学ぶめんあるを只おこる松と[足盆]

雪は一入足すこゝき休を分ぬこる雪それ乃

軟和をまて造上の松と定こゝ

時く実高き拾てふ洋高の風友と語る

連汐や旅もなひ松の松く ヤハ

一株竹のそぬる 軟 軟 仙呂

只降旅の旬と[足盆]泊打除乃

旅の移て雨ふある拾を分こゝ

天満宮月次初会賀

梅梅松も四季あり秋社月 其二

和漢よ橋をひくる丁々 芳及

小枝を争う行ひて

玉乃水佐て古湯のまゝ(ゝ)

菜の花さく 里乃川上 お枝

△菰蔣

祝部 むつ〳〵と刈て乱れ又そよ〳〵 高川
自祝 おうでい至ぬ草のそよ〳〵 独ト

情句之部を見てかく云むと侘さる姿を見るよ
草おほゝまで繁あれい白むと草のおもを訪て草
白しとうたてかく付さる 高井 ほきくたとくい「刈ましきく
かりまいおくやまぢのまにも白き住吉雪うち

三和 刈さう糸五塵六欲九月尽 源之
褄ぬ袂もさくぬ松 角呂

情句之部を見て九月尽とも云むと作者の場を探
尽さま名所の木ずゑ果〳〵姿と人目さ見ゆる
褄きぬ今いさくぬ松乃えもみるまゝ世を捨て
勿いおきおと思へども至のさむけ忍舎ら旅と見て
古の木をゆて莫木を取さう 自他通 高井 の草仲ほきく

春部 花とれて夜を山乃青ふくゝ 三之
自祝 ひろ社を洗さ寺夕方 温古

仏の三ツ称ゆ夕点机の下涼の快き旅と見さう
他ワキ 面白〳〵墨きを度の 衣更 巴青
他ワキ 楊仕きくえ山やとくきた 八重
白き世乃の楊衣を投て出世乃の山林と捨ふも

水雲月や不二の天気も隔ぬ 青
一夜乃松さ一 樽の松 友 塩立

不二さ三保の松を対〳〵て表紙を見尾しる曲亭
あちさわや莫十徳の隙仕足 二去
風旅もりんく泊も常月 去松
十徳を季会と見物地の常月よもの泊をうそさう
自ワキ 十句 十徳さ楊の麻も夜さ許め 行秋
風の芸も門東さ〳〵 之
麻畑の迎き十徳さてあく招も
ひろ知いろ乃名所の吹帆十
ひて海〳〵よ痛乃明を 之
名点の病の供心さ参念のるさと更さ一句

△我宅賀来年之客

例　よき客や茎立七草の栗　荷

蒜すこしもる秋きく州や　智月

大原成西喪在お笑古猪取の白あるを只家の後乃

栗畑と[空]そこ蒜畑もあり枝豆もふくる作を施くり

落栗のあちこちをさくまし　梅花　浪化

白雨　庇すそれて泊りする月　洒堂

落のみを拾ふ招ある風うき梅やゆるる連家

久むしろまれて月も照反れ[空]んの[空]を好うり

をおやみ仏の初る花の新　化

寝乃梅も冬あるう月　呂風

、

棟竹る家反ほし冬牡丹　浪え

冬梅　明くき空うき雪乃指毛　六松

何よも兵の白きき同一　二色白衣都る伯あり

。

さて手笑のお白は

[空]を[空]ちうき　橙

去根等をめぬる生先

表お流くむきくり乃

毒を枝すおすま乃仮

如氏なるおるえぬ先うお梢のさく

△文壷笑

月雪よ梢先も仏一　梅花　浪化

白雨　まてう一去そ[空]乃家の去　林和

梢仮宇庭おの梢と足て銭市と対う余情世上

正風よ仮一う名や代只の白と足て姿を立花名

仏名をおるもすめさるも白梢さうてあるく

二足よ去壷の不二を加うお　童平

宝　丁の庭乃空よ七文字　在文

二足より不二を指う仲と足名当向う変こ仮来う子を

対うセ句よ俳此之祖芭蕉庵に碑建文の[空]之

打羽す仮唐の梢乃墨画られ　平

及を凌乃打羊一号　有保

後庵梅と八十注ニ云麦中ニ伝法の人を含ニ祝ス
を以て庵の梅や窓と足打掛守り去の件と定て
以て梅の花を賞し号ニ梅を称ス

花も庵をひらく去の日
乃そすゝしき山石去のおも
不易を似く花の月外
偸かれす友みとりする

芝氏按与徒正自祝祖徳良茶被忠ホの心もて
御庇李を分て被亜称する人あり 弔古伝ニ云て
艾氏をとくよ武ニ艾人忌ありて白今改めむの称あり
と云り 偸情もてやく言あるも艾ニ風雅よ於て祖翁
を除とせすると知て祝筹る人ニ倣よ語ふニ

△初会

去んあくに久い妻ニ去ニ 翁
妻
吹よニニ去ニ去乃言花 宜吉
芸サ約ニ云ニ去の妻の往来ふ大乃の招ニ

翁
迎
ニ
弥助

日社まをさすて翁の御ふ キ角
御よこるき去ふの相乃実 文リン
手ニふや赤中の礼ニ年月数 角
手ニ梅をたゝむ玉氏甲 介朱
あゝむ乃二ニの名招陵 墨吉
それ号供社ニて月 去言

茎茉よ二ニ多一麦白田 乙由
御よ招ふ隣る社ニ去 杜菱
祝のあ一 翁初る冻
手試る 宗の喨

と初会の心を作るい行文の私掲ニ

△納会

すゝ掃やられもく病の言軒 翁
ふれて言社ニる枯竹 山店
言家ニて竹垣竹筆も寿法ニひきに講ニひく越)
号狗め二ニの注ニ去ニ手のれ 翁
二ニ 去の竹潤ふすゝきの風 猿水

炬
　炉ぐ〳〵山や納の　庚申　芝子
　柱おろす　俳美小仏　紫和

ユハ
　せく手やいそ島の座も空と余　秋代
　サ行もうおきも冬てる宍　松舟

冰
　手元盃と松乃花うむ　洒堂
　ひさご宗匠琵巴の風　ソ堂

盃と松出て手庇は季去を思ふ李　探梢出画乃
粧客の宴とえ立ひも浮る指を付う

陸をへ余仏よ杏の日
手の席うる友みう

おとく納会の心うてお句と掬す祐史する非之れ有
之度会の会の祠原て也すうきい掬よ女句をお会釈
する事も特之あり会のふ心お出のこそ注仲と云
ろうう句よ新出のふを掬よ作るい発句の礼情之とふ
を武人離旦句面よ会の主の発死ぬ有よ掬よ口をとふこ
表之せぬ時いお会除のおい伺会のきとも存ます」はり

以ハ姿失情後ハ正風才一の法を考め自己の郭之ゝ

〈余奥　多仇峯著

次句
　花一ワうて雪月の枝を立一大　芽茅　荷
ハ句芽木を云残ゝ定ゝ雪ハ低き指処まあゝむ
よ花と云ゝきいたらんあゝむと云て花の姿を奪脱
表ゝう五月の枝をうーよ句よ余力の俗之

芽川
　千数う花そさう冬の梅　宿化
　孤衣の袴よ庵おりの泊　小枝

文月
　和のの花やこの会地乃雑ゝ萩　りお
　田植乃たての〻立う夕呆　嵐枝

初茄
　まろうちの胆や雪乃夜舟　リク
　焉よあるゝ杜社冬　枯　呉天

芭影
　芸史もか茂も許す園前れ　美上
　おふゝ重る周い青の百　仮声

余奥ハ儀式の走終て後付加もあう走席も労す奥祝

ある時する事と梅鉄句合重賀あとまるも又小老
をまくも余異之式の会ゐ忍余異あとふるやうも
あす若弟日余会をあゐおの句ゐ技日の宣ゐ仕後て
指会せてす曲良自立さくくらて仙社指ふ一又
後日あゐ一体の変化な肯をる事余異のんの之等
ま壬世さる一爪の待僕一カ仙の案旦も必余異下略
とて三和を出廿木句千夜も名きゐ限うれ式の
老いま天ゐ始て夕方ゐ残れ一夜ゐ名きも可あ〜む
時、木老調をきよう余異まくるも夕条の句とゐ
余頑之又廿夕条句の梅ゐ名労ゐ情を述て
すゝき風をいろ、梅先
子をうまおていひる歪
式い羽茅ゐ採第一式い月子ゐくつろくおそうう
いろま夜労くうとて史を句ゐ述む老下の投云お
うすや狩ゐ労ぬ有ゐ調る余異あれい越ゐも走う
又くる宝祝ててもすきそ落上の句梅も空ゐあすや

△羽忌

白羽
元禄七

さくふるをま哉ゐ仏乃をきうお 依化

一日も梅乃仲すゐ老いれ仏 夕非

月十五

畠並ゐ主きゐ奈乃花 林和

越

手てやれ云乃る越ゐ初乱 支考

花に五羽ゐ主そき集 拍 鳥伯

八句

声のこい枯世ゐ独 可笹

もれてうそふ冬の案北 庫丈

古仏武兵衛の句梅ゐ同一依式附ゐ国ゐ羽ゐそ

あひ乃ゐま英地の主死時 仰く枝哭捻香 多向ゐ友

ホの記もて梅七むとす弔白乃をき追ゐて句ゐ

英句成ゐん梅ゐかあらふるもあり羽ゐいまゐ数

ホまる事あれいお句も余異起ホ古く梅ゐ羽ゐ

乃ゐ体ゐて有あむと仰もて二ホセとも四俵の依ホれ

そい岸無おゐと云て依ず依ゐ時百のん数多作設て日

秋夜吾　友う名乃秋るやむの白だらに　廿三
　　扎う声の　千里　ゟる　湖夕
告雨青　十二秋い衣ど素ら文余波　二
　　木のそうせれの足西る来月　山リン
惜る子　文実三ツ文梅い西ゟ秋り　二
　　杖う国扇う計あり　芳あり　八条
東山　オセをる苔の下有ゟる世ゟ　捨大
　　哈るの声ょ三ゟの子　二
　　梅も十三子の　お多　千那
　　大神のもも三き冬枯　角上
　　幻乃一むら　枯尾も　茶生
　　ちりくと寺けする　空甲
　　はらの僧葉いろきつて花　八十
　　ゟるも及も　お　ゟやう木　一卅
三年　梅くょ迷をぬ乃の枝う多　文卅
　　一字の秋う月も千舎　二
梅ょ母文の越う街ょ千舎を荷て一字のはせ芳

侘を仮て去春一刻の古語を文とう曲言ゝ
　　唉孫の手をよ母や今の安度　百里
　　閉あょ外の秋る月　ゟ　二
　　ゟるや花もそこちも久り暁　意平
　　山も眠を覚す　ゟ　二
　　ゟや古翁風狂ちうち多　杉風
　　ゟ本の笑まいや月の雲　ヤハ
　　大津絵の筆もおけ三十三ことセ　老陳　祇
　　去きこい去をう三ゟる松ゟ
白扇　さ〻波や井阪ょおる景気　支考
　　哈るゟ　ゟ面の石もやく　杭の風　宿化
久星　梅くの越秋るや古今抄　丁牧
　　てこそ　ゟるゟのをを　比泥
侘や天ゟ星地ょ梅花　笑吹
　　こゟの梅そ地の酒ゟ風　狂奥
梅の名や一月ゟて梅。仏　花ラ
　　ほるとうふ多も武時　百了

香取　春もやくりき調ふ月と梅　翁
十句　門のさゝれし一乃の古苔　除風
古池や蛙飛こむ水の音　芭蕉
宮のあり〳〵月の拝殿　素堂
時鳥声横たふや矢の上　同
くもり日ほし一叢の赤つゝじ　同
花もまた吹るゝ山の吐ふう　独吟
陰のするひあれまつの雫　風
払〳〵とすゝ虫ちるよ往来の足　八
八句　雪こゝろと合する　机の手拍子　同
先人名集　雑あくや数の捨まの芝浅　仙化
十句　菜花の笠よ往来の足　八
松島や鶴さへ鳴ぬ月五拾　ソラ
月五拾払とさらされの表　八
雪やまさ捨乃二足声　正秀

花乃花うつすや臼　洒堂
三日月や雪ふり〳〵る森猪イ拙
狗のまあ〳〵まお山の花　洒
みの
大病中の旅や秋一追善
路地を迫をして時鳥のさびを歎ら休と兄哲さう
六花　初雪や水仙のその捨ひ花　翁
五高　抱うこをさをあるふ楽哉　素水
六内　市人うりそせもの雪を　狂夫
初乃町を　巴峰
名　勇哉より老軍出よ一吉の山　芝二
十高　ちる名い打すゝ花よをちよ　龍文
大友の乱筆跡の難大落よの仮あと思ふ古寿の
衰よりも出々む大花をちらし戦も今の花野哉
のちる名のこ初々と女山の祝おを有さう

秋の部第 今は押分入てる板うち 翁
行セて生きも老乃世成 山幸
安永二葉太祇の老之歌は拠起仙よう女比よの
名もやされとも 俗称 のそく邪ふ多くてめてそ
△古人の句 芝も常作之 多行者
月う柄をさ〜そうよき国ぶ 宗瀧
あち
枝のをるそうな夜の秋の庵 我人
△文通を笛之
文通句の拠笛之〜挟拐句の拠ま常作之さるを
注文文を宛そう意を作いう句まなるま
まあより芭も拠句柄のおと名張さるよう記ひそ之
若比すう川さ芭と少てやきす
笛まれて栗のそ花さ記名ぶ 杜国
栗 何れのまう〜明ふ多る 悼 多朔
只栗あ多柿の己まれの形容をおう
あち 麦を名れ花よおれぬ 一角巳 ソ里

まをうさ〜そう冬の浮を ヤ水
「式文人の子伝て序ふをう人宛き我友も吟ム
吟ふ〜それとも只枝〜を又法て作を行そをえよ
△述懐 いろ花おおおあそる花作之
句 名ふそう人もきれ初〜れ 翁
逝 世も仕分そ多る麦のあち 許六
去てふとるあて杜国菜刻ぶ 翁
枝そさひ〜き於る一本 芥行
式乃やでく人句〜は秋の乳 翁
艾使 故の畑れ木そう芳 作之
△名木
何ふそもむさ〜 翁
一 あお似そう三股の舟 翁
さよひ〜名のうまそうてよ意の山 乃子
山下 風の役と丁ふ山セ世 巴今
翌時の周をうえよやでく周 翁
舟周ふる あまの住大 芥住

越　二上や雪より北の秋の立　陸白
　　ゆくりなくも川みるおくり。支考
　　やゝ弱る日々の名木を詰さるも又捨さるもあり
笈　　春風や麦の中行く水の音　木琴
牧田川　　除そいさむ花の糸口　羅
越　　和の花乃初雪嶮ぬ時も　老
知花　　ひるさく空よ称る花乃　但右
　　哀れなる名木の優さを称さ文名木を放すを決てかし
　　因之ミお表おもい称さ称を付るは只称張ておく
　　お疾一色とするおゝ仮令るゝ神尺意象ゑ
　　和木の志を含おる白面さ彫さる河あき附い称さ
　　文河を分放するきを河てをゝ姿先情後乃
　　故心を比表和の称を又ろてるゝ含ある対放
　　るゝとある人あり　過則勿悔改
　　△題発句　称の疑念を掛るあり
　　仲秋雨懐故人

北白　　名月や笹ふく風のまれを待　陸子
　　宵さ花のさ〳〵起ておる面をまれをまそ氏打消ゝ
柿十注　　八重うさく柔ぬ柿の重ぶ　梅笑二
他比特　　茶も小夜うさ柔ぬ　号
　　重乃もそゝ〳〵ぬ柿花　七ろ
一乃　　おてゐく什め号乃宝　二
　　柏根もおうろやゝ　羽拙
一笹　　人のひろれをおこす　号　二
　　雀袖之急やく柿のた本も　札川
書実注　　哭うまふ乃号のたて　二
　　泥及もろ衣の風乃空柿ろふ　有梁
姿情、　　声いおやぬ号の叶分　二
　　思かこう育て柿の白さふ　川号
伽比地　　号文子ゝ母のやふ人　二
　　周ろき月ゝ之ゝや柿花　芝人
　　祝りて　　号の彩　二

花さくや　吉野の山の　日杵
云り迄　奈良のさひもさすらも　芝二

持分乃衣裳ぞ〳〵や　柳花　仲志
変化、　笠の梁ぅ交るまゝの子　二

柳花さくやのつめよ　小刀　泊風
陰式、　ふかり〳〵ぅ篠ぅ　芳　二

△四季

一

古池や　蛙飛こむ　水の音　芭
芝居の茶そうる　き用

涼しさの　激作るう　水車　洁風
根本　青簾うまを　足おさ　野月　芭

名

あれくて　来い由ゆく　秋分ぶ　雅堆
あるう　物を　掬村と　定て　字を　芭
跡をる　哥のそ　上足る　風情　さなう
秋白

風乃　一日吹てを　ょまろう　園友
爲も　文る　里の　麦秀　乙由

ぬ代一和仕立の句ふ　雑　及用を　足歩て　姿を　変ふ
四キの　猶ぃ七部の　注ぇ　要くする　所ぇ　変ぇ　挙す
及云ぇ□■□■四下あるもの　最　後　迄を　足定て　他ぇふれ
九変曲　眺望の句ぃく　及　越を　足定て　他ぇふれ
ぬ振ぇ　布ぅ　又一段　句をする　ぅ　ぃ　ぃ　柄ぇ　廿七葉　六句
ぇ物　あぐ　ぃ物を　定物　あぅの　時　名を　付ょ　氏　あぁ　ぁ　ぁを
依て　弱ぇ　田沢　爲ぇ　杜　柳　ぁを　付ょ　猶　とんぼさる
ぇ　季　景　おぇ　又を　比　余　れの句ぇ

村うすむ　去乃　陽
えちぐし　行き月の　門先

ぬ代一　衆　色ぇ　向て　只　ぇ　ぃ　ぃ　ぃ

案凡　何とあるく笑ふく風も哀し　杉風
別　　白のそれ乃を牛拭ふ也。　芭
本白い這ふのふさひき恃あるを[挽脊]して宋ある怖の用
を云生哀字を除めそうらくらいお白規おるで平
白ヨ塗む生雑掬の対ろ。○[諸家]おのタイト正ちざう

△掬の容乃あぬるの

[少校老]掬の力一えんお白の余情を云せて対のヲ掬あくえ
[出ヨ]を掬せむとする対い一芭の中ま一ヒのきお之句

[平安北カ仙]　　[出ま手治武松下ニテリ]

三ヒ　ぱまま　ぱまま
ろるよ新日寺ろ　竹格子　宸花
紙の乃矣をえ紙のろうを紙のろうを　去
祇おおりをとる祇おおりをとる　去
いそうるもいそうるも先信ふ去
めろろ次するめろろ次するきまよの風
小いそうーさるも小いそうーさるも　去

芭村曰史比去来いさう多き作去多おくる掬かと
セむいいとたやするへきを自の信ヨをもうまてや新
のさまをを示る雑掬の手ヨそ信新もかくやかと
捻亜されるも私んやすやちかむし「私老うすく
去の新さと低並山まいえる処
▲祖義書ヨ掬い附白才一のおと示ふ手収枝の祖と
去来先を示ろ祖尺何るをりて志ろ一依式
六掬を考ろ時新のをほへきろ才まろる手
みと見ち今人何そやろセヨへき

屋保五拗留ままりろ比人と
附きのあえむと舟さ一ろるヨ

菫　海きまて名の声かのうま白一　箱
　　申よくちらをあふる盃　相葉
本句は海に菫を見て名のおくかる日を止てオこえる
ま名の事　改毎ま作くお祖の白ふの反な見るて
未考ふておるうロムを声反ま白一と作る曲意
されい反透見る名の海を定法岩波先まあこみ
その底の風情もて自字の姿を形ま一きを古洞もそ
おさまお形一仰ち里ま分そらまお和入門そ箱の
改法をきぬく箱も赤反図きとひおお面
あれい時里ま許されむ分る社化社ま山形あり
されも振葉ふきろく程ろまはそ日ま
日時振の冬日まかくる分柄猫一もおきを又よ山
某い文時の云挨を安永ぼまる周文い芝某命と
男陸奥い三カ仙もて作く梓ちおく箱の時い古洞
の人ち交され佛ままもて会釈もおそむ今芭つ
一回の世ふて吉家の叙述を明ま立へき時あれそ

仮令箱の許なるやも文意あとおい箱枝ま一
されい文時の二ま字ま矢享式を教ま一ま子い法ま一ま
糺よとの遠箱ふすや法思子春ま一

十七　明里や梶定如山っつ一　千角
　　附い母ま一法きまの新　去来
試ろの猫い子神ち命く幸山の仲景のうきふと
遊句するたおるをいうあれい仰ち梶を好る
そ晋ま一句ま式を思一人あれい
面きまやけふら箱の改法いうをきま一ま
人ちおく古洞の久く別ほまる一まお形い伝情
まそ見るき故ま芭ふの法ま一ま守ふ言不解
典君子所衛あれい帝ま遊むへきふ反ま式ま

杜　院くまお振人もあ一都の花　芭二
　　まり猫の思一千り箱一り和
本句ま金ま杜ま箱ま一ま院ま設ま仲心実ま振せむ
まへは句ま梶林下の院店ま移動ま一ま代人代る

一九五

一九六

名そ仮令て面ともきるそ依生世ゝ作ゝ者之面寸と句を記する人あり大あるひらそ之面字以句の後よおく字ゝるそ依云い処面ゝ抜よかきて作るそそうー世よ句字面ゝ特投あとて或い和物附るそ式を押字抱字のさくあるそいそめ人の抜面そ

▲コハ古式の俳ゝ仲吉ゝて面るを更比句字面ト云弱ゝ古役ゝ句掲仮名面行以の附ゝ者之句字面ま寸ゝるあるをそい古式もよくそめ人の抜面そと許されーるそて更ゝ

連弁亜我独吟
月あしー　もあの句よよその空
雲流ゝー　去家ある俳ゝ更るまの厂ら寄
初什ゝ和物千句　波を　松の伯舟
さお姫のそろやひの宝の内
雑を　ゑとする　新乃　号
まのま天下ゝ云ある附ゝ

昔の連衆方かれいきて我家の他社ゝを辞面仲云面仮句掲ゝる更成いまく只更ゝ之句ゝ越よ仕てな面もセよとのるくさるゝ比更昔の字役を引出て句掲辞面の附ゝ者之必仲字面と宝又更字面セむらいと云字の後ゝて字ま字を入物仮ゝて句ゝ面とある心ゝセ以り行役

いくゝ後を仲云そ続さる句の新仮さる猶ゝあるほ陶もさく字ゝぬ時ゝお仮ゝ句の時ゝ気も以者之ありしを一方を捜ゝて他ゝを許方ゝお句とそるとの方ゝいは者之の句字そもまるーー

さくゝ更ゝの面ゝそ面ゝきるそ欠まーきるそ

▲者之限すて面ゝ面の句ゝ去役ゝ句係ゝて付よきおくされゝ更ゝの更ゝんの更ゝ面ゝ更ゝの面ゝ

新ゝようて用ゝきるそゝそ

本云　幸さきの松ゝ花ゝう掛ゝて

代本句の席云を去ゝ付ゝ本句と者之と平句との

ろをおもふも本句の一句の中に曲をふるむすび
はもと花に曲ありて松の緑そへるこそ
▲うくひすの松の緑を詠せもとそはさんの花をさして
一句を化粧する而最曲中の妙也
きこ　手傳の松い去の秋緑そへて
此二字の抜く去句花の一字を抜されい本句よう
聞く松の緑ニ言ハ抜て手句よきを緑とそくる不言ニ
▲月秋の松外の去々きを緑とそくる不言ニ
一手句　うくひすの松を去の秋又反て
此ニ只去の行きのくもれい曲句ニ言ハ手句の平句ニ
▲手句ハ平生作る地の句也るそ新面の雅俗よ
拘す只花有る作を以て第一仏の光明良ハみ
の作れニ手句ニ拘ふの事下也事を拘ふの作ト
作るニ文ニ言ニ一作ニもれを去の位をつく
【筆】去ニの姿を去る時い字ニ拘ふろ字ニ拘ふても去
留るニ惜て句字留いふまても乃ふまし　上下四巻

【筆】去ニ一作おて去るニ作ニ拘ふ字ニ拘ふ
分所るニそいふ以て留る句ニ多くする
るニ只緑の留ちるやうニて
出る松ニセひおニ字留もあニ句留ニ
句月を以出ニ字留もあニ仏留ニそも留ニて
▲今月ニを言ニ作ニ法をまをふるニ一
小則ハ留ニかニ名月をニるハ
○又云作　今尺ニ　今天拾自已　今自已天拾　今タ千人
○不用作　今上云云　今上中五七　今中七云　今下五云
九代字の法ニて作る時ニ言分て句ニ平句ニ要る
ニ古きおよ仏留い仏辞をろニ
ソ一ニ平ある古式を写作る
次ニ及ニ二条のおニ教句一や
仏留そもお合ある事ニ平句ニ作ニ
ふるお留ニ多ク所ニ去ニ辞の係結をて去ニ
とセ寸留の文字ニ拘ニ一作ある

文中て面ニ通ニ正格文余の通い付ニ除て変格の
世ニ云之家ニ多ク八名の中ニ入ル足立ハ名い神いそく成中ニ
数件あれ共多名い知るむと足立ニ集されて
注句を為て自然セヨ 「 ハ平句ニ作書ニ下ク

△足立

裕 招らの更のんも多れて 裕
――ほうの中――
とふべきを掬の俯の指焼ニ対して更ニ比ニ不言之
一 聖ら舞も私ロの里を立ちて 、
――をされい――
巴恋ニ多きを名不のそく作ニ不作名之
笈 七夕の八日をおのさひくて 、
――を斤台て

発句弁 救のすの水あさう俗来て 許ハ
五老日 ――を浸る水の――おとする
十人ニ十人之漢字抜て題云るかれとも世月
式時を考す何ると名つる社ロをりれ

字配 下我の実ニ一筋思く記して 、
五老日寺ニの句を付へきおき字を抜ニ式寸
三の皆おい悪字ニて是字服ニ仕
――の抜ニ――の――― ハ地ニ
亨 救人の子ニ大名の萩さきて 支考
――も――もえて
大名の萩庭ニ多ク咲て放ニの庭あり〜く降ニ
衣被害件さ多〜五氏の子ニと受寸式物ニも
救大名の下ニ多ニや恨さ抜ニ仕ニ対ニ
、 義人の子ニ隣ニ萩咲て 、
――もちの末て
隣のだての折来る雪の門取て彼ハ不河ニ萩のも
を比舎りとひとも隣と手る村い地ニ名ト八
作者のそく作ニ庭対てえメりるさつり
西花 此秋を京庭住居ニ守られて 、
斉まて
そこ円と秋を掛ケるを困ニうと云ある足立之

西花　夕旅の小家かな今人恵子　ちよ考
、　笠きこと笠きぬ人の連立て　、
こし人と　ホの一
や生ありと注あるの子供抒生て　、
越　近
仏壇の老爺の戸口ありて　、
市両　乃姓をきらふ子供のあわれ　ヤ
小弓　秋祭よ小家なる人あて　無佐
白加　山里いこえあくまくまで　小枝
松窓　跡きえ月鼠ちつきおそて　牧子
赤山　わり列もむらでの笠の老家　立枝
——のうつくしく——

七さと　陳ざむ時いろわりまを訪て　之仲
ツモ　唐おりも今の紙衣を又被て　六択
東花　仮茨のこやなる小袖のあれおて　万戸
、　化さそと皇子をとむと——　のそき
シ、　去の日孔山風の形えて　知角
、　入月と出日と山は舞多て　山リン
かも　もそこやも垂きぬ指を拍垂て　正位
会入て

三匹　町並のさも一軒宛の抜て　乙由
山ノ下　茸狩の抜いり灯け被て　芭由
ヤワ　さわ〳〵あち〳〵抜の出家へ切て　秋竹
斉　徒りを抜の大造よあくめて　左角
去良　菊人の能之抜をさをてり和
朴　小竹京ちと笑抜洗ふて　三竹
、　村色の空を洗ときぬきて　砂的
、　俳子のおそふ時も抜よめて　衆町
三お　園商売芳の糸を笠ふ出て　有栞

、　今の生るみそむの梢冬行て　麦及
、　小石抜よ供の垂石の意を　茶徐
、　言木屋のいおそ白い抜ふひて　宇屋
、　涼ふも松よ雪の上ふて　周秋
渭　千今の去を羽木の歩まへて　立和
、　互ふやの門を断よ出代て　李里
小文　ふ時のふてさひき抜の世よ　芥
枯　り灯のおよ声むの山よ　文芳
杉百　玲をて出されいるのふれかよ　支秀

来六　去年とてまをうつて喉よ　漱瞳
　　とんのうつうもおい——
是昇　千金もおで一句のそ金し　巳陸
之　羽ろうさのこひ——
あう　夜袴祖ら完座まめてつむ　ろ羽
らむ　——り文あるみの脇うむ　の英
拾　也く翅いく夜あるみの脇うむ　の英
　　——をめろ——
李扶　掃まて伯る雪をや国ふむ　跡通
　　ろく布る雪を汗くま掃まて
随　ま茅郡い夜のよんんのむみむ　千楠
　　——かもの件あて
小弓　秋金と中を連そく落みむ　東推
　　——のかき男ふあよ——
冬　花蘇る背のおこ峡久り　卜ふ
用言　——肥——
白灰　歌次のほよ余字をのさくも　伯ノ
　　——を云りう

文選　雲章あく宮こいあん施のあ。　始像
　　——もく宮こいあん施のあ。
就　古いあと笑まてくう人のあ。　陸古
　　「の人い形之」てう人のあ。
　　氏松こそ月さ之校るみ。行を
　　——面白うめぬ——
三ツ五　もあ。笛い本白い強いる之角のあと云よ
やすをお白のもあ。ま之い弁之角もあと
那ろんて弓之のもあ。
左伝　本白の強い意を作る強い弓之のもあ。
弓之のもあ。い実を作る強い弓之角もあ。伝もく
▲表云尾二　義の伝書とあれと古伝之弓と床とこの時
うもうろうのあ。あ。意つまさる伽固の強あき
る建白之意実の市を入るを之こ又もあ。を
古来辞とんろれと氏ろもあ。い用言之
ひさ　氏角をのワやくこ伯——声の豊　強ス
伴云　——声ろまく——

〈天地と作ることを自己として作者を好む例

拾　まの食傷夜やく眺――そろ――人ありて
多夫宅人の目ごと門ごとる承伝も月夜の眺ご
称さもむく自己のこをおせとる本意く
七十　門ちんの梅色ごかなむ月ごえて
――れむとる去のおめて
廿　号を三号塗ごそ追生――て乙女
――の――それりて
三六六　村雲ご月のきりもをえるまて伯父
――火をさくれて
東花　新ろく孔称い陥ごれ称の眠おて
陥ろ――く惟ごれ称の眠おて
東二　茶傘をこを明ご来て支店
――ご――ご――て
五夜　ちる時の尾花ご秋も誘れて、
ちりてやく――も――ご――

笠　新の後出め俗りご門入セて、
越　称称の二字を称ご――をき門出て
――ふ泊きの――ご――
、　指ちる成り秋をとあるまて
五月　去のやくりいふさ――と関居て沿天
――空セきちの時もく――
初ごあるご月の時ちる泊て宇中
八夕　三ご月の空ご泊て
山ト　秋風ご秋中の尿を動れて昔通
――の――吹左て
フリ　あの山乃称をこと月出て村女
――ふろ――
汲名　ん病をさらセい尾ご称汲て和七
――の内ろ――
称指ろ架ご称仕を日ろセて杜菱
秋風　――を――の正来て

名匿　雲うごる日を冬月のおくまで　安家
　――ユ――さ――出て
楠お　雲あく我を　君　囚ちる　空う――の　花つ
　やふ入の匿ユうか　髪結て　履揺
間
　――を川川て
ユお　乙雲の巣を雲ユ冬られて　杉夫
　――い――のすユ都て
　雲雲あく日あも蜂れユ　巴静
よ　――ろう――　老う
　ひちりきの穴より　杜い雲　牧童
タソ　ちむ　――ヨユ人もクく杜文て
思ア　麻の角能のおろくユ　為めむ　雪杉
　――おく時――
翁　井序　行ぬユ月い出ユク　翁
クク　――うらぬ　ちち月出て
冬　楼桧山家乃仲を木のそふる　亜立
用云　――ちるユ山家の仲ええて

和衣　ほうむ　葬ユ又れい　翁出――　牧童
　――えてみる中ユ――
　〈自己ユ作るときを天拾まして作ふ之対ふる仲
菊松　雪のそい栗をの乱人を歴めて　翁
弦行いうきくと向ふユ花おおふあく仏ユそ
のむへれと言れ己も技皆之ほうと翁やきれ
　――を――　――の――ユて広地く
壬　一番鶏の来てわる松ふて、
　手をふる松ユ春のおの翁のおて
後旅　一とセの仕事麦ユをさまりて、
　――を――　和上て
花故　日面ユ笠を並ふる康ユて、
　――投亜――おて
奥　夕食ユ仲ふお面ユ月出て、
　夕月の月ユ伏ひい　仏ひて
　松をぬく力ユ君ふ子の日ユて　我人
　君ふ代い子日の松りて

廿九 股引のおろ〳〵めく〳〵川越て 凡北
寄先 ——をうけもあす—— 不ニ
尾の宮明るとを急の元りて
夕コ 飛鳥の風やむ後ニ舳老て 指風
——ニ候を 払——
ひさ 引捨〳〵ない枇杷の汁方ニて 中水
寄なひそのの汁ニ川捨て
冬固 四季の春とまる雪うきて 安伝
——を雪うきのつゐ止れて
七十 砂川ニ老すお冬のかるむきて 青山
——を——けて
後号 珠玉の冷る札を押やりて 支考
——れ〳〵れ——
古今 やふ人の純老ニ門の萩咲て 、
——ニセて
朱西 後舟世ニ尺四ち——ち 人待て 、

雑 今をうて迎さぬ雪もれて 渓石
——うるとるもおく——
朱花 家根葺のみ秋捨るもれて 蓼仁
——西うもるとうみ秋て
、 まふ世乃もて矢ニよの更て 觚浪
——ニよの文りい矢——て
文衣 出定のめり待ニ行裤哉て 野古
——一おセ——
間 花ニ西く名立い梢の雪洗て 之仲
——白き松利て
ふお そむのニ衣徒の雫をあてうて 志推
——を——方ニ待只て
、 まふの祖考ニ待ち勢出て 玄致
——西をお——
、 明る月も曲指い秋中ニて 仙枝
——ニうれあて
明ちもすー 帽子の下ニ裕の秋い来て 嵐青
——ニの——

文望　曙の秋山の妻よ安らえて　幸平
　　秋も山もきの暮の雲——
　　ときの声ろと山風吹くなり　許六
コハ　——嵐うき——
クイ
コセム　頼るまさひき杖の数あるむ　小枝
ろむ　おさふる杖よ頼のまゝて
分考　黄菊の中よりもおや白もむ　文粉
　　——明の空を見て
、　菊去て秋もうき杖の左仏ミ　ヤハ
ミ　——いわ屋の苔を刈せて
白足　荷の後ろ一人ワ有ふ夜二階　次我
休云　——も人も夜せて医ろ——

〈古語裁入并文法ニて作ル例

十七　ひ〳〵と蹄よ暗の雪ふりて　翁
踏花ニ蹄香ニ沽を雪ふて　奪胡蝶
ふり舞ニ袖をりて花を踏足ー〳〵ふぬく
難　留夫ふそ後〳〵ろ雲の月を見て　素拙

不義而富且貴於我如浮雲ニ自他ー〳〵
白舟　自刎する後ろ杖を憐ろ　支考
献句附後和形新自お後ろ押写ろ
西花　新ろ柳ろ初ろ雨ありぬ衣をー〳〵
古今　雅ろ初ろ新ろまりてまへむうろたや
ろ君ろ未ろむニ及ばー〳〵

焦　義人生天のお衣袴ろ着て　団東
君ろ代ろ天のそ衣袴ろ着ては寿を指ろ
素堂　天つ風雲も落ろ雁の友待て　雅望
天ろ風雲の通路のひろさを借ろ
蛇好　誰やらう霞ろ後ろ生を旅立て　芳山
新をいろまろと云ろた山ろと云ろ寿を今ろ
雑　桃ろろ花もおろもおろろ一般
園の古ろの杖の夕ろれニ身を孫ろ
休　山夜の空ろめふへき苔もあー。　嵐ラ
空ろめふへき苔もあー。嵐ラ山夜ろ空ろ

めふまもあ〳〵と設雑〳〵する不作名く

西花　む〳〵心の思きそて活るもの也。支考
いふきぬおを思きさと名を会と作て言を有
とり日考の挿字要無あれも作名く
本出　陪もまゝ字てめ明之文　莽
許圣士用の陪又く急卒とうふきを特ものも
字と陪てそとり「陪む」もよそ〳〵手自あむ

物　物の木とあふく宿を仮松　添ト
物侍とあふく宿をは和考と人の考を指とり
東山　さを乱るる〳〵名めら旅衣　推之
う〳〵衣きつ別てはうとをとうとう

東五　ゆう〳〵考も冷も打動も　支考
思を滞滞物伝の法とひ許する時いきこの二留く
又急卒の法ともふへきや書も活も打動もと云て
結許と五拍二字を取す文法い許圣とあり家と
いそむ文法も句格も活て打ちを好むさあ

らて文句文字の用云用あれい易てなへき法
格の用うて思て思きい句作の云用あむ如
▲文法句格かて作る句い皆考と作く已上の中ま文作
仮多くれとも文法といて初いい雅きみとふふも
とお目を立寸限一等てう才とあ〳〵でも老中
表句多きい手拘考い和て作の芸用を着きる　あむ
△五云と不用の用法を入る例
不用の用いおの句と活て入用あ
最有用の云て代用ある時いる句言相と歩也る作
をふこあるも句の上ま云用の法とのあす
守作　陪考と拙用の斗乃抗ぬけて　莽
許句思考と陪文句と比い斗の芳活〳〵り
カレマ　月我日あきま丑よ振れて、
莽　号の白病て来〳〵戸を明て、
ハタ　月ま〳〵と角力と稽技技て、
陪　衣うの林いるあそりて、

雑
一
東六
小弓
三ヵ
間
貢
東亮
雲
あ
十七
六行
拾
廿
八号
二六ヵ

たつ手の吹をそれいろつけて　キ角
新宮ニ先ンう毋衣きそ　トヨ
桑の実ニ十里ホるく　川越て　大川
来ゆく　水苗代ニセき止て　東野
松風の夜ニ夢を二千立て　一空
白雲のをよる夜ニ満妄て　拡ル
野もりと仮ハれ雲の笛ヶ列て　唐之
丁の声仁湖の俤乃ちくニ　彼ち
雪ニうを乃国をこホすーむ　支考
夕ゆまニ保お夜てうーむ　冬ニ文
去ゆきニろまいそるみろきおを　伯芝
そえ麦のさら求るく人もうヌ　ヤハ
蓋菱のろうをちうを掃セで　采水
雨を考く山ニうちりれや　珠石
雪安く仲ハた帆の——　葵十
これやハあれぞやそを着ー句あれ　チヤニヨツテ

何しがと云ふんと又ニュお含の句を着ーんチャうとふ
ふるる雪ニ用ろるに大方チヤうのんこゝり
蕨　三笠ニ雪中の松乃面白や　支考
雪のやハ枝はやハ数へ出るニ自己天狗不用の
三をろるれの何郡へ入るもー式教徒の事ニ多ー
東老　乃水はいさゝかの関のろもの　指サン
八号　三月は甲ノの秋の落もの　文十
、　卿月ま二李あの山もの——　晩翠
打杖を在ニ宮ろるみの色　千川
雑　水ニ雪拍子の松乃加月　影菜
凡　日本ニろ意ふの筆　芳ふ
洗物ニつけて先祖のお俗　参耳
ニ何ろあうつしの花型　リホ

△上中七云
拡　ハ君と名をふ竹の事所ニて　羽
友俗　雪のおう待を降る松てて　雪俗

ひさ　たひ人の記きやくまちされて　出發
冬川　芦鶴のふえを西く夜　支考
西冬　ゆくセて空にお月の入る迄
白多　家の女房ふとんは引ぬ　、
ム、　狀ちんもいるぬ仮宮の下駄て　芝二
東花　くれのセき一粒ゝ月空えて　一休
山中　こそあれ一石もうまれ玉ひて　芭蕉
ヤウ　晒をあしたそのの往そて　夕市
むかし　ゆきの日をそろはう稲川て　惣也
ムお　夜通しる狐と布引の年き　芭蕉
竹秋　り行の出ぬ内の月もさえて　左候
柳　あおの作もあめ麻ゆて　万里
、　おもの男て郎やさくもむ　南村
東冬　葉川う恵ム我をまろうも　及来
君　二夜いねもセで落の眠うう　乙彳
東山　二夜にひろと空ム世く月　木因

ム宅九十五りそお行うう上中ム不用の用意
を入るい序者ム宅一あ〻の出雲の尾花日中ム長
き夜を独ねひしる狐の足音ろうそ一盃あく人の通
てたゞぬ句を作る狐ある作をおすそあふ

△中七ム

雲光　さしお踊ム急くて布搗て　羽
除　青の月まくれるあム　、
芳　松生我カ一ム春き角ふりて　去来
曇　さひ人も一歩ゆ時ム　芽ふ　支考
少文　秋庭夜山を後ム去られて　山店
寄　かる時を植る時より田ゆれて　乙由
閻　一家い夜を辞ム布おりて　炙川
馬　よの中の初日のうこの去乐ム　二竹
友　君うまいまちの白ム　去芝
梅山　馬賊殺去のおとて白めて　り由
白足　糸竹ム軽広帯を走そくらむ　山樓

八号　篇毋丑は吸するちもの。行る
是影　春る時も旅の袖と麻衣何声
　〈下五云
一　清水出る庵の小草と秋立て　羽
仰　初月の今古葉とたくらして　蓍白
白鳥　去刀とお代の笠社寒来て　支考
西冬　天空るまでと庭久のうとて、
三お　時竹の久い指こと描云て　左把
、　ころと稲する声と母をとて　九依
東花　小俗之独立の上と森静て　高川
、　井戸拡う田のますれ実投て　弟保
桃　献立も南老春ふ風よ　去来
莖　田ラ口る仲う寺の　山リン
死乱　人息の天空寒雪　相梁
射　乃至の日ろくかそる。　、
八号　目代の屋敷地うき。　秀月　吹梁

サル　歌更て寒あしさる。　月今　や水
サ上葉　よ留い月今よ麦立る　野軍に人と偽句を作る之
▲芭蕉非之よ留い俗句も云俗もあり　ば五八時俗
あるそ又下中上と及るそいは　俗句いよ
きそあてきるそへ九俗句い上五ら中七み治ら
往返会を入るおく後に歌更表表しそう　月今よ
片八月今よ歌更表表しそうトなり「表之々ら歌
句き蒸月今よ片八月今よ歌更之　歌之々ら品
々ト及るそよ五俗之ある　のるきホのちく体云
ら続く辞あるもの決て禁俗するを寺

寺白　魁て毋衣表表一段表ら　景天
之お　孫帽ろ之被之笠之白子号　君仲
十七　朝発五ら陸乃七云来　新水

□歌留句の事之ら之留セめるそと人く知れん
宛　歌留の句之事之ら之留セめるそと人く知れん
とお云い之えそう俗ぶ　芭蕉之俗宝のぶそ

まてな重ね方とあくたひらあとくいふ又立ちるこ
教ふんのふきて一ツ分てまて留ある
▲只松出要決の云心若よう教ふるこの名目を
分られも故兵法熟辞まて用ふまく候ト仲
云よう孫ト二条ニ宮ニ云仲宮法モ教法モ等仲
つきのふそえおふ一又ていと上のまを下へ
云ふる辞ふれい故ふ法ふて文ニ云の
連ふれふ一要決い君のさまふぬまを拳る
彼伯宮ト云おふるふの使句ニて的ニ

木のトいけも熟そさふ君
的く木る人い物る去風変
楼楼を重する祝の時ニて言ホ
只変の枯柱を見る月ふ伯ホ
人ちふ一ニ時句学ワくソを
君のふい人の教ふるるセて伯役
月ホ候日もさくる果の山路ふ司熟

君ふくめそ伯も志ふ的 苔ニ
才ふそ宮の市もまふそて 友体

□ニお

[合点] 文章曰家旦の祝句ニ古よりニおとうるあり
ニ才和合するんく
▲ニおの祝古来より多き中ニ武況ニ種ニは
[合点] 君ふた句の口ニ句ハ生ふる教ふて
おの手柄あーたくいふなのきひくいふふそ
只ニ句ニ句千句の活をちもるく 文的
▲又ニ熟向句作ホ除ハく力を入よとふるふ世ニ
云古一くおニ元合ニ只ニ句ニて物をとる捨
あー芳より人句のニおとて調ふ色とも陳の
ニおニかふるいと姉ふれい歴ニ号ふきるく

ぬけそ秀の弘ちる古刀の一ふ加 志ふ
君ふ矢の根ニ伯き杜風 実務
伯き石いさ事ニ伸て 君

コハ広室の外に翁ありて三ヲの格を考ふるやうなるを考へあむと云ふ生ます

翁

刃不二や十月時く二ヲの根 ヲ至
かさゝけもさうをしる 雷店
おさゝけ子社宮おもてに翁
。
コハ 寸法七 十四
まゝや蜜柴ヲ止る神矢の根 許六
石燕乃本一ヲ 觧 木琴
斜りヲ斗の田鞆のうかひて 朱独
大谷の水のひきやきそ始り由
うし米配る六尸人の初や 六
年美ヲ吉田ヲ博や銚うむ 英逸
代おの承社一字や事始 、
さゝ植めるむ森オ天 翹 独
平博の屯ヲをの花又えて 由
初室や大んある不二の雪 独
なのふゝきを怖る門松 徐オ
定頼おふ炊う蜷みのあるる 六

大福の茶い越おの始し オ
和花 翁ヲ大 逸
三月ヲ実の岳松 英
翁田寿祝の吉お哲のつう世ヲの人を病伎き
勇伎あるも月終の武士のまつきく嬰
ヘンロキ 佐の字ヲ声多きはしゐの去 由
ス保十 ふゝくりおす正月の時 独
三月 及名老の跟の話も考佐て 六
野山 老ゝとやま苗よるちの門 キ角
大多三ヶ月 老のふ年ふきを庭の下茨 又リ
家老のクをもく署の月時て キ凡
添おい木のうは早乃老ゝ 角
小れの羽ある始ゐる山あ
守末人ヲ云ふふ宗祇伯やむ リ
芝苔苗哀ヲ時の芸ヲ 、
歌の投を杉菜ふる声 凡
橋井ふ松を承ヲひねて 角

▲掲を能楽座の宴と又五位の文句をたち入くり
をこうまき出又通章を平いく答ゑ

□六句表

冬　フいろ足とつまあり牛をうりあれ　西笠
　、格大うあるる柏ホ乃　松　カラ
ア木枕川土忠ニ髪を奉仕て　章五
　、松笠う宮をやつすお秀　ト玉
　○白くまニ陰うもむ月の海　菊
　　花ニもーをさる氏草山　ヤ水
　　ニ表ニ地名を出さる姫之御ニ手化開台活ニ多し

□本式十句表

中ウヤ　表方い十句の大救うて表ニ世ニあるも
　事を頭す位和紙のホ句ニ和紙の掛枕本懐ホ
　ホのホ句も右ニ同一句のホ句ニホ書ニ和紙月
　ニ忘花ニ釈ホを附の宜ニ又合つくく
　　フ松行ニナらひよさらこ更うホ　去来
　　、うま面白う注るたそれ　許六

山ト　俤ありあるまの風俗ホ　又玄
附句　隙くく　掛社菜衣　添ト
俤定　さる山あニ戸ニ月をうて　芳ホ
　草のさ社釈うき出ニ越の月　ト
　きれんお宮ニ初ホまさ、小
　白きのホ社芙蓉をまニ布て　許
　振振うも葉の裸や奉答髪　ホ
成就　と方の月ニ前ほもり　許
　お捉くく釈禾二依おうう　ト
三ウ三　草重松の図あり　文画上略
　あくくまの玉佐や附の箱角力　柄祖
　来ぬい花ニうニあ西　梅　里和
　山の井社方の居吸あうう
　武方ニのおい又人の中ニ五三人もきく人ニ
　くふ考指に指去ニくいい方ニ指至て
　ニ位ちく秀枝も向対住うく
　　十月　カラ
　　章ニ手松

神ヨ　ひさすらつねなる松の千代の内　第
　　もみねおろしや吹き落すらん　ソウ
○次それて浩い神の月九く　千那
ア　橋を押てのかる和汐　末
、ゆく舟を捨さる人の跡うき　六
　あこ笠哉ついるい　何友　第
神△神前乃花う香を冠そて　ラ
　ハ　天うられと地もたゝく　那
▲表の本式の表い名ホ三字まわる
仕立ある故ニ表中ニ糸おを約るのあるをホい表おの
す付方ニ曲言を云ふ
三年△今日や名ハ花も酒の日　木因
　花ちハ　文ちも　文雪ふ　独
、大は恵の表い又ニ糸ちふ宝ふきて
十　記てあふうの山おとゝきた
、手拭ニ南天白く吹下れ
　ニまろうとぞん皆でわがゐ

○一いひき云て紙燃ふ菜と月　第
伍名ア　菜子い子供ニ声落るし
、天、　極楽の杖白もセて草ニ方
、　四十者より　五十九仏を
初て三お表おお曲言白ホニ舞第ちやうあセし
仮令神尺意名ホホを出すふ付机の曲名あく
ていおの祖を名るとくて表おとホ号ふうむ
又糸お百あくふ女活あくい柱ニ表おあるむ
行去頂門ホニ一度服を洗てゐ必仏神の和好ニ
取れす祖ニの骨髄を透ほすきみニあむ

△八句表

[要]式表ニ神祇あり尺表あり変式表を拵すホホひ
人名をふるふ一書の拵ニ変ニ約とりふんあセし
▲上の文ニ日杖表ホを拠とセー八句表の始し
品を表合ほ八百句の配を表ニ合すとふんニ
えう表おれい月ニ出す定あれとも月と花と出

…ともあり句に変格おおきれ字三ヶ下ヨリ歩
…もよし但月花ともニ八句目ニハ不可又俤
…有之候へ共其ほかの月出杜きあきもあり雪ニ
…杜ハ一季ヨリ冬迄ニても「ニキテそ八句季詰有之
…ミて千変万化ノ多ク西花葉ニも葉ニも出ル
…雪ア相のそれ後先ニおく句多 惣而
…○ 月ニねころふ雪の乃月 但翌
…ア雪ハ降もやめぬ様ニ杜ハれて 文考
…、そ一の梢も風ニ吹ル 杜風
…砂川ニ元仏ノ立ル日乃光 砂角
尺 茅舎 まま加ゟ尼人ニつく 雪玲
…△まん所も名ハかゝて花の去 成也
…ハ丁ハ降る 杜雪乃山 水原

[答] 許六の云ル不可ニ拘ハらず句ニ
…たひわて弁ニと表合ありと我ニ語ル自ら表合ホ
…の仏社を云ル方ニ自句とかゝるニ一表の内ニ

一ニ古の姿をあて去嫌も法ニ用ゆきゐゑとなり
一ニ面白ゐゑと名ぬニ句の姉先砂ニ並てゆゑ也
ゐゑや又古来の法式ゟや二句の発句抔ニ合ゐゑ
やと思てゐゑニ古法砂ニ依ゐゑニ及ず先
一ニ己の見識まゐゐゐ句ニ仕ゐむ只一時の風俗ニさも
ある句ニ法式ニ立む抔ゐゐ下先砂ゐゐ古法を破
ル式を出ゐゐふゐ制を着きゐゑを弘めてゐゐ
秀逸ゐゐむゐゐを斗ゐゐ句ニ仕ゐゐ古実を納ゐさ
ゐゐてゐる人もゐゐむ抔ゐゐ古実を納ゐさ
ま彼のゐゐゐ今二句のそゐ法を定めしてゐ
三ゐゐニ句程ニ添て都て後人の宮ゐむゐ
添ゐ先砂の有を取ゐ去砂の有を取ゐ去ル
▲玄来式法を用ゐ元禄十一の去ニて上木ゐゐ八
十ゐ後安永七ニ支百年ニてゐゐうち仏一応
いさゐゐ人の已ゐ都ニて古来の条文を出ケ
ゐゐゐむ芭蕉渡ゐもさゐゐゐゐゐ七部集

自宮享式海印錄二

曲齋述

去濕劫論

俗說去濕劫者。元嘘卅劫之初。有佛出世。名曰然燈。有婆羅門。名曰善慧。時然燈佛。將諸大衆。入城乞食。善慧見已。即以鹿皮。敷於泥中。解髮布地。而白佛言。願佛及衆。蹈我此髮。我當爲佛。及諸大衆。作不退轉。佛即蹈之。而授其記。汝於來世。過阿僧祇劫。當得作佛。號釋迦牟尼。善慧婆羅門。即我身是。

此說出於大智度論。而其文甚繁。今略之。

海印錄一終

第七去法ひくり。海の去未あくの字を挙くる処。
己未のこれを冬日の表おを知さるやもあく雖
ま松杉の表い自分ち句あれ。「ろ生時よ勉てや
至るるやに「古法海伝まうの」いそれす又やや
実いこう人の挑あれ。文文も去来の伝ん我ゝく
去来い字ら実の士雖よ二字と英述の中何そ
妙字の如んもて大乙を伝ひ。ひ招三お表おろ
るい許ら支考の発句の伝句の投記を引くること
援毒法よかく淫汝を支さるれよ並人の俳士さる
以伝格を持てとすい無会のるやくさい兵人伝を
伝ることのこの句ら乙おを表おの秘方古する
時ら乙ち新句作の三法よ力をほるる百句力仙
まるも印さるれい追てる人の指まるひむと忍
さむ人いちよ修すくきるやまあむ

一旬の母要ハ他のすべてと異なるすべての旬を見ることを要する
ことと骨格の変を治するようにお指を要する時
猫の戦と異なるも云のつまびきを除いて指ヒセられ
を生ずの治いは除て後一又旬を見得て分る時を
旬ごと旬天空を変るとも支指頭に許すりそ
接合ハ字形のごとき去姫ハ神尺意乃ち九孔山川
衣食生種の指を別る技毛の変くしあるの
食義法りさるい変いこと五あれとも旬読さる
もも旬を旬と並てる変様もありやをそ
お旬を見ること男骸の変あって指指の技を伝乃
変うおもお指宗函の就ハ義の合云を述るのこ
あるを旬こ歩る毎こ旅くる分孔の法ハ乃ち旬変の
こ変うるのもこ初おもお践のほんを去く渡こ旬を回す
字事もあるこ祖沙の冥見ハきこるのむ
変化の予病五より世こ指合去姫の接あり
おの法式五きひまて旬こ

●連泳ハ去姫を左一ハ変化のあるあれと申門ハ去お
旬を指すお法あるあ後て後て点ハ頭こすと
支指を動彼セよこと文法ハ多く指こ旬ハ用ハ点ハ
妻秋去去そこうあ又ハ及「夏を二去ハそ一こう三
こ五名いおよ一月ハ面ニそ五去ハおのおそ
九孫様を変のさこそいうおお好のさこそ法
法を彼さをかてもこ一支余毎神せ教音嘉乃
去もあり生種名気教のこおおりて必とする事
きハ元来他法を森五方像の変ハ在て法更の
指を悟むる乃あれいおこ限のあき指ハさハ月
名のさこも乃ます一この難あ一めと裏こ風雅の
標をたてき他の大発表をおこて支表式を彼る九
の一支宗を彼る建門の宗地あれ支九を初て
加減すべき乃指之学去先こ式宗を以て附んの
風味をもる修セよ宝こ去姫の部を分つ
直指門人の筆記と共代の他旬を考合支指一

みるおを正格と一例称あるおを変格とう
まさごを出し正変ともに雲揚を加えり取捨法君
のまさ伝を学ぶ人のこゝに悟あの訂正を待ちつゝ

□表のつゞき

[享二]表を神代、変名名所人名を建くさゝの初句結末
三ところ二ところの称力をそすかたゝ旦下の五句に句点なそ
初打ち付きものあるこゝ同ち再ち以を法とするゝ

▲表を建くおを忌詞るおを表を憎て裏と流すを尽さむおゝさ
おを表を憎て裏と流すを尽さむおゝさ
人名寄を支か玄を林るおを裏こゝ裁席に苦りす支の称

[三冊子]表の内鬼女に成ろゝ試席に苦りす支の称
加待あとの称に用接すゝ句一ふるすと改ゝ

▲只古式を称は流れ出おゝそゝ女字を建くゝ
娘も亦男字も建さむやゝこひく定句をゝよ
又地秋の鬼に左けうめと忌ぷ忌ぷそ
忌ぷみまのにおゝ平生おゝ生称をそゝ恐さる不

何そ仮忌を頂くへし

△表を憎むお

神称 変名 恋称 名所名 名所称 武将名 神女名
列女名 僧名 重病 重述懐 教戒 旅行

△表を不憎お

•友名風流名通名・称写真・称述懐
笑称年育称・称病医薬・懐古 旅行 懐旧
•非非非天非恋お 恋称・旅立 亲旧 郡田舎
大忌名 無名名所旧名お・雪 恩 恋称
席祝祖の恨おまゝ 白髪 述懐 名所 旧居 市
△友名風流名通名

[三冊]士世方曰古今の人名表を出すやいゝ待む
時曰今の人名いはむゝ古人の名いおゝうゝて字
ゝるはしされるもおゝうゝんおゝ
△今の人名ハ常時名ゝき人の時心但変字を通ふ名い
ゝおゝうゝ表初到変仙名まの再ろおゝ

桂實ワ時多ま
冬 三 お門の立水ま使
菜刷 栄恒ま掃
桂 栄あま祖父の刑
名 ヒ お寄度の古き
体 六 栄地ち栄う典
替 栄のあ〻ア
他 初雷う
樫 九 あ〻た
分ワ ろ〻も
蔚 三 雪村う柳足
匂 西門の昇法
雪村雪の
コ ヒ 西郭う
ひさ 五 月今ま
東二 君あく
冬 六 桃花を

弁乃称 九峯
カラ
ワる
朔式
ふち采 羽
酒里
大納云度
ま造
本白
造り 羽
乃秀
キ風
祖已
人の部ま
寺
京旅
尾や
正秀
ま秀
停ば
矢徳の高
正平

脈梅ワ雪う刷
尾張分三 方内ま羽の始
桂 桂の名ま市
八雪 ヒ 晩客
れ 正宗ちやとて
五 石垣う笠い
嘉 六 千男ま
〈非殺伐軍概
多ク 三 武将ま
分夕 昇所う
ヒ 幅 秋昇ま上戸
士 軍兵いあ
ひさ ヒ きも
去 まひあ
鳥時 弄志
桂 杜風
一指 五 まへる

雪の百脚ま孝
桂ま
有已
酒里
嵐雪
序答
ま市英時 羽
概兵衛 百指
指ま
示弓
紀白
る角
羽
り風
キ角
ー里川の
し時の月列
ま

其節ニ至ル月ニ為仕舞る武士一人 若
冬 寄もあき果ぬ月の落ことを お笠
△鞋底懐炉 老楽斎女仙人
油雪ニ三注 掘のを食 若
初茄 阿房が男 妾てあくさむ 旅宿
小弓 射ハ外くと又ぬーをる カラ
仙 ちーいつけて 里のう家 雪芝
年寄ニも 作ても 栗のいっく 神楽 相撲
七さく 討ム人もあらと 作て月独 乙甫
梅干 熟年ちゃんるもんよん 男 泊瓢
台ワ ニ育の跡うひく 童 お 仙化
る士のあくさまもれ扱し 阿次
山コト 友衣 刃代い只 蚕 あく 若竹
コ人 ニ 茅葺旅宿の後架う幕引て 童を
八号 字よう女中の使被ーて 風石
炭 祖父うまの大神も為すみと キ角
一格 ニ 垂すむ庵ひくの糸くる 佳風

ひさ 秋る並て 月ニおくふ 弦花
門加次 子の指ておく 杖のげ糸 風垂
ヤハ汲老ん指る表ニ出さるいおる 更ありや
古格 て作るワて 仙境ニ入 若
独芳の仙ニ 仙人の明店あれ 月もう 柳水

△腫病医案 七ヲ及多行者

ヒ手 門連する一医志のをさささ ソラ
対 茅きひの一条ニのむ 契枝
、 物のりくらのちろと存ん 十丈
医ち 支の及つーをすきとろし 和七
ろ 水乃白を 右ュりろ 去芳
和苏 喉乳のあと乃 杖も支き リタ
和衣 足の久矢のいろ 西一 奏ふ
身 杖のすってふーをる 和煮
仙 ニ 食物の杖を干ク杖の月 コ風
毒支 一角ュんの保きすの才 方木
出多 ニ 幻年いよられと すっある為 地献

△懐古非云為愛同
秋盛ハ何秋の美ナレト共に芳 咲る秋士
茎 三ノ巻ニ赤山ニ 斧ヲ入て 赤皮
和歌 ヲフやヽ歌の名のミ称されて
フリ ヒ古ちの先祖ノ弓張の 月
保 五古我陣月も彩る陣 阪 嵐フシ
旋 六古き代きもぬこめのふし 嵐も
ヤヘ 三乳味のよき和歌結ひ忘ルて 雪柔
印 五指ヲひろねの雪のかんそぬ 祝セ
資 愛ニ来てひきを潜る時も キ角
ふ 六さらの波ノ 彩る秋の実 弥

△非神お
育ハ彩ふめ男る出て 柳ニ 空
他 三磨ま む人ありきヲも 安くおて まヲ
かな 秋衣のお国もり人と志ヲ法て 東伯
サル ヒ深 祝て ト されニフリ ソ男
フリ 十人そう名あり一行まる 千年

秋 五年の秀ヲろやヶ冬の月 周東
岁 雪つみ弊ヲあきまめ五ろく
天ヨ 六行ヲとる 雪の乃中ニ杉
△非釈お 元滝
梢十三尾ヲも冗の水乃凍ヲて 仲去
炭 西上陳教を始めの処当て 二原
秋 表吳尼の陳教さくこを記て お受
(ウケリ)
(アマ)
お抱ヲる尼ニ花をとあれて キ角
挑花 小指ヒい今の後ヲ指肌て 寺待
山下ヒ あるまもれニ来る小指ヲ 山ニ
(な)
花指 撿校成の比比乃 旅 角
(ヲ)
ハお 指ヲ立の先ヲ 古ろく 盛水
(イヒ)
有 笑ん世界ニ泊母の法法 栗ル
(ヒ)
共泊五 出ぬ花もあれぬ指の奈加性 東伯
十七 ヲ行て利智一ヲる葉の月 呑に
みそひ ハ床てあさまをそくとそろ 支考
他 六至れて指ふ多の友連 翁

未来ニ山のあなたのうき雲も
白タヘ七吹清の芳ても生い月よちやま　岩根
本名　り方も眺う残て後松のう色　何文
△非恋お元義
ら三惣情をまする花乃情まて　元ふ
奈ニお名ろう口すま　春うこ　以こ
岩多　一すの店の小石お　建飯
アタ　人をよる辻乃拾下所　昌坊
文七木乃のあはえそる石今拔　羽
仙　ニ五人てる事を住ま雑をま　猿猴
六扇の角を淡す　翁まし　風麦
△旅立智永里舎大吉名実立
星月三年難　唐古日牛初君高の教い時お名ゝ
仙三旅の空五い菜をまく比ゝむ　房
越ニ川一すちうへつ活ゆ　山之
弟五来ゝ来て学文するたち　乙也
ま久ゝ初月の行山京　唐仙

初茄六田舎芝居のあ四名くく　燕石
加川三徒活の多い越の自宅を淡ゑて　初ニ
笈五五寺内の旦那を四ろ杜の月　楚水
花扇　拝さ関の朱とうそる　くキ角
星月三　初九の作ろ客与ら九一友吹て　千拙
三年　七ろ六一時号をう　去来
教ニ九多ろいる書安のちやが　佐助
天内　枝も私をめうめ　庵船　洞也
ニ帳六かゝの芝落い友吹とや　住木

△垂名の名乗旧記　名お

弟三少乃ふ谷七九ろ月まれて　林因
天内　八条もりふい初分の茶上て　幸平
鄙ニ秀句おろうセさーく　を夜
かくさう神をもれ一名ふい記　叶得
山中　町のまろれう一名ふい記　自笑
ダテ五いさよも門名ふ内ク　ソラ
須六報の中をのそくい記　業治

北 ㊀ 倩後表うつくまうて云ふ
宝 声を後うあひて云ふを支
誠 ㊁ あく栗と林ーき人のあし出て皮風
後考 今もえもあく栗と足て黄茶焼生放
おれ ㊂ 此の下よりちきる初き葉比誰
大公名写底古本の衍者二の中もあり

△不作お

三貞 ㊂ 名く草ユロてと尿れ心れて泥き
弟 ㊃ 茶のまえ持ユるの尿するリホ
ほ あえ竹畑るるのきうるコシ
ふ人桐国ふ村の後ろ乃ち
今のるるーいせとの雪原
斉 ㊄ 川舟ラ雪原をく眺持有深
小仗の後ラひえて挟茗手閉
るるえくく海ユ風のおうすしカラ
妻 ㊅ 雪原おくくたまるるの血嵐雪
かれも皆おるよう拡するおく対私のをうーし

一句の作あくて往あるお好ユするるあ

△怪お

拾 ㊂ 豊まん粒のふ人を下まて弟
タリ 萩ラ鹿狐をるユ栄うまて弟敢
芽州 私的の雪ろと空ユ栄るるまれて林張
雪栗 話をふタ当雪の後ーー松湯
十七 七 磐ろるあと臭のある話の月新水
磐石ワ袖炙お兎いまをーむ扇
雪栗 粉をーぞるる石の形代キ角
、 ㊂ 三法人の 兎を泣ーむ、

□㊂句目

本出 ㊂句目い猪栗生後の句取い対文ユ大切の情不ユ於く
とふいお句掛者ユをユ畏をおるる石とある一一
人い兵や句すら掛ユ云あーれと一色の変化い句
より始るる石ユ句お合とい泣るユ却てなるそ㊂句
目をも限ラ式いをく式い於く式いつくく

其句と其附の変化を考ふべし

▲句法之力を論ずる者は四句会釈ともよろしむ
若き之会釈を付ずる時は四句ノ必配法して
力を入ずして一座梅カ香て其色成ざるべし
大和の姉妹ノ又「寒く共」起情「寒く共」会釈の趣方
安くあろうく共」孰向のすくれたるやう句を挙ぐれ
ども此句ハお五十の中に下ある句ではあるべし

春興　矢張り四句メハ寒くするを世ども受れど
只句作の寒きを主とせまして孰向を寒く挙るを主
ず家門の仏法句作の座を以てかまた其孰向の
座を指とんを主とを旨として句作ハ其後の事よし

▲寒と孰向ハ其句の足五のうちまで主ノ寒ノ
寒くするよりも寒ノ寒くするを主ノ寒ノ
ばト下ある句のうち寒ノ寒ノ
のうちニハ矢張の四句メハ座くハ句を仮て寒ハ足五
を座く挙よとあれども寒ハ句作寒き孰句のうち

とんの遠きを非ノ又四句目凡俗ハ句を振句く
おを振るうの振ふ云おるも誤ノ又四句メハ
ニ斗ニ比れハ舟をいむ比座あり意ハさる
五座句ノ寒ノ挙る事天神其句の四句メを人よ

梧葉　十ハ　舟いあちく　又也る松ケ　七句
△五句名下ノうち
八句乃内考之四句ニ句ニ句ハ句
を似ぬやうするうち大和るく
◆古式ニハ句メより十句メまでの体を定ル者も
座句ニハ句より趣を主て一座の変化を専ト著ク
ます之乃変化を宗とする流ハ趣の方ニ志ひて
制をぬ振ふあり西くるうち座句ニハ句ハ
古式と制のかゝる和ト心得ふ

□祝移
祝格ニ条おを出すを待ニ比テ婚ふ一生世の契ニ
表六メの句を意ニ付記ニ比ハ多れを一ツあく

他 コお閉ていられぬ人を忘うる 翁
午 秋依すれるも紀さすは 社 左衛
次ノ又あられるたの山 萩のち 小枝
匂 ム莽れ 今い薄くる待てヤハ
桜 名戸陰の山下 小泉の野こてき角

△祝接後表の角く同級不苦

小又 ウ 名色之の比くちのふ人にて 翁
時宮 ノ 妻のロ 産やの仰のたくと 山店
ウ 口きく丹くて下す秋の比、
低 ふし人と称をかるく田舎方 去ホ
タヒ むこその住のうる秋の風 翁
素安とくい酒も住り 宿化
端を ノ きくくと陰まぬ水 去の風 翁
宮ま ウ そくくと桐のそ送る東洲、
川越いくたとれをそそうう 仲衣
長う 川一向あちくもちく出代て 伯楓
水 谷水の宮まセられて花筏り 翁

ウラウツリ

蔓 ウ 羽六の帳を文字出をく 翁
又表 年よみて女まかひこ領ろう、
独 ウ 独栗そ里宮表の庚申 千那
開 丹陰くう宮のう翁初て、
ワお 多ともの七中をめくま初乱、
ヲ 日通 ノ 十五くろうるれいひくくト 太大
三ろて秋名い出るも当おヤ 杉風
三日 ノ さく股の三千坂もタタすく 涼ト
山尺 もあをい山のお高の九お 柳日
ひき ウ 名い路てもくくと的やらむ 正秀
路 ひそうあく空いまおえきちし 弥ス
式教あるるをまあくす

□句差挙句

表紙ニ挙句の控と云ふ 月次の会ニき法体ニて
左ニ式ハ夜会の会と云ふ式ハ哀悼の席と云時ニ大
宗匠の本句乃至ハ名物の花を宗匠の句を添ル
挙句も有あるす又花を会釈ふ式ハ式一座発会

武い和扶の切字ヲ以一さる二重の始終を調る
三ム之ハ名を今の俤陣ニ挙句を名ヲ一の捨ホと云て
另ヲ入て季も掛ず人も其住を当強て果ハ挙句
も云捨れとさる二社の俤社ヲ式の住ない及す
と没しるる儀式の俤社ヲ示ル挙ハ順の後ニ有て名
字の看ヲ挙ると一名ヲ挙ヲ挙ハ略
名ヲて住ヲ及す捨ハ祝云哀物の木句ヲ祝云哀物の
名我の花いまふ俤用の公句も木句の
掛ヲもて住ヲ花の用を説きさ式ハ実ヲ実ヲ
住て時ヲまき二社の俤社ヲ木句ハ春の挨拶ありて
名我のもハ哀ヲあもも挙句ハ二社のそ庭あれハ
さて哀句の附ヲ以ヲ名ヲ挙ヲ挙ヲ
掛ヲて佰ヲ祢ヲの時宜ヲよふ

三ム句の花と文字ヲ句と者ヲ
会ヲやさる事ヲ未練の此方ヲて云ハ
ヲ香ヲ炊句の花ヲもし者ヲ

▲ニハ古式之挙句ヲ俤の其句ヲ依て木句の哀ヲ句ヲする
名ヲ一う

〈最の句を再用する句

季栗　詩商人ヲ多ヲ句俤ふ　き角
冬隣ハ書て鬱ヲる　評　翁
ヲ詩商人花ヲ貪ヲる句て多　角
、去閑日くれて多哀吟　翁

ヲ柳ヲこち〳〵もくヨを待ヲ山只
及すちるをもの時ヲ云、庵の迷ヲを歩て

艾日　花ヲヲ佛ヲ多くおく日ヲ多　百阿
乃味一味ヲ和ヲる独活の芽　吾由
白あち〳〵もくヨヲそ恋のもちイ　荘秋
、春山吹ヲ　ヲこの雫　荘秋

あイや都や名ヲ人ヲ新月　阿
仏のりざか書ヲ　ま〳〵梢　花フ
俤むくヲ乃くい山のもり吹　杜吾
句——及す——ち　秋
、ちれそ宮ヲ書ヲ来の去　吾

初冬　秀佳も茶を点てるや笠の雪　依角
　小まきを寄よせ曙　嵐七
白　冬籠こもれる笠の花　角
　、活生乃土の焼もの　李
凌古白
　ちよろちよろと行やあふ　李
白　——きむろの
凌五　二句一云ふ仰れる笠いもむをうえて
いもむれあれいさろの花の云手ある窓の花の有月
ある去と秋よみえおさうく
△折葉老「ひき」細句
冬五品　狗風の刈竹高し仰ぐ　李
　　旅やとそろ笠のさんむ　ヤ水
白　水干を秀句の笠　ウ笠
　、さんむ句ふ笠の風　ウ笠
仁賀仙　秤賞て金おうもる月　李
　秋の嵐う巽荷連　旺止
白　花あれや西ふえる寺雨のと　秀竹

赤き衣裂よ神の苗代　秀佳
花仁仁の乗笠の影もの折ゆ供田ふる折く
さし仁方仙　海を浅さろれ出も雪の時　百乃
　そまて植う　芝菜
白　卯月雨山乃　秀白
コハ方仁のお舎巽老の茶ふ句ろう
秀行来方仙　文月や下いちはかまろま　嵐枝
　おつぬ笠て折よ出　柳コ
　　来　松二
白　下ふこもろうまの花　李二
凌十二老　皮花の吹ろやふ鳥友三乃空　李二
　出うすうのセきもあ　りる
白　因来て人も古笠の花ふも　丁杜
　、松乃山路も　ま荻
△主客挨拶老ふ　ウ
　栗稗ふえくもあ　ウ
　秋の中ろ花の尾　翁
　　ろ句　ヤろ出すもるのタくれ　、

発指　みそさゞや雪をうき〳〵と風乃吉　ウ翁
　　仁乃む人乃指よ夏草　ウ呂九
　ニ旬　盃の客ニ添す　ろ花乃波　会覚
　　、蒂あくるニ客の菊リ水
他　　盃良乃熊救ねびる盃乃ゝ　翁
　　やめてすゝきなきの書築　斉魚
　ウ旬　桜なむ書戸ニ花の客を焚て　翁
　　、き蒸誇るクふの初去　高古
五九　五月雨を集てまも上川　翁
　　名ニ栄をつあ〳〵舟投一茶
　ウ旬　孚楚吟い越へき琴の花　翁
　お、　山田乃植を祝ふ村雨　ソウ
冬国　降〳〵や廃寺の社乃翁仲　め風
　　未生の芽とたをる冬柄　翁
　旬　丁の名利をおく各業会
七十　風原の法をおくや時も、涼葉
　　振のろしよおのむ乃書　翁

　白　やゝあまて宿を送るむの客　虫ろ
未末　おのまゝ机と柄やゝのもち　翁
三ノ　翁ニ到〳〵てふるの　児　嵐を
　白　呆よゝ未を柱一花の張　キ角
　　、三人吟ふゝろ高人や山柄　を
ヤウ　塊巾とれやきき高人や山柄　ウ枝
　　陥ニ起〳〵と雪夜さゝつる　宇中
　旬　百匂の書扇をむょト入　吉仲
　　、小杜の中ニ学ぐをきく　友陸
八夕　夕〻れを帰るやゝ村ゞ村ち　ウ笠二
　　いつくも杜の柏ニ松亜　乃客
　ウ白　松さゝもちつゝ夕〻を　二
古今　七福や一字の飯を一字ツゝ
　白　書房のまゝニ伝る八束
発記　九陌そよゝれ花角ふ冬窮　え雪川
料紙　雪い当文おの形の　杜　吐水
引上旬　ふを旅ニ仮のつきまし　、

笠　　霞ゆふ来てう似い鵜すり山　芭二
　　そそのの花さく世界あそと　茶巻
引旨句ノ名古やうを至て岐阜へ永越て　二
△立句いろ作そ歌の句　古度多者
ホ　　青くてもある一きおを俺幸　荷
欽若　白茶五斗人うるもうえセむ　嵐ラ
歌のおおんを句もう
野　　日の去をさすて野の歩多　き角
白　連衣加もる去そ久しき　挙白
六一日百句之亥後不卜峡水似去来るる
よも初会の夜とろの後茶を多ふう
荷乃　風乃一日吹てをうるう　圃友
白花い今年の老う咲　掬支考
、　荷乃匂の　柳号　子
支衣　初鮭や張弓指りて　南木
芝体　白花ちや艾角う勇の老る時　考
蔦つ迄の作老き角も曲台う月を老さむ白之

雑　月花や法師の古社残あく　き角
引正句ノ多ク時人の雑後茶も花ん　仏化
雑　両写まま舌我の又ア
去　雪ろ色ろまま消や柄う　ソち
白ろ土の焼もふ　似まむまそ　翌角
、　大七刀も　柄う号　子
茶　茸狩ま艾後休し　舎来南　山リン
白仏社を今人扇れも吹て　行者
、　面白木ぶう月白　嵐ラ　まろ
白ダク呪考　枯さまと名うたさて柄む　役者
■白　雪の秋乃白だく品　枝東
東云呪考　吹の秋乃茸をれそや八幡脊　涼ト
■白月足ろいつむじもひ又も柄鳥仏　俳水
、　笑ろる　ホ　この主中　ま
話呪乃仏　月ニ丁あい小雨をの雪田ぶ　千那
■白花ちの八をニ雪て八乃り　友角
、　油乃茶の附は去　風　千柄

茅舎仙
白おとの花を茶て寿 花 北而
、枝と茎とよりふる 丁 ま
コハ六月のお内名古屋行ふ句せう

△木白と同他キ挙句 七ア及多者
一楊 ナ百の日や門提て申くきあき 伝花
朱雀や月八くの淀せて 清風
乙もの後 まつ竹も 仙尾

艾帥十名ようて牧きよあれよ伏ま 百花
もの花りふや祇園のお目ネ 孔峯
苔の詳よ芸史をきる 嵐雪

考却ア次里ま掛ふの後や歌の外 三性
今ろてさうと脇ふ花角方 如回
されともなハ人ハえ也る初夕 天芸

竹秋 ア幻の中をそくや牛の杖 千柄
佐角庫 すて出しきま出う間 冠那
良方の後の花ょまかの花秀 立吐

、去ふのと句ア
考旨ア枯尾ア来ふき花ふも 砂林
墨の付ふる古きふふとん 岱水
良七ふも浪むの夏ア角花 杉風
、今の時句いえの苗角 依し
艾帥ア山庵及ふふきは ア 秀和
郭ふ月ふふ人ハをひ集 嵐雪
去次ア のふの考ふ 舟竹

七ア及多者
△雑挙句
花引上時雑挙ふる事あア挙句い終正号作
方ふれとも雑の変格ふ前あれい付除ふるもあア
名ふ 羽木を作て右き意をえむ 羽
コ 実ふるふをア母む宮座 ソラ
市尾 白秋をめるもア地名 充 支考
、役去もやうの衣り柱 お 去来
雑 大弟いさひき体のおあれや 岩翁
羽校をさてお古す 文 き角

祇　罕ま宮司ら娘てんそく　夕兆
コ　おのやうよる多夜　来る　昌晶
む掬　すり升やを行の声をスて　渓石
云依るを　い木芳の麻衣　翠風
一掬　他社の祭り老もむ新の玉　立志
東云　加祇ま森くる　尾あれい　夕市
支よんのすくる　多陶　茶生
長う　三弦て夜のきむを弾ー　伯楓
風も冷る川代の畑老　リ考
かお　干おて延予る　西ま　壹平
考井も宮て不整只　涼之　支秀
ソ　何もおきつくらのふさの明そて　手
よりあよ老も風雅子石　
度考　お続冷る世そめてられ　高民
エて丁とて丁石ふる　失放
枕盛　夕夜う否とちくい羽う　青吹

物乃れとて生い態　柳士
笈　京村のさるま　考
あよワセて　似るいさむよ
対　よんホ生い明め　正秀
之　百いさりとも　宮明
張化　出てれい村の　十丈
、　風のとやまの　教壹
文操　百舎のきんを　小枝
、　なーあるの代そし　注者
方実　明くも天京の高よれ　乙由
去　事もいも多とうまく　光純
あ　出面白き山口乃　京松
式二何い今百寺の続ら　り風
〈拳句ま始て初只表会乃名処他キまの京おを　カ今
仕日拳句ま始て京おを不出す
出さ寺序さらほの会釈あて無あき止ままで式者
い何ご出すと求まるを只て却て抜き処んさるを

世俗句ごとにて御ぬさ幣帛などひねり懸ものを
祢る人あり伊勢きるゝ但神祇制のおもや
冬　老ノ鬢いさゝむ我のうと川　カ今
衝　ゐれ灯ともくる神垣の梅
印　祀るの雑煮ほふ神垣　コセム
ア　さてゝ旬て御屠の梅
ばみ尺寸名和俗き教の伊勢に南た拙するま
古い文ノ国式あれとも神祇めてたきおあれい
莫のそ宮まて許されむ莫お三伊勢の扱ゝ

□先生を読ゝ旬を用る例
キソ白生あるゝ一ツゝ祢るおきゝ心　莫
平詰猶の句をきるゝ去　杉風
ヨハ莫供れ西と土一句あるを後ゝ供水杉風両
吟てカ仏一老とセ一句ゝ
初於句格のやうや今の吟句　東花
仏ま力仏の法
日も入おの外の冬社号　十糸

とあるを後ゝ二枯ゝ後おをとられい
祢丁も品句招のゑあれて　第二
とかくう東花ゝ二件あれとも先人ゝあるあゝ比扱
あゝ仏二伊ゝて又一句ゝあるゝ一必箱をおむるゝ
（あうまゝ）
カ仏ハ云下

□年納法乐

宋年祝の為ゝ艾神の名を句句ゝ仮歌ゝて
宮上の法おゝ名句句ゝ舎てゝ仮ゝ入れと
季をあゝゝされゝ之伊句ゝ莫ゝ句ゝ
艾神の名をよむゝいるあれい祝ゝ悔るや此句ゝ
神前の宮ゝ祝祢ゝ宮ゝ次て伊勢ゝらるゝ
有ゝ揖するゝも揖するのゝと云れゝそ如
世俗ゝそ名をきゝあゝき有ゝ接拶句ゝ祢名
を作ゝるゝ法度あれと神仏ゝ世俗ゝる
ゐゝ数ゝ入名を吟ゝるを数ゝされ伊勢ゝ
くゝて神宮をそうゝおゝてあめうむ祢う
ゝゝ伊あるゝを伊勢の仏祝ゝそ悔るも

書るわの不宜宜あるるやく

正歌の句い句法の孫をもて仕立る句法と
何の木のもとともあき句うか

▲三熟俗作の誠之天とあく地花とあく咲句
あとく孫法を咲て続て作るや神祇祝ぎの
んの之称ハ神祇あるてもあくてるよ一句ハ二句
あるも一句あるも又あきもあり吉や釈吉あい
捕されともろくく活きるや悟むて一依
句法也とといきますとり考ますとり熟考るま
とるもれぬあるむ文あるむ文あるむ文あるむ文
続す又考ぬい自己考れぬい天然之宜の神宜を
寿むおあれいきれぬよくく宜也又何よ教ふ時
い句ぞもよ結ぶ格之そい花を見すて句を悟
むんあれい何ぞ悟句ふ孫よ教ふて我よ
結まさを文比考受ま志とふ事んとに諦きるや
あれいかのろいあるもやむそれ初ぎ宜之

又宜歌の句い五言十声の連まて作るる
松風の句ふ松風の句ふ松風の宜。
ろあさやろあさやろあさやろあさや。
むつき・新い春也。初春の首。
正宜合作の時い上五字を連宜るつり下を連声
もつり又上を声下てを連宜て仕立るやも
あり是二句孝ろさる時のやとあるてたくて
源ままでまめ月の嵐ろか
右三ふい孝例法乗ふ張す行楽愛宜賀之後
猶を式通宜連声あきを用さ志連声大古の
格ろてつりろ一 文句

▲空宿月祇之荘ろふ只孫治統上三云正歌の
おっまれあきるふ下の連句ろてまろ一句お連ま
けよおあろるやいきぐ月まれ南ろ作あく
指句ふ句の孫をひくるあれい止の孫と下の始と
連ふきれるーさるを活て吉を合やむとろる

時の初てを加和ふの格をめ作こあらむ
をすて弱い古法を捨られむさ後おなの人
みて打風のとき老格るる徒とてて又は
猴の句も上ててそ
[曜月]奉納 兵祝云の句他つ連声を用る人あり連
声い土行和合せす我所ま通声と孤独を用る
▲やゃゅゑ声い大古の格ぃ従ぅ他つ連声を用る法
艾ゑ声ぃ句の句ありて
荅ふの用ふくめるあれる他つ連声を用る法
仏 何の木のむとも言れめ白ふ 莉
イセ 声ま約日を含む 等 言葉
尺 宮 門初めるある田の中のち 莉
穴 陳の仏れ徒ぁ徒のまりて 定
白 従冊狩す神社の去 助人
雲花 磨歩す読も読〜梅む 莉
ムタ 石〜〜 夜のとき暁 相称

ム初お武隈の女い花の名ぁをれ、
、祖注句を吟るつごを 莉
武ぎノ打句句徒ま納ま秋言葉の例代
ヤへ 上古実 まは神を友まや孝恩 莉
雲ま土古の伝お納る 示右
白言自ま雲花を布の民の伝お納ま 親称
ま日広陳ある指上京を四の民の伝お納ま
来てあるま約すぁ徒ぁ〜〜徒武ま言う
土吉ナ句を用ぬを足ま下の例も同一
三日 神もあれ三河を山出ぎ白 文考
宮前 雲花ま仏ま舟を夜の吟あの 林角
尺 ウ社言てそ ソセン
ム ノ八ナて死ぁ人をあ〜るる 咬巧
白土佐ら恵の力仏ま垂ふ神のむ 考
神風鈸
カ 力ま〜ぎ 第ま性の寿よむ 蒲右
風雲を住ま〜ぁひく苗代 添ト

人丸のれ歌を拝し
フリ　芭蕉翁の姿あるやや大和物　涼ト
　まゐう松の上を　　是巴
　　○
かも　　雪の客を捨ずや神の杜　　竹
　　あれ〳〵き雲の降こし　　路実
神風殿已下三吉句あり
　　悔も来社の教やを筑　　素後
　　、
　　教いおとなよ　留　風　矢
　　句教る新神のおゝまゝ家の光　　、
雅
　　然うま離の業孔加うふ　き翁
日待百句　　ひろき生合い家　春の月　旦水
引句　日待ようふ女侍の神伯　岩翁
　　、
　　果報のつくをを　春の芽　ま佰
法会　天神を祀去いまゝとゝ梅を切他きあいま中ゝ
必梅一あゝ一後会を辻舟添すれ添ふ
梅十　　去良天神を祀方仙内
　　雪ふわを舟ゝかきてしまるの月　梅之

、まゐ　あれ次まれ舟う杜風　、
▲為民俗あり後会を辻いはむ一筑ふ白ゝも入用
あるむふおを舟ゝ入又舟添すおゝまゝ春会
艾刻の旅秘舟のふゝすまるゝ右いるを尽奈を
ふゝ柔を婦をむや添人おゝ添字も悔る
ま一おて已ゝ悪寒もて神重をもるゝ彩る含
るそう

一愛恕附

法会　懐帝一灰流孫る府立ゝ祇府ふ引出する例之
愛の神仏旺あるゝ艾会只何とあくえ一時ゝ天神
の代告とて天神を祭て雲切する事古例之布句
神祇おゝ掘神祇ますくゝ去教林を愛えても
愛の事ゝ作ふる事句位おて会会会おう掛て
一意清浄ゝ拳句あゝ一老中愛松例充辻ホを見
ま之ゝ意寿意教寿電ホのもの
▲意尼下の浅非あるる事浅句ゝよて例ゝ
発之　御ゝ之掘事之ま之字至ゝ愛恕発句

あゝいおもの ん ュ ロ て 又句 ゝ ラ ヒ お句 ず て ー
但 治 之 の 切字を用 ゆ の 切字 さ い む ゝ ー 始
▲治之 ゆ の 切字の る 中 仰 固 の 設 之
三ヲ出 本句あゝ表 る て 拠 麦 水 の句 設句 あゝ
ま ん 七句 あ る ー 百句 あ ー ゝ 仰 て 拠 哭 の
雲 り ゝ 在 設 き て 屋 ゝ ま 表句 も 門
仁本ノ 長句 八 勢 と 設句 を 見 て 時 ゝ 引 止 て お句 い る 麦
お ゝ 拠 ュ 持 て 当 季 の お句 る 拠 ュ 弟 キ ュ 結 ゝ
予 設句 当 季 見 て と 本句 あ る い 弟 キ ュ 仕 立 拠 ゝ 立 作
ま 垂 麦 お の 句 い 三 お ま て な 納 ま ー み ュ お句
い ま ー ー そ ュ れ を 或 ゝ カ 仰 ュ い ま ー ま の
▲ 神 ま 仰 ま 麦 お 拠 と 寺 ゝ 寺 技 之 今 掛 ま る う
き の お を 拠 ュ ー 季 の お句 ー ュ 三 お と ゝ 他 社 ー ま る
季 の 拠 ュ 彼 ま む ゝ ュ む ま う も 設句 あ ゝ 支 ュ 挙 の
句 挙 の ュ 一 句 と 添 て 年 納 て 可 み む 又 雑 の 麦 ュ
本 の 句 に も 吹 ぬ ま ん 又 芸 ュ 拠 句 あ ゝ お る と 入 て

お句 付 ュ 五 モ 眠 ガ と 目 モ ま の 注 之 十 七 字 あ き お ゝ 以 文句
あ れ ゝ 文 作 ュ 図 へ き 仁 お ま ま う 表 十 二 字 あ 十 五 以 字 九
余 字 お ま の 文句 あ ゝ ゝ ま ま ま ま 十 五 以 字 九
も 十 七 ュ ま て お句 作 る お あ れ ゝ ま 文 神 の 告 ュ
作 て 投 ま る れ 古 人 画 前 不 可 説 夢 ノ 勘 破 ま 也
コ ム 雑 人 並 ュ 殺 も 変 ま 延 ま や す き の 開 御
不 二 を お ま ュ の 有 る 日 の 九 行 犯
伝 宅 仁 古 ま 句 あ ー 拠 ュ 弟 キ あ き を ス ム
三 お 万 字 の 日 い 草 某 の 拠 く 、
門 い 方 挙 の ム 垂 ま ま 拠 ふ 去 仙 行
麦 投 水 仏 や 隻 さ う ま ー 吹 て を う 、
ま く 夜 い き ュ ま う 雲 の 有 を れ 行 雲
有 俤 秋 の 初 ュ か ま る 代 仲 や 秋 の 風 、
文 面 十 略 庁 田 の 院 の ま ュ 句 ふ 比 帝 因
依 ま 月 ス ュ 明 も 立 ま て 草 ニ
候 ま 日 の 出 舟 入 舟 。
又 き ニ 仁 句 目

名月の記をよ明も書待て
雪もき今るもち〳〵月の夜
此夜の一吹おて膚おやし白作之琴とゐ琴の夜
あ一曲をきすと白信を好之世をぬるを庵
やし此夜の拍子之隈の一字ゐし白作之此琴とやん
不白之俤の一字のし村ゐれい拍子きすて
隈とそうきこい松分を着むとて明の白作ゐ文
用之に白ゐ曲拍をもよ会釈の白ゐれて夜
ゐんと出毎ゐ舟の祝き琴と琴掛舎雅
きの琴と此号も白作ゐ白信ゐ野

[illegible]月日　　芳三

帯肉掛

宝暦八九月廿[illegible]日
人〻之告ゐ仙一老とて小袖見一倫作ら
此の冬　山ゝセや杖のおの[illegible]教の筋向い松　よ
後の月教の明一掛掛　仙菜
白みちき明を文ら宗の花　宇白

[illegible]菱松を宛くい菊あの新緑笑後のん松
ゐる時きこ宛くこ之ゐ条を条床之金像をを楼ゐ
不強松筆甲もうと乙あ[illegible]ゐ条床之金像をを楼ゐ
宇通者こもする之一吹廊て一条の曲代と出て
するもあ一又者こ之琴代ら七吹を待ちあ一
何レも吾ら[illegible]る時い峰附白とうを曲ふこ
ゐ家留の白こ菱為とい力ナシキと作くきみ柳い
夕々ヤ（如）ナキ（毎）とひくあこ

△日賀

一　梅さう二月中旬和歌　芳

天下のおう外家ホを去　杉風
百毛数古義仙ゐ一老ホを去　仙風
ゐき嵐こ之ゐ仙ゐ[illegible]ゐ
雪ゐより春ん[illegible]ゐ[illegible]ゐ[illegible]ゐ

ニ、 ㇾ裏より今もこれあり ぬるあり 山リン
三ノ六月 ㇾありしは月 ここあれいふ 享史
神泣あれいすむ 住る 陵ル 廿ニ
孔ニ教も 杉の 暁 リン
九仙ノ云ヒ

□返魂

三集返魂 返魂い出玄才一老ろき不自の句すて駅
足才所友初識陸士義士おようてきと句あり
天下玄乃の玄若の返魂ュ名もおき老の返魂のめ
ちく神あり周ル形 秀を拾ヒ玄ヒ
松風ギーそとおろる悩苦むすおとして一天下
果ようほくふき老ろて哀之始
文
玄老の歌いの世の誠之ルュ云古の箱を手向むい
伝おきロさらも今玄この葉を足るュ返悼懐旧
芳物 秋誄の足めもおく或い白鍋拳の乃ュ
必手足の泪を用ようそ玄おく旬之仮令
出哀の泪を作るも一句仰ぎあくそい論おむ

只哀和をこととセよ白ニ句ュても二句ュてる引上
てもよ一折おるこ
釈玄為すれ菜教生房体的字余返字ホ
古式ュ姫おもあれ 苔乃ま作ようて他
冥途罪科地狄阿責無窮のさまい降ろて
艾余ュ人ようて席ようて楼句も裏
あるやい返魂のこ仮ぬるこ

拾 艾客ュそや枯木の杖乃ち 翁
大連尼峰 衡 来ておくよ一柏の他 象
苔翠
宮声矣一 き会仏少也る
十 むりュ句 ソラ
尺五ホ 一仏の孫を拉して、 翁
九 玄ぬき空云の傍の声を吸て
五 若生一仏 友五
ゐ 仍よる ロ 投ュセられて羽る度ようて 翁
ロ 白清き地ュ点ま骨を投る花の傍 う
ム 去玄てもく秀の一時 象
非尺、

衝　笠ちやそめぬ山路も雲の西　翁
なり　　そひねを起すもの淋しき　参
白花萱屋根の苫に折て葉云
枯白匂　ゝゝを笠に陣すや枯尾花　キ角
箱ち　陣ゐさめて落ゐる声　支考
葉　ウロ風の葉を吹ゝのむ　乙州
法る　五位さかと秋の夏ふせとする　千里
訳ゐ　土よのむし葉の赤白の惜るし　万里
神　二方あるのうさゝ殊ゝる　伯元
称　三ウ名さーの仕合ワろき気の雲　北玄
ム尺　、陣よも中もまの夏更　考
引上旨　只さめ状のおくゝ戒名　末
庭　、青天よちやめくむの苔ー、
試き神伯元医字八ゐあり已下ゐ訳ござ
、　仏や浪花をまの磁　州桃リン
試ツキ云云　陣くみくよ冬の日乃午　るサン
陣　ム月待陣ゝ　千川更る秋風

白足ゐれいおのつゝ多る花微笑　佐子
、　変を結て新庵ゝ　徐波
、　本旨やあゐけれ乃の木梨橙　コ去
一和さひきゝ表の新多　ゐ新
ウ雪ゑの方いゝ地をう死み　ソ重
白神ゝ今所のゐめくる花の枝　リン
、　白匂　奇く中ゝ変葉独ゝくう　嵐雪
向上件を雪の明木の　リン
ゐ　三ウ衣桁の小袖ゐる雪すゐ　風吹
忘　三ウ忘ゝまゝ明さ生てお月の間　ム生
白外考ゐ琴をう等ーむ花のお　リン
、　苔芳しき　伝の交　換ル
風月の表の役をおしゝり　乙州
、智キ　ゑの中ゑゝ　末吉
ム祝　ウ枝笠以陀いるー世の夏　、
ゐ　ゝウ初ゑ神の方ゑも述ゑこ　州吉
白乃手のまうちぬ花の下

白川去のむとほ世ときまれて　孫支
、人も沙ち〳〵多も沙ち〳〵　孝
、多一和林うをくゝるく〳〵　万ま
去をひ〳〵けい十月の去　八宗之
引上白（白）移延彩祝ま　ま
冬件や何れの張を君う高　水高
みいまれのときゆ方　揚東
有白　仏を鳥のあの指ニおく〳〵　昨古
引上称ニ世ともも吹狩る祖重ニ　架之
旬ま引ニまニ袋有旬ま像ま　
、　みい枯て沸るおおく名狩ぐ　可タ
月いまりとおるを　キ邑
引上　徳（ゆ）重ニ人もまもれて重り　波宣
云生をも起てつくわふ大徳ぶ　拿お
、　艾きさ〳〵きのの指まそ〳〵　関高
引上　花い指ニ沸る狩の多ニ山　方沼
あちうき世を多とおく　去水

孫支名　変化の時を　白花
白花を極をやめて花之の孫支　東お
只事件の曲之支考ニナ名あり支を度て花を美山
ニ便さ仏ん也を陶朱云ニ波ろ
、　廉の高ニ云の去の　入月秋　注者
萩ろもあるす　駱皮
白古んニやくの白和とある花の時　巴句
、杜丹去重ニ　支の狩る花　牧意
梅多　艾梅もちる日をありぬ一七　吉仲
木岸　陸ま〳〵狩る去の　喋　仲を
白家屋の狩もくもる去の　、
、小田乃性もあくそつの　子結

名負　都鳥の白さ　むらくさ　彼の
高白峰　山茶の春　伺ふ　幸庵
白花もの契ふ　と云れ
、　都やや芽すりの花もつき　渚花
名いみ　の和乃庵　大若生
白人とも　初信花の落る花　仙翁
、　月ふえぬ秋員ふえぬおく　田入
行仮宮ある文月の月　哀ふ
白仰井む白きを落ふする　秦次
、　ちるうさま　るりの蜥　蓼
十七向　女人の供灯添を花乃琴　致ふ
き角呂　六み余日うき春落る水　浅く
白もそ昔今又春のまうみ　除舎
一花をるるも　庵杖の音　大主
八幸　ちれと梅名い未代ふかすく　茅蓼
垂位一用　爰と杉菜の元佈てめれ　位里
ム祝　和おちと落生曲ひのあめそのも　るり

白あうくち社ふ秋て春のも　翠風
、　さまもも　風茎
女渡　移近ま名ふ　花
七ふ高　加乃もれう　落所
ム　ウ姫うあひて　茅ま
白くもふい渡ふも　ひのむくき京　、
、　ねま人のちるの雨も彩ふ　巴杉
涅槃忌の神茎も五土ふく　意件
、　都茎の曲実ふ永き一叶　ま
ム祝　ふ重見も月ふきふ乳のまそ　一字
白三ふい芳ふもの　ひの　ナ　ま
、　多い雨井ふ　ー　ま雨のもく叶　姫源
嵐七風ふの云ふを医て
名筐　西く雨の地も空　和葛
指もおちふ春の入お　十知
白ちる花の筐ふる法の声　風茎
、　去の名称ふ　友も考ふ　只白

早月　酒之る宮や小斗の早月扶　柔松
き角世二　柱あ〳〵ねいえさら信　松何
白裏一乃を早て〳〵ふ乃も　松探
、　他をうそ〳〵て拘柁裏数　千柯
こ乃　俤や茎葉ら〳〵云ん尾　梅淀
ヤハ岬　残る君士衣も云の去悔　簀月
白　寿のさひこる濃悦門　、
七　号るやつ〳〵杉もるの号　杏る
茶烟止一ま去の雖衆　如風
白更をきふ一本千里の爰の　竹壹
月　尾ろく衆久竹号苔の花　三雅
時るよ号宿すきのわ　祝こ
引上白　宿花の花の力も矢ひて　扶満
〈追音ユ白あきか
初ホ　風を由て　拾ふ悩のちり　訪重
コハ白　初るや待の茎閉柁も〳〵む　許云
ふち　勝よとる舟のおやあくみを　東勢

冬寄　更の乳て公のある菜ニ五六十　リ合
、　ろことそ忌い月又　十ニて　杉風
夕良　白や英ユ指き春の泉ろ　隆し
白ねチ　艾久斗や附る由て雪ユ一首　小枝
跳ぴ　こそ萩やんのくるくもさり　ま格
、　多きれ風の芝芸仁年おろ古　岐幸
、　多向ふ菜の白乃吹ふ　本十
秋郎　亡社ユ伊柱てきるむ杖の風　宮庫
ユ只一老あれる白あ〳〵れ白を暑すく数老
号乃の附艾中ユするる号く公おる伊多〳〵

□人倫と人信望ニおある号

吉冗　昔の祀社も今の御社もお我の法乃
明多ぬい姿情の二ヲ社ならさる方く
◆去姫の如法之若つき姿情体用のおをて
万法一把の法式を定さるユ号の左世も亦三
信の元生ねるむ公歌あ〳〵て作衣号〳〵う

まゝ甲も人倫等い仮令ゐ甲凡ゝといふとも又ゐ甲乙の後より「記者又甲乙を多き心者あれい」ゐ句ゐ句あゐ人倫ゐ有とふるあゝえゐ人倫を二句去と定さゐ「口又母ゐ男女ゐ目立年ゐてゐ文字の釣ゐ或ゐ自他の後ゐ分ち或ゐ姿情の事を考てお我の対んとあゐ人倫ゐい仮甲ふゐ一事の配ゐ要ゐゐむ

▲「記者又」系又ゐ父母の上「」あゐ陶句文ゐて初んな納ゐされいかゝ人代て記すれ又ゐ人倫等ゐ人ゐ等ゐ人倫ゐ人ゐ等ゐ人ゐ等ゐ人ゐ等

古来氏氏五字の二人位とせぬ事とんの通氏五
字ニ数子の名乳を含ざる事を考て七部の
記者も宜い人位載あて記て自も昔の姓名を
慨め今世を初一頁部を分て姓名をあつ
人〻乃至の逐字を抜て明らニ表せよ
壬ト八おを主とる人の例ニ止さ二字之君倉白駒
云阪妙ホの友名例友名大宏名月代友ノ表
神主坊主名主何主ノ表又帝仙洞殿表宮
宮方公家方及ひ字中ハ表御局奥掛内字
後家方文位ハ西堂納所例ニ居座及居座ホの
居所名ハ又然谷塔治ホの姓名ハ古人名ホ之
誰ト八男女を分ず仏ぐ他さ尼例字之ハ老若例
尼人ハ人ハ人例人ハ客友仲ヨき尼連同士
主ハ付ハ心家名ハ那あるく先生ハ表ス居ニ表ス
民ハ姓妙ハ丁雅数ホ方例ハ文許ハ一ホ表ス
身ト八自をさす例字ニ我已某私ハ予ハ自

刃芸ハ方ホ教ニ新法ニも此中ニ入
独ト八人数を寺例字ニ二人ニ人争人例将軍
多勢那集ホ世典庶生ホ表ニ
媒ト八媒ニ妁ニ与ル名の例字ニ仏陀医陀画陀
例陀表例好候好例母表名表実例家表実友
等ハ表ハ皆ハ表曲ホ表ニ大ニホ換ル
友ニ加日用法蔵名英ホ三法師ニ名案大実新
法表ホ表六新以ハ例ハ条法ホ表ハ
宮司社務祢宜表武士例小性供ホ出代ハ家ホ
代表以腰元表使ハ御ホ乞ハ取田ホ当ハ
六尺ハ上ホ下ホ上戸ト戸ニ会ホ二字ニ食稼多ニ引
ル士ハ大力英勇例房ハ表例表例ハ例博
太鼓持ホ表ハ持ホ表ハ表ハ表ハ表ハ表ハ
一例ハ〻あく〻ト八人位・下八ニ例ハ
古今良天ニ天女帝仙洞ホ院鬼仏ハ式ハ古式ニ
色々ノ説アレ氏人位ニハ二句ノ去ヘキニ

▲只上文ら自語お連ねいち考扱者の注を示す

生 キミ 出生の称史君の君保き小枝
印 伸う裕いやうまでもおき
初花の万葉時る時あれや
君う代い俗も おす風の神 壹卒
四文字ろうい嫁もきんむ 梅因
寛ひれい嫁もきんむを入ま
まるく日も石の井拾う天女 女
乾ある宮う法花よむ声
抬 位 朝ま来て玄位国ユイー
友 ち の鉢ユて笙うてふく 享子
印 千里共へむの張ある色乃庭 コセム
抜菜一存を分る里人 弱
お友の名ホーほとや号ふむ 土芳
木もさあうの寺社夕くれ 風麦
寒庭を又セむと人の降て 弱
祖子のを刀をう一すス号 格士

教 青起伏屋ま生る名のうさも 風茶
、 出て い笑ま人というくうの箱 弦士
、 うれ云も庭のあるお痛之 石
北 むろ扉風うち花の抑印 葵的
初なま井房の釈子抱ひて 弱
炭 傍友 又はるもすまめ信人 ヤハ
法下の頂治を送る花雪 弱
雲るの古ま之房ぬあ 奈母 庭フ
白扇 あのふう神ユ性ろくあき 吾仲
大名 一宿てみ石住ろくお大名 去来
きやるるも小指をそ手掛の矛て 六之
文月 麦林あれをうくま 聖般
なり 出るまいおくまり もまくと 東羽
西りの新い村る之の月 八字
本号の旅芽ま信い秋そそ 牧童
代夏 代夏の伏をいうコと宣へそ 支考

神立の　小くむ志賀の宮人も　立忘
稲　上忘れ草と　引ぬ
母。沢の村にあと生志と計志　志
葉をだに　聲をたつめる　山リン
雑　百ちを神も　知す　笠磯　雪及
月よの　行い給ふ　と　末松
月の宿　雪ふ重　お出よ　菊
七十　おける　舟乃　底作り　杏皆
庵人の　志れぬ　汨よ　磐て　千川
イン　院も白雪を　佗ひ　ひろ　机後
秦　和うよ　郭公　雪丸
頃すの　石も　て　まて　おそ　菊
神よう　祇宮の　さひ　ほう　も　机凡
ム、　あ　ろの　山衆　雪　衆あれ　そろく　汁　ま隔
花山の　院も　振いろ　ん　リン
布せいく　く　大悟の　宮　岐幸
宮　宸元　当戻う　ま　個う　日の　ふ　く　之　幸葉

萱　又泉　月くから雪のよ　相のうすすけて　岬タン
田のむ　嫁のいうよ　久しき　相葉
玄梓をよろ　婚の叫れて　聖敏
岩多　ち。葉てい　ふうて　田。巳　白粒
房　咽切の　度いお　意必ふさふのあう　云え
老侍の　連よ　ろもの　お本さ　幸平
咽て　足れ　それそ　村てふ　川和
宮　宸や　宸。を　良用集を　借よやり　茅花
大工の　ちさ　去の　移さ　葉二
玉代も　あれの　とこの　とをもくれ　和
茎山　接を　投する　侯。尓の　陪さよ　平
宸　日せ　彩工　志代の　あね　叫れて　裳母
桃　とこの　使う　白も　え　す　り月
後位　名月の　茸よ　後。位も　石訓隊れ　和
陪石　陪。石　陳ふ　麦の　秋中　陪之

秋　お流の淫を至ると学ん走　為雲
　　格のふーんよ思むれ事ひ　寛五
　　恋の去二寸伸おもひち草　仙芝
　　程をやめ時代ーすき　秋を
　　汁店よ花だのみそろそ　麻面
　　ちれおき変地よ夏を翁　キ凡
　　人あきそまれおをつきひ　扇水
　　困もいさむ金山う向　糸弦
　　まるて赤脳配る大井反　集如
　　をうーくあるる乃姓の弓　キ角
　　日のそよん定る淫精ち　俊士
古　秀子行く　義強の像　業云
剛　白猪と萩と英と蒸をおり込て　め凡
　　淫の曹子よ　柱おをそふ　知是
　　初芝花ろうる板凡ろる　倭業
　　白しとまち雪の白ーと　扇
　　嫁入わり出すちーの様千　二川

古今定　僧　古式三人位ナラストイ（圧指合ヲクルベキ）
　　傍い仏名のおそれて人字よ　教すれい時あるるや
　　知ーく古式を拒めむとりてるそりチよ支考の法を
　　ひくさーい傍名も呼とすきを人位よ教セーい
　　空間急受出時い琴当て守もる九之
誰　タレ　焼挽のうるいい誰も袖めして　支考
雪花　白髪そうえ走る隣のうめう娘りお　雪注
　　之走る隣のうめう娘りお　一升
翁　翁乃座の外のひんと凡声　イ吹
秋　式中ー新そそ二年ありて　リ和
　　翠のいびきをのそくお仏　翁芝
老　翁の背去もあるるの老そ人　翁
艾　行人入しー小門の淫　去来
　　立うり屍風を傍すなよる　凡北
　　男あき娘う笑をちるて　口通
　　間大神よ侠帚を木す　翁
　　為めれい汁のそすの宵ろる　友五

屋のひさし　廿。所ところ
ヤヘ　嘴をつくたれおまへ　ぬ去
ぜん　旦那おのひろき袖　示右
　住うくて住おおくとくとある隙　和及
お　羞　羞豈おおり投　ぬ彼ち
　隔てをれも鄰　隔お大工の末て　尼ちのむ短尺分　人　タソ
　五百羅漢の門　子供ともも一茎居ふる　囚人を執て休る　萩さ一出す　向ひ附寄と来　一茎雑ク　出付ておくこ
ツクモ　尼
ウト　郭
笠

ト　田を植る附ゝ庭人　貧由
テ　庭人も連ささそふ糸宮　ソラ
ヒヤ　先ち接て申こ　郭公
　おの沢ゝる母の　本因
　取ところ討人の使　ウ
、　一おの奏渉うけ　翁
、　杜明ま兵乏むと　キ角
、　木柏るお人ま　ねそこ
　苔ふやりて猿ま　尼連
　投人の小去ゝ取　和前
　枯せま打投　廿日　呉天
　西ぱゝ笠隠やう　風茅
　戸隔又誰やう　柳士
　昂る第の足え　リ杜
　町人の兵士と出　逸正
　もゝゝ下せをいま　口カ
初
浪
シ

羽
容
友
龍

逢きロ上出てゑやくの止うき 佰木
宮のおれいねてうすく 嵐竹
同座の体をそろすま友 芝風
日待ようふ艾まくの神酒 岩翁
果物のつくをも彼の幸 未陌

筱福
各峯

物こふくおの末上
天名の梓の杖い一系ち 乙春
各もおのをき 峯 幕羊

みむ
朋ハイ
仲ろ
小仙

母方上敗て月のあさひ 吾芝
三風のてもる音柱の中 東作
朋ハまの髪を結あふつもの 猿雅
仲方て結む情の移務さ 杏雨
六月もそろくく山の色ーめり 青柘
大串をぬおいぬと麦ま ヤハ
同方きをみて出ぐひ 連支
おおのるまい内文の乳汲 リ和
同位の連も中のよ口士 湖山

六行
元
仮

我つ名つ毋のこ文のこうお 胡仙
言事い止上孫のこを以全
江戸名とか坊の前の花を守合 祖仙
杖をーる方とおとこ 俤号新
文る花弦突彼る雛の角ソう

帋
トギ

為のお伽の位ふさる月 翁
拳度とふ新しん玉苧お 祖桂
社語もあん版の上亜 所ル
精進もをなりくよ名生 一字
セもん杖う孫のお産 壹平

笠
且十

まさまうえ我同の酔て来る 連支
さふの丘那いかめぬる卵 莖二
夕もれや何茶の度も 祇徐
集ーる雨きふ枝を火 都仁
生もうこん掛上風て 和

キく
三正

飛鳴あくりひるを風と 花ま
猫の子を莫上文のきちし キユム

●刁独

小ぬゝのうる燥くの卅 杜若

艾佈 毬きゝすとて旅之住める 舟竹
人の指おくうそる一秋 嵐雪
コヒキミ 月疫をさすれ思う髪搭 秀和
タヽ 奈冬のゐも氏乃 倘 苔及
レヽ まつゝ薬子下きゝちとを 鈸水
兒ーんぽ之赤き名るお 侑ち

ろぬ 本家のま苗もふ石姓
印 毬の月園ま之赤子をあす抜 享子
カタキ 対ぬ故の恵図いうき秋 コセム
煖在友ゝも今辰する君 宗陽
荳 さまくても痛毒居の意衣 ま九
丁扯 性さくれいちのふ丁扯 荳之
、 去家元火在の侍く考有す
ぬ 天下を平穀侍すふえ 臥尺
吹矢宮たえて抜のゐうせい 长水
尾も結ぬ伯母の云仍 水胡

かまえさゝおけい痛も独為 祝二
稲と已とろるすの肢次仁小
同ゝ中老の吐乃あくゝて 机リ
炊されゝ永又莽初やゝ行 ヤハ
永 れれゝ永なてえんを為て尺る リ年
多 ま永去の松も尺えぬ宙の 妖 ハ
、 めつゝ風のえやる為ゝを リ合
宵ゝの月さまちて旅大ユ 依く
カケ 教ゐも笠さてきれぬひち曲 衆来
天日 永矢のゝ〇の去ゝ乱るし 唯人
尺人の佐も何やう明云 山井
救免ゝもれて独冬月 羽

独一人 きぬくゝおふも同一ちの子 呂九
秋 宿の如乃机きおゐけ ソラ
ゝ久 哉人色をちるまを乞 フ舩
独 園の秋い的次の技ゝ咲れ 仙化
ま小杖ゝるる老の小仗 キ角

媒 媒 媒

仲人 ㇾ 少 ㇾ ちうめんもめ ㇾ 事 媒

ㇾ、 十枚 ㇾ 恵 ㇾ 云 ㇾ 吹のち 糸 リ兄 ㇾ 非

㐂町 ㇾ リのタ ㇾ く 仕 ㇾ 在 ㇾ 差

郵外 ㇾ 吹 ㇾ の写 ㇾ を 哨 ㇾ て 祀 ㇾ る

文育 十人 ㇾ ㇾ 余 ㇾ 次 ㇾ め 一 辺 的

仕方 令扉 ㇾ お 防 ㇾ の ㇾ 仮 ㇾ を 務 ㇾ 一 リ ㇾ

刃 の 実代 ㇾ 子 ㇾ 務 ㇾ く 友五

拾 恒 色 ㇾ 恒 ㇾ す 畑 の 表 ㇾ 多 ㇾ 業

、 ㇾ ㇾ ㇾ も 加 ㇾ め 税 防 ㇾ る ㇾ む ソ ㇾ ウ

笠 紙 ㇾ う 色 ㇾ 寸 塗 防 ㇾ の 地 母 白 ㇾ 紅

、 茶 碗 ㇾ 添 ㇾ て 色 ㇾ 小 茶 漉 東 羽

枯 梅 の ㇾ ㇾ 娘 ㇾ の 袖 ㇾ を あ ㇾ ㇾ う 世 敵

仕 好 所 母 ㇾ の 左 ㇾ 力 ㇾ 主 ㇾ 如 ㇾ ㇾ 医 防 ㇾ の ふ ん ㇾ 入 ㇾ れ 弘 ㇾ

仕 ㇾ 糸 ふ 力 ㇾ ㇾ ㇾ 行 町 出 ㇾ す 畑 形 田 ㇾ 之 ㇾ

ㇾ ㇾ ㇾ ㇾ の 仕 合 ワ ㇾ き 表 ㇾ の 表 去 来

ㇾ ㇾ ㇾ ㇾ

炭 仔拾 おもり 仔去 笠 天向 イ去 笠 大ユ 柿十 本キ まシ 帳

松りと 神立よ 降る ふりむ ヤハ 荷丁 童卒 町 ホ 二 麦士 以之 巴郡 卒 支 二 作 取 王人 二 拍盤 東音 葉母 紀白

日用 炭 仔拾 おもり 仔去 笠 天向 イ去 笠 大ユ 柿十 本キ まシ 帳

[illegible] 月の [illegible] 祇文うまの大神も [illegible] 扉 [illegible] 門 キ角 、 松波 [illegible] 汀 葉 [illegible] 芳水 一相 下木 る筆 吏令 之士 萩人 芝船 除凡 林角 木因 斜光

壬 仔拾 また 仔拾 地雷 [illegible] 母 [illegible] 文 武士 [illegible] 入交 仔 [illegible] 面 [illegible] 山荷 [illegible] 飛 [illegible] 結 [illegible] 乃筆 村 [illegible]

拍 また 仔拾 大内 井戸 [illegible] 松 [illegible] 松乃下 [illegible] 仔 [illegible] 仔 [illegible] 慰 [illegible] 仔 [illegible] 仔 [illegible] 仔

牡蠣（かき）　牡蠣の乃乃面白や
金おく掛の美しい花吹て
　　風曲
　　花をおこして仕ふ献立
大ヨウ　　　

ヨシえ
稗 えら 尻たく 阿猪 岩茸
祐 おもきつき 撫 おかのおろし 撫 のおろし 十余 集加
まこ 雪まじまも お例を 乙り和
寿 まにさくろまて 牲 ろう 冠那
祭いろくもひふる 左角
お客の降る一章 灯の 灯
梅十 俳 後のろうそく お盛
栽 当代も 別後の花乃吹拂 呂杯
ヤスヘ 義入よ出る 茗荷お餐 久我
ムツ 足をより狭処 杯リン
子 他の 中西 平降 東海
使 庆 使のまえす 連支
天河 茗句をよそまる麦のろ 町 三位
伯母あり 始あれ 有栗
那 柿 あお 知えそやる 山猿
東京 老白
杜

ヒ十 茗荷の ひふと尻が イ吹
をこ 日盛も 孫よ 吸向投さや 他子
小役 利田 秩父よ 独茗 紫 添茶
三月 をこの 来ても 水役 来て 茗
志お 茗えよさ 園こ 凡れ てみる
化粧 ふいえふる 妙の花 古芝
茶会 彼岸の 茗乃夕 茶所を 胡洒
田打 云作 田おこ 作才
ふいせ ろうそく 髪 木十
跣花 お おの廊のすうきやうあ 多乃
六尺 足の 椅もぬ 医者の 六尺 栗茗
乃灯 極こ 妙 東羽
そうそあるも 尼空の 中 栗儿
山夕 苔 卑もかへぬ 合点のお 右筆
午牛 い作も 注い支ま 支考

侘　廿の齢と已男ざかりにて丹生
　屋もれ武士の二ん生ともエま
　ゐつふも昔下ま下まと守もる能
タノ　阿の山乃出る日もだのきらむと
　うぢらひきの我ガあるとも
エ戸　付合を居エ戸まて香ゐし
侘　さゝりくとあれゐるく
　智て私弟を礼まるる
エ戸　下戸を呼める雪狂歌の字カう
智　男後の柿を我ガ
　娘さぬ娘の眉うでゐる
　又さゝあゝと娘ようこふ
炭　ととゝと大油もゐのうゐ
ムまゐ　ゐのぬむ状のあと失
　持うまへて書の髪そう
読本　因秋あくロいる盃の芙昏
コニキ　ゐ食とも世のわさうな月の張
　挙白

エタ　及仲　仏壇の茶筅来る恒の春
　をき申ゐ若をゐ
　る士をきう意つる
ル士　日数の髪を浩よみ
侘　大灯て佑あてう
　神田祭ま出す　又。牛
　月ま売る利左鶏跡の灰行
　ゐ帯もへさる神門の書
　ゐう四半尾ゐ尻ゐるれてゐる
机、　木戸ゐ申ま祭ふの立ゐ
　拳の人乃とうく焼ほ
　尾張ようし女子衣の平
　歯をみく物数の炭乃時ゐ
　叶くの花又ふのるすゐ
尾紀、　猫あま舟ゐ渡ゐ
イセ　ゐ家ゐやゐおの数
壬

子供より侍るを事て 翁
△人位学業体ニ用ニ越不逸
娘松の位より一段下ニ侍ル 松 仕り
り掛 毎ニそよ〳〵寝乃萩の 末乃
焼眸乃人を泣セて我も泣 涼ト
△人位越ニ仏忘仏天人越不逸
支忘 昔より四気も部越を定ル 仏と忘の打越
ニ位令人位あるとも人位の振舞逸べき
▲人位越ニ人位ニ越たる振舞逸べき
忘天女仏人の教を事う娘ふ一ツも仏事乃
ときい乃の人あれとも古人と称ス入る乃う
人位と事定おいハ古人と称ス入る乃う
支考の付句とも逸ニ越さるや 翁
うつそミも先の姿も志賀の外 翁
さゝ比 ま乍〳〵と戸を打く風ろ 立ま
仏 布袋ニほ称ス井の化ケ 翁
事う号〳〵ひとまく〳〵 あ作

冬ニ
末ハ事を果ぬ用ニ好ヒ乃
法む仏乃
李もろぽ乃
ひさ
、
笠 祖母ノ鬼
娘も初の白て
忘ルるすゝ
雲ケ
宙
仙
ヲタ

情ト人ニ云ふ子の句をいふ子落ノ字まぢし
詞ノ已下ニ英語康越ふ昭ふ通ふあり
用ト八態ヲいふ其符男女倚伝の行をいふ
相ノ時ニ用ヲて当倚ノ字まぢし
右ニまぢい多用ゐれい乃句ノ句おらゝ流ても
吉姆の法句ゝ今初ノおまぢ仁おすす
人人倚人名ウ人倚ス活用ス カタ 牛格 用無ヲ
一行ニ二ヲ御ノ八上ヨリ次ヲス
ス人 用乃男ヲ外ニ前ニ初くるふ
ウ 誰やともらるゝ当のさんを
ウ用 みゐ乃ヲ風ニ活ヲて
改のまをふるふ赤ろる 生
ゐゐんの神秀乃白おき 柱
日のちゝゝニ改ニ来をろる
用 戦死ノ落ニ名ヲあろうそ
ウ 髪生守乃を男ふ男の名
ス用ス
サス甲 倚のつゝしと気を 按按

用 活ぬそとそもまぢくと向く
ウ用 新法の焼ヲくゝ大を焚て
ウ あゝゝいふ大ヲ左ゝゝゝ都
ウ古 田中ゐる小乃う水ニ
用ウス ヲ乃ニ舟ニ人をちんもう
用 芙容を横ニ脆ゝ月神ゝ
辞さうき町ニおりみる
ウ用 二の尼ニ手ホのそ花乃雪きく
ス用 様を待ヲとそうう陳う能
右一杉の中人事ゐき白い只二句ニ九乃ニ人位
十よう多きいふゝさて芳歌乃下の五件人事
二去の形制をもつむ風発字を
初ハニ三変をおる方仗ニ仮ニ彼ゝ史ゝ
其変形ニ定式とあり彼一例ニいふるきくは用も
又色ハ色は活も皆人位と思りそい倫字乃
美の不明ゐる故ゝ又法門も時と人位をお
限よう皆ニ号を改ニ

〇人は一人哉不便
鄙乃 鄙おくる 堤亭 一人ゟも
修てる月の大般若ゟ右
号のそを人もれとも実に淋し 岸角
庭人のかくも出代るんやら 川
尻も結もめをおの云仕 台太
かまそおらい痛も一人爲 水胡
〇一人は二人 二去 根二
花は二人号人ゟぬ目え 里冬
二人鄙乃 休 ウ中
〇人青訓そう二去
村切う役の人号 呂風
義をもれす人を お雑
我も勇をも人を 林和
隆人とある祝の乃すエア 南木
〇人日訓 三去 カ三ヒ五
るの号も号ま人 七 ハ
地内

ゟ也る牛も人ようく 弱
蒸そう当よまく人 支菜
花きくを探すく人 去来
人の時ゟを空乃分の 文和
人まり 祝と直座い 先之
換都て多田も 地水
茶五年人ゟれく 嵐ラ
令ゟ人も 去 除風
たとく人を 狗ゟの声 支考
教をそうゟて人も 水南
き〳〵人ありとびもを 仄止
ゟれて来をいゟぬ老人 たは
まちくもつ今 客人 白桑
此物て月教をゟも 一里ヘ出て森れやき 教ゟ人重 教枝
清交の修ゟ越ゟ 小袖ゟく人いゟく 乃子 人ゟ岐
岁 岁 岁 岁 岁

人の振るく
祝石(三)
(四)
(五)
(六)
(七)
(八)
(九)
(一)
△又母云 二去
(二)
(三)
(四)
(二)
△子 二去
(五)
(六)
(七)
(八)
(九)
(一)
(二)
(三)
(四)

名

射る方よく臧さまと風ある作あの三匹い
苦くまきる沖ぬそ
一之屋 宇宙のんくもあん去 仏去
世のきえ 空西乃時号 籟
妻人も老き教政の妻 コ屋
妓さちをくみえて二号院 、
炭
麦くの笛や布仲の夕陳 高川
東花 弥一人を あ〜我志の中 仙角
三匹 相得乃あんて 弁 支 行蔭
一休の状と新の考あら キうム
家土を去ょ伏虎の麦 山夕
小弓 恋美の初あおく月の恐 岩籟
数珠と妓ょ少四る 此声 キ角
妻笹う子 孔明の おそ面まれて 宗和
改中くうすく 通因う像 角
焦 合同仲古人名 西去

冬 風雅
去、 志もて宗祇の名を付〜あ 卜玄
日東乃妻白う坊之月をえて 重五
秋社 和名まくる 仄 芭蕉
紹巴う新 ヤ収
載 化 連俳もせ 千
イセ 妻 月花を 葉の白乃梢 支妃の名ょ悟 茂林
随、 終も 梢 俳 伊勢乃梢 支妃の名ょ悟 保友
ふくそをいよう 夜谷
柔 俳 手と宗祇 千梢
花の宮 支角 不玉
花の張 田入
苦の下よう 出山乃秋也ト伯 、
負 仏 △支名式名仙俗名 各お去 乃ょ之
秋乃ふ乃 七(ま)の 時 之川
八夕 去 伏去をも あ伽る我をおて 寸昭

一説ニ仙 日影を望て仙境ニ入仙丸ニ
ハ桜陵狭榻や仕易つくらむ、
杉自 杉俗 長助ゑめも 今の古尾園友
生ル方ニ印記あるもおもろ 水南
侯橋 雪ニ到さら堅る乃 百助 乙彦
孫六ハ吹草季ハいふ事もふり 健峯
不立のく 信のごとく 似去
又宝ニ乱ル字い 古ハ去
一云没セ日 云ふ事ハさ絢の山乃雪まこ、
何セニする 俗の与ふ
乃句ニ俗云ニハ代ヲ云事
△老若 面去
老松ときいのごとく 松のごとき 狩姫
や〳〵 朝ヲ重むニ老の静近あく 和乃
老ラくの井計ニ老功を 招ふとも き角
花橘 古川 連哥の口も古ふ 古俗 席抱
桃

花盗 ゑ、
梅 ゑ梅 友
桜 小使ヲ 梅やセ乃枝も老ふ 老ハ去 老ふ 老ハ去 老ふ 老ハ去

波
おく 足也る宮の乃中京去来
松のあちこを通るこ京ウセ
宇うゐる秋をよとよんとよん京く 志民
△誰防獨使面去
山タ
菜刈
拾
山タ
遠
八タ
吉合四 使乃句ま已ト あれとや氏面去の自従あり

△已我 五去
小いもりかこの門さい 白牡
ちらてあきふこ 、
山を人る宮く我を 柳に
眠れい我をつあ 柳信
て降るまと秋 前い月 青面
系おもそこの苦 吉井
道二ろも仏き 尾 誠人
我志の美水浪 記て 、
△男女 女前のり
吉合四 男女青前ほそり句ニ化美作教頃面
星月三 女降ル月月と女
女松女波ホの美作面去
▲ぬ氏あれとも支考も青州去川洲面去
の他あり美作ニ句の字去加佐之
面白の拾女の秋乃教さや 菊
菊 、

イ
セ
ハ
コ
ヘ
ヤ

月花を愛する彼女彼女 我秋
女房我住 ト云
今招きてもやうやうその女房町 許云 狂
移門休しき女文作れ
門なをの子ども 友征
ゐ梅の内 又石
ろ
△男・女同州西去

一氏梅

吉祥天女一文う筋をく 、
ゐの雪ゐ大女中乃雪侵 升枚
多の花よ女 多
おそ云よそ 狂女の言笑
出女の玉依姫 狂とや 似去
古拾 小町うそその女うと 、
雪ゑ ありむ男 芝者
段五ろ夜の通の男 百花
△氏・狂・狂 西去

ゑ
ム
ツ

式玉乃式伝を名ある画よ ヰ角
表姫 狂乃子供お 良ふ
子供の子 狂乃子供お 良ふ
狂きい田舎 狂 仕まい仏く成 、
△君・客 西去 狂名 千狂名をよ 三身
鈴とをそ 君 西谷 西去
君侯さめ 君うる松 宮雪
ま 君 あらの実ち 箱
まの下乃君 君ぬれて雪の月 冬市
式ふい君を 君 向て次大狂 雪
ふ
ム
玄
浪
泉の家 狂 狂 雪
狂居乃客 狂 狂 狂 お 口 ナ之
わる客 狂 狂 狂 客の狂 お候 祖山
さく花ふ 狂 狂 狂 狂 投つの雪振 文仰
△妻・娘・狂母 西去 相之
狂 狂 狂 狂

庭人う支て奴れも木枯乃 巣已
七夕のよあ一ふ母も宮ききて ヨラン
凋市の和乃末そ
和ろあるとも今い
多賦ゝ出入のおくら礼ま来てりお
森つ和川ぢとおくとう花の姜
△庭人をさ竹をまず おお去
賢いあれとも 仿も 庭人 白担
庭人いおくもめくまる作られす 東羽
まさをさせても和のお若いやま寺
まさくよ 仙もお 珍 付 担
まるう出代おの 陰立てり虫
姉妹 おう 孝 まさ
ようにる竹をあくきを振日一 涼ト
行尸れ 抗振出されセまきひ
寒流のまるの 素を吸うを 膚仏
奏在あふまる比血た 連 連支

△同季百句二のお
句 ア 和のふくれく 卵守也る 虫
ナ 百くの卵の代よ 及根茨て 、
笠 ハ大ユ京もふいあちく出代て 和
ア 出代のよう似ぬちくの行往交 紫物
右力仏の行く季をうてや民力仏よ 浄一日書い
句あまた許まきう

△吳支体我不独 古三玄
[吳三] 労よもとふ我い二句去よ云よ許ま一一
▲同の我よ彼もは多い労よもの我越を独ふま
及すな考彼者の行をえよ
ふる句まあくる冊乃候色 ユ山
一性さき一苟 茎の宮 東度
目旧 茎の ユ支二日同くる目を明て 翁
筆作ら俵よあふく目を宝 松り
松もの候乃ふる 翁
奈 雑面をそまをくる 形の 作、
目首

目のうち黒く正やちまる　黒目　瞳子　眸子　青精　白精　眦　目尻　目頭　睫　眉　額　髪　鬢　耳　頬　鼻　口　唇　歯　舌　喉　頤　頸　肩　腕　肘　手　掌　指　爪　胸　乳　臍　腹　陰　尻　股　膝　脛　踵　足　趾

ひさ　目尻　めのをはしき生ぢ　しり尻士

ぐを訳けん目をいてる　許六

まろくる赤の後肩のやんちとり由

用まもぬ口そくくく　仮村

眦れい寝ろうを月のケ　ウ甲

睫　あろくるきうとんや　太祇

ちまやぬやうぐの色もえぬ　色フ

よんぬと我まてえをまてろり牛

尻　正玄ろそあそぬ　亀　北リン

肘子も肩ろもぬ黒こてヤハ

さんあん尻の金ろ小たくひ　徐ま

白　引股のえ用をる男初色　亡

肩て風きる後の出代　由

田舎百ろ足を伸ぎ独ぶ不二　き心

佐ろ後ろとれも南天　秋航

指股　手の花二まの股をたくらむ　キ角

肖中いろくひろうちろろ　木白

陰毛ろる接の市急使おき　梅窓

仏身　まをひろろる猿沢の池　妃刀

毒よあと陰くろ布一頭て　白

但黛　但もろ〜や符ろ　代悪　ま秋

△髭は髪二去

衿は押すむおとひの髪　油動

笠とれいお髪也るむ革鞋を　箱

陣のうしは後さ〜あふ　ソ隙

督も髪もそれすれ振号　りれ

髪をきれてあろうろある　栄拉

るまの石い跳ておく　作髪　夜谷

△髪面去

月はたてる死作の髪の赤松て　力号

ろくいさむ越のろと州、

毒ろあるぬるの髪ろる　林鴻

尺乃贅白き羽のお法　示右
申ふとすれも呉ぬる髪　空行
要　墨くろく東風ふ吹する　呂丸
支合　同皐月口半足は六品ハ支仲ノ弥十レト
平活ノ用多テレハ折ヲカヘテ尼ハカリモ有ヘレ
▲かくふい大丸の注之支仲ふ教空
寸強ふ子ヨウテと同なてる同まとい年ぬ
△手口目　三去
サル　初の刻乃笑ま遊ふ西方　弥於
情よまをあくむる秋の月　九兆
ヤるまの気方等ふ拡生　キ角
教　悟引よま降さえきる巴ヨリ　百り
栗ひえるまを待てうかつく　弛伯
三月　三く私のままたま〳〵す　页友
東花　ぬきれまを九出てるおくてふ一ぬ
梅てま仕ふ川舟の　舳す席
低　荒仮ふ大ヨのまるおヨて　林和

巳　まの際をクリ秒る松川　口ケン
発　小仮の毛よにふ注する　去芳
人よりつく降ふ仕ほ公にを　良ホ
暇てをれい内文の同ととする　芳州
新のひとを眉目ふ連あく　り参
△改尻扱　西去
秋の夕を改　あ〳〵セ　り東
花又よと局改よ　誘れ　白尓
文雄　ようその乃性の出き　イ仮
さひの尻いをまよ　下舟　益竹
扱加の去ふも笑て山を花　角
教　旦船の扱、よセる　雲小舟　潘川
き債よいのこの扱を　三連
春　あやれて木よ扱い立ぬやう　昇角
至れも日乃ヒセうむる扱　乙扨
月のおいてむ扱をい押さす　小去
△新号　西去

梅十　今ま跋よ春記の表な書日新　梅支
拾　表のおろろを傳てたる白てる　有楽
注良をうつす畑の去水夕葉　口通
岁　孤帳ろ良当すめ一の性好　白粒
琉衆　敍又の良もろ新　去之
市西　負勿孤帳の利ま良もて　琴風
　　貨的程足記のきさごの皇　前吉
及帝　△扎裸敍腰面去
岁　粒ふろを入利ろま花の扎　嵐雪
　　梅のそ去ある阿扎　笠凸
岁　裸ま為ろ角力い法あ　粒
　　敍のまま陣狗の除救のきさ　木琴
白　おま敍よるかんろ敍　常

念敍　腰て風きろ　独狡君　神二
　　中ま常乃腰ま　跋君
　　△为ム三去　海ま去ろ一名ね　及若
サル　念淳ろ人ま西念夜きて　カ三ロ
琉花　笠ぬひの芝ま西念夜きて　、
　　袖ま乃人ま又ぬ为の　大阪
　　おそろ表及采の为九め　私吉
　　为九あぐろ　ヨ十
ク丁　阿の表腰をて　文石
　　日のひつこをんよろ　字船
　　又えぬ乃吳乃ん乃ろ　ソラ
乃仙　風のんれ歩る　一ム
　　私ろあぬんま　一厭
　　四位のあるんや　小袖風的
　　探ある人のんこ　梅先
　　ろの月且ぬの　私り乙
　　台

〇乳 三去 カイ 乳汁 乳房 乳母 乳牛 乳酪 乳香 乳鉢 乳棒 乳歯 乳児 乳離 乳臭 乳飲料 乳呑児 乳兄弟 乳母車 乳製品 乳脂肪 乳糖 乳腺 乳癌 乳腫 乳汁分泌 乳汁分泌過多 乳汁分泌不全 乳汁分泌減少 乳汁分泌促進 乳汁分泌抑制 乳汁分泌異常 乳汁分泌検査 乳汁分泌剤 乳汁分泌ホルモン 乳汁分泌ホルモン剤 乳汁分泌ホルモン検査 乳汁分泌ホルモン異常 乳汁分泌ホルモン過多 乳汁分泌ホルモン不全 乳汁分泌ホルモン減少 乳汁分泌ホルモン促進 乳汁分泌ホルモン抑制

匂　根を煮て用ゐて尿を利す　本草
　魚災てもどろする人に宜し　弘
△重病　面去
炭　強香尿の抜病を抑へる　ヤハ
　以みるまくよ　旅抄
△尿屎雪隠抜そう面去　百よ二三
支来抄 九非日尿臭のやもやきうお日婦女ふう寸
さんと白匂とふとも二三ふ　弘
バスハ風 今も世上のみ抜を尿
き房一人も抜おセおう孫侍よ小仗するお式
のやうて臭仮の雪房のとふい抜寸へう寸
小児の尿屎い魚おのやくえ余人のおよ房もし
て屎する人も抜屎するくまし
小仗の月利よ宮の抜立て架之
三笑　雪房うとて暴お手万　草三
　臭えて未て手抜房りお
笠　今も小仗されらさ一時ん　風山

又操　ちえの出房て　つくそるさ小仗採のお如　二
　ちえ舟とふを　もくんを雪　ふを姉て喉ふ　、
皂ノ　雪房てつひえ房一ふる房所　鬼士
　厩ちえその旬も風まく重花　、
今の及ふるい
セラ　附ふの抜て　ふやの雪隠　呂杯
　病乳ら傷をつふ雪隠　飲水　お
　ちえ舟の白い大和の内を　宇お
雑　連ね　待セて　もんか仗　ふ益
手世尿屎の気を曲宮とんぶ一旬の作もおく
お匂よ高もまきよ好て用る人あり玄像ら作な
飛ほもく付よ多ミおくら決て用ますまる
△実述懐我不拙　古八実ミ玄去
述懐ハ情のやおれの古時時老ある又家の
招よんおのやのをいうてそら像世み房そ

おい湧きるようそ訪きれい表も跳も婦よ
及ぐさるるるりく

印　作さよんもせき校や約て　菊
　　撃きる処めをず押ら　教を
　入山の茨よ及しうき依ソラ
　　（ワヒ　宇宙）
和茄　教免よれて独及る月　菊
　きぬくい教あもロ古あ多　呂凡
　病の女乃如きおう介　ラ
　　（ヌ佰　意佰）
壬　うくくる表を私式之
　　（ヒン　コレキ）
　をまさ小独の振ょぬし舎
　ろ法保て為ふを食　菊
冬　あるる表よ情ト亦
　　（ヒン　カタ）
　田中ある小方う振及る比
　きうよ舟ひく人いちんもう　カ今
あち　我作よいろ式世を皆くへき　ヤ水
　れおるうくう文字色む戸　式人
　花の笑よ情多ふる依おり　今下
　　（不来世　不思）

及衣　うまるの教免よ恨て呂庆　南本
　　（ウラミ　ウキヨ）
　依立支する今の生処、
　戸倍の力乃ぬ世く　支考
艾蒲　陸ちふの春よ恨の身を速　他物
　　（ウラミ　ヒレ）
　翔のあるまい乃ほぬ庵下　千中
　多表ももやく峠へおまうま　口附
△同件述懐　三去
　依よ表を指す　目某　菊
　杖てうう在及う作よまえ　寛宇
　　（ニ）
　在及を次う没うギレ　表ギレ
　さミ、　一今
　　（ヒ）
　手の目乃表れ足ぬを向んう　東政
　替女のある不ふ口ふ的地の奥
　　（ヒ）
雑　再句のるまよ　ムとん新年由之
　　（カタカ）
　舎うまあるく稗のやうそ　吾仲
枋　　（ヒン）
　貨よおく十二帝の身流て　庵フ
及衣　肩衣よ花も吹多い世を持て　考
　　（世附）
　共生よ世乃婦ょさる岑ーさる　意外

□吳山ぢ越不獨 吉八三去

山ぢ六山客歷嶽岫峽峠谷坂九折嵕谷崎
棹ホこしぢ各かをうて越を許まず吳水辺吳
陸ぢの越の佐きき同し

望嶺の客をうとやおく衡 翁

衡 舟向かうはあまたの 恒大 安倍
築山のあれぬ物を極みて 自笑

舟すゝ 太もたも 嵯遠 し 玄席
行き出る雲ようの 尾上ようう 舟竹 下の時多 翁

意楼の白根次ぎ 雪嶺の 松を世ぢ名のうの 東雪
客連も舟も 名ぐる後市 陵指

倉敷 比拾ふ空ま 雅おぢ越おうう 七面
柿十 伽やう 山門ま大木の花吹乱 羽盤

伽さそか 横根高う谷深き月 倚倚

山ぐく伊丹屋 翁
陸乃の 相 雅乙ぐとふ 倚筆

△山 三去 カ之ぢ五

吉名 古おぢ山ぢ旨去ぢそ峯の一花ぢ二之と之と
山を旨ぐく峯も棒も 沖も川も沢も 谷も旨ぐきし
物の海も 峯との去姫ぢ北余の透をて 世の恋ぢ如
▲六ぢ今を雅ぐきとの 行ぢ人家ぢ如名そ多用ぢれ旨去者
足の衣ぢ小分の名そ及用おく見ぢれよ
旬去も矣ぢきく山家の 佐も守ぐる之

いちこぶ山ぢ村乃百それて 如行
相撲ぐ 撲者ぢ之と 指ぐる山北州 翁
又ぢそ通をを 峯の山 風云
及 去ぐれも 峯も山の尾 去来
初茄 山そき作る 家の茨ぐく ソラ
佐やぢぐり 去の山矣 、

山伝ふ　もも草山田乃杭乃来て　桐井
　　茂草を山田乃杭の　勅二川
出代ゝ山の女を　亜合巴弓
　　原の山う禊もる　地菜
　　恨しの山石やとう　東也
　　山侍のもゝてく　原卜
　　忍やる山のあるさの　汉東
越　　なむ時為もの　許舟
　　山もを忘て杉並　九皐
含新　　一に乃杉石山う　矢依
　　山独活い人ゝ五すの　格枝
　　又ーても〳〵出る　郡山　白杜
岑多　　あ〳〵うるて山も　笑す　云之
　　悔次原す教乃山風　弓
山ト　　枝のい光て越る　許舟
　　月あ〳〵石うう　山　秋房
　　もものさく時い　杉を山やある　仁居

　　草枕ゝ忘て月も三笠山　小枝
　　河そ残る　山ゝ乃雪　孝
△峯谷為雨雲
　法市を泳てれさる峯乃巻　四笑
　雲ゐまゝ峯ゝ残て　東ち
　忘う笑て　紐い谷より　大川
　谷の杜冬の月秋の晴より　、
　秋を原め〳〵　谷乃雁　只天
　花そ今や谷中くぬく　、
　山男風為の屋風もうそむ　玉吉
　為雨のむれゝ花をや　羽　壮矣
△山家対句
　山畑乃木ゝうゝ色つく風の為　翁
　石地の坂を　かく　依依
　栄うゝ古ゝ峯乃さゝ乃　翁
　あれゝるたの山も　黄乃ち　小
□吴水辺　越不姫

古ぶみ辺に去ある所よ氷をおの注あて
翠岸の苔も水辺のセんさくあり苔のつるおて
吳竹を婉さらい世界の中水ぬきおおれいと

去　立てのる浪乃舟の月乃行よ　冬文
苔のみをすくる　今乃儒　学
イ舟　薄氷ニセき孔傍の葉て　昌葉
む掬　川舟の孤ニ蛍を引立てソラ
舟水　掬乃とふあとニ月　泊雪
川水　すむれニ天のうつる杜のくれ　除ぬ
あ〳〵　法なのつしみを谷くもき込　や水
谷川　浪こやホーホ大系さのむ　カ兮
人夜ニやくまの川さ〳〵去の川さ〳〵
アノ　矢箇掘て舟の柿を拾ふむ　弦丸
舟水　もすまに改乃髪もたをす　之改
をイ並ふ掘乃　時の夕ぐれ　昌房
つき流す　氷の扉五六枚　東御
答ふくふる足妖の指　席令
怠

氷水　分くる枝のみあり　んを　き角
ヤも　まむ月の川くうき名も除されす　ソ後
川流　冷きはいおの乃　時も　政笑
梅平　ニるようもそみのみ舟仮　梅光
舟矛　春美さうんを射てたきの下　七面
花のまくるを射てたきの下　七面
△水辺　高統　交々　蓬文
苔他の平ニまのむ　兮
み面白くえ西るかるれる　箱
苔　さく浪やふい火行す雪待て　箱
舟あて〳〵掘もきくく傳際ニ　兮
夕のまきを　水
カラ手ス　浦ゆて山ようくる雪の月　箱
と吉又月ま　みセきあくる松社行侯　忘箱
むを　ありをきる小傳ニもれて杜の凡　角

△浪　面去　ナミ　古事記ニ　古今集ニ　万葉ニ

以上とのわら浪乃峰尾　万葉
右拾九　嵐あれ白くよさの夕浪莉
迷ヒ返ふる　仙茎社浪、
あつ風を添すまり乃白浪、
風旬ふか仮壺ニ浪ヲ　杉風
為のくき胡粉ようむの浪
一ふく百句　又をり得うら浪のつあ貝、
手拭のすそニ浪ヲ振すゝむ、
次も発すま大浪乃あと、
皆うのきゝ社浪葉の浪、
左　さゝ枝の林下ニ手も押もて三伍
松の山所もあり乃波跡も　ま荻
次句　酔泥夜乃ふ浪乃裕うふ浪　才丸
枕石の孫ふ号ふ白浪ま　き角
星月　性なくわもかもとさら浪　松伍
ふゝそきゝゝき申も浪立す　松号

拾　面去
風　一々乃雫毎ニ草ニ浪ヲ　小枝
ニハ　手表の油浪ふく　長弦
浪ぬの袖ひくもま跡　杜如
光てうろとよき隅川　杜古

△橋　面去
八橋て月松を答る　人国
板橋ヲタアヒて亜国　長弦
をゝてすゝゝさも馬橋の反　九月
白多乃　ゝをゝ使杜係争　杜秋
板橋ヲタアヒて亜国　長弦
をゝてすゝゝさも馬橋の反　九月
ゝをゝ使杜係争　杜秋
もゝ国ふ木屑の言ニ目の笑て　伍吾
菜川　木号所のもゝ　相之
絶橋の腐屋ふる音の社　松清
強気　二夕意足矢別の橋乃緒さエ　才丸

△海・園・淡 面去 京百二十四

七き 拾 岁 弱

ムツ、

雅 南 ある

杜白

ものの向白きふ不可思議にて涼ト

多き白う はく生る川 左杜

その向岬き舟をつき入れ千川

月雪をにのあるべきこと 舟

横雲の海、

あるも霞の雪る冬の坊 杜祇

神宰とや 向乃吉中 衣吹

これまでの向をそびえ住吉 杜リン

向雪を抱もあん 烟抱てみる 冬布

○ ○

なつで宝 浦の法や 口通

西行生の像をおさむる閑の月 宗波

淡の着う 雪の着や 右紀

△池井 面去

なひ人も西きをて淡のうぎ、

跡の池 花ろくく 狩衣 日

乙杉

一格

柱をそゑす 杉杜田中の井戸 小角

汲めむ井戸 小吹て 一晶

□吳竹 越雪通

皆る山新小辺の越乃泊あきは同

你

衣うち梵いうあ さうて 筠

去え芽 烟る 左乃きうる ホコシ

古我竹月もも 葉も使ひう 嵐ン

氏人の在宅多き花ちう 葉言

望越むれの 去そきん 如郎

田をうすあうこ山のふを向て 右伝

むごつる西案 角の向京町 イ悠

うるせを上る 表一金 曲水

今の乃よ 注を足原寺 梅の上 弘言

お仏の煮 夕日さし 水

草暗う菜を 茸拾 支考

杖風つる 竹の店ろ 悠

京佛

天保 又北川く戻す 乃ち 阿也
川 萩尓こ𠮟の保ろ出あ連ろあり 百川
山も葉ら子を字ふ苗代 ソロ
蓬 日乃山雑乃餅を登て 叩鴎
山也 はろをまてふる抱ぢの月 雨水
面白き地くう 新う芽のと 東度
金案 風の辛さ字ろまいまそ 山房梧
山也 よきあつく 雪の足 如箱
ヤヘ 終のあるその抱根ま解さて カ号
地平 拳の字乃おて 乳机
首ところそう 示右
地平 地字ろて雪宮名集の次る 千那
横ろく寺ところの扇声 木等
地々 田植舟漬乃女社掃刻て 改六
郭 △地 三云 キ角
あらぢの牧乃口呂掃う

つれ多き空地を 松草植ろ地 ようの も祐て 地区の宮ろあ 地ろろ乃きゃ 口頃の笹川 花人ゝ苗実つ △伊空・里 面云 三坂ゝりゃ坂母あくく 九州押原さ 那くゝり 十りの山を 耳頃乃家根八りをろの 一空の家実い 空保く陶表 屠ろむ人多き 故のそを

匂 キ風 菜雪 毛祇 壮実 白杜 ろ南 右菜 一井 ぜや 宋彩 室風

鶏 菜雪 毛祇 壮実 白杜 ろ南 右菜 一井 ぜや 宋彩 室風

簗 菜雪 毛祇 壮実 白杜 ろ南 右菜 一井 ぜや 宋彩 室風

又 菜雪 毛祇 壮実 白杜 ろ南 右菜 一井 ぜや 宋彩 室風

他 菜雪 毛祇 壮実 白杜 ろ南 右菜 一井 ぜや 宋彩 室風

艾灯　爲丸といふおもきもの　可汲
一升ばかりはいる　茅おり　落丸
立てあるふきもの　茅平
茶〻九揃の中く　茅坊
芸ひくるまきもの　麦林
杉葉九荷を一荷　コセム
△京。於。面去　荷
吉宗う到るまでおし掏経　谷水
おくれていふ京の盛りを至下　一京
客多う京そ残る月のを　巴分
考の京ともちもち五りうり　柳士
拾舎もかまそれ村の名を付て　栗ル
山二至村い屋角を引巴一　嵩枝
△市。町。辻面去

市の役う　そこの用　仲志
市のあんひそ店先の静て　有栞
す拾のおい店多う市ゝ至　連支

拾　艾灯　爲丸といふおもきもの　可汲
一升ばかりはいる　茅おり　落丸
立てあるふきもの　茅平
茶〻九揃の中く　茅坊
芸ひくるまきもの　麦林
杉葉九荷を一荷　コセム
△京。於。面去　荷
吉宗う到るまでおし掏経　谷水
おくれていふ京の盛りを至下　一京
客多う京そ残る月のを　巴分
考の京ともちもち五りうり　柳士
拾舎もかまそれ村の名を付て　栗ル
山二至村い屋角を引巴一　嵩枝
△市。町。辻面去

市の役う　そこの用　仲志
市のあんひそ店先の静て　有栞
す拾のおい店多う市ゝ至　連支

落おを拾下の市ゝあつ〳〵て　芸二
多京も、人宅ともぬ市乃柿伝ま
萩ちうくる　市京の背　荷
〳〵、防を　キ角
市人の肩ゝ柿おく　情ま、
お宿と活ふくま矢木の町　支秀
ゐこつる京京の角の同京町　イ筋
ゐ国のあとそ　京仏のつるんひ町ゝきふんこ　戸杯
至柱町ゝ　杉の生垣　二　架
町の洞市の口まやそれ　支
三法。の木辻もうらいふく性　薬太
白雪ゝ占ひくも辻もふりうり　、
△庭。物　面去

吉宅　庭おをそてに」ゐ古式のさ〳〵支秀のさま
も面去のほあり古式そ庭下物も七去それる
葛〳〵そ艾さそみ〳〵

れ状　　秋雪まおきて後の月と花　乙彩
大屋ニ六奥をきめて並みるる　本言
のうき人をそやす雪ニ月の宿　松宇
雪　　川杭ニ杭の得を宿ニ納て　楊氏
楊ニ　　ゐのふるさとニさびく〳〵ふん坊　小去
岁　　反故ニ反故そろふ後きひの乃　支考
あ〵　　反故もあちら〳〵寺歌一重　栗ル
宇泉　　たすきひの　　堂いふん坊　六之
拾　　△田・畑　五去
夕　　秋の田をうゑやねるるやの去りて　越人
田ニをうひてゐまさきロ　翁
すゝさ咲田の出陣くゝて　、
田の中ニわくやねんの手ふし　、
初秋やあもまき田の一ところ　、
田面ニ後の招きの手　知之
非ニ死人ありる人の菜畑　翁
小畑ニをく〳〵ものお用　、

棒　　仇畑のゞんのまろに新の月　伯祖
岁　　雪ニ移る　此のまさおりる
△田ニ畑をうゑ二毛　、
移乃ニ畑をふゆる大工小家　白紅
ち条てそ有て　田ヒ　、
△乃　三去
兎　　日午さ寺ニ供揃てまのの乃　ソノ
一鴈　　廣武老のはるの乃向ふ花　翠桃
去指ニ分ニ　コ去
立をおそれむ乃の〳〵乃孫数　、
ツのくゝ乃いろ通さゑゝて　乱什
発　　ト雪の乃れてさひ寺の乃　コ十
朴　　岳杜のあちら〳〵むけの老狭乃　都笛
かゝ〳〵乃をばゞの不拍子　、

一橋

△石。岩。砂。土 西去 京ゐ去

去の西石の名乃者すこて 清風
石居そう おもと一本、
石菖ょ木祇州ある乃今て 方九
田の中ょ耕砂そる石の 風
石和立て 門の西寿 影業
孤立を押る石の 和歌、
石ふこうすき 九
石碑ょわて 象潟の月 ソラ
厳まる宮木のくさき者うて 武人
岩の方より 風
岩ふ升乃の 十
ひふ砂ょすろ 十
小砂ふるみうう 十
玉をつくまて 九
孤立 西去 京ゐ去
雅拾 去 琉 衡

頂きの今ふつき土肥て 京ゐ去

吳居処武不頓

京ゐ 古八三去

ちょ居ふい二句去ゐ門い居処ょ三句去

同二 仲用の吳おまて京ょ

△蕉ふ吳居ふょ通ふさふ自ふて宝い古式

を浸容て当れい用ふて 京ゐ

居ふょ人の住ふれい「宮中義房屋門

垣壁築地又都当吳ゐょおの新い句法居ふう

あ乃文新い詩句も及ず吳居玉を題さる者い

巣の武ょ宅老の武を題さる同

小文 西住ょ成一 ちおさうひ 翁

ちふ 指ふの新利乃ち活くさ イ 盆水

ちホ おふく家のくさき者る お 史邦

む指 寄ょうのあと者ふひ中く宿ふて 狗雪

ちふ 吳おぬおいれとふく 呂丸

古ゐ訪をちふめさる桧皮茨 翁

拾 ちゝ
尼ちの去る〳〵と志ろ〳〵と 昌碧
狗縄あれを水のときる〳〵 独処
夕良乃新ようろ〳〵冬〳〵さよ 然人

抛盪 ちゝ右
七のやを推う又昨そとふ七ち 巴兮
孤神ようも西の日そよき ソ由
夕阪う否ようち〳〵お阪う志吹

攻盪 ろ右 ヤう之撓
上阪を言発孤ようち寺を捲 仲阪
電九〳〵る空ようの日のあ〳〵 千中
掲さ〳〵ちまれ満の仲ろつも 間風
二ア庭のそ〳〵隆の巣 宜由
越れて志の尼志永〳〵 以柱

笘 ち二死
女そよやぬちろ〳〵ち ナ山
あの又ゐるち〳〵の掲ようち 産支
二阿の志のもけ〳〵 りお

レ、 門口三挑
矢うふ〳〵きろ〳〵ろ阪やの看板 知角
茨口寺芳もも九万八まお 名及
一ア の今〳〵ア店を与ろ〳〵 飲水

梯 ろ内三ヨレ
出代の内い内多も 択う什 有栞
ねをんの前よちお阪ようち 七西
志ち凡のある日い就ろん 梯支
内い亭〳〵をあて 番ふり 呂杯

造作ちの 阪う晩 徳 千梅
内と名の村を破ても呑ろる ゐラン
悲志の阪う宮乃加活 佐角
千梯も店をうさる和月 小渓
七の笠よ及ぬ丁のたひ刻て 茨芳
十新う〳〵寺号る一村 支水
志西〳〵志ちの張ひろぬう 田新

小阪のかゐう猫の狐せき 山市
掃のけて筆をたく板のち〳〵 右号
ろ阪の七ツ記ゐる茶度う 字残
ひさろれをう 有阪ろり 菊
杜風う荏のア志つる孫入て 完永

雲 笈 帑 笠 犖 災 古 笈

〈家・宿・門・戸・垣 五去

家ハ人ノ居ル大小ヲ焚ク家モ有ル一ソラ
宿ナラク 尼ヒトノ 孔 、
二三新家ノ淫ヲ月雪ヨリ私ノ宿ノ舎森ニシテ 淫乃ムチラク 淫六
各武士乃家ニモアル 宿 箱
住ム家ノ宿ノ柱ノ月ヲ 宿ヨ ラ
ミレハ礼ヲ雪テ白ク翰附宿 泊タ
未ダ宿ノ宿ハ 宿白ク
門迫ノお成ヨリ山ノ裏ヲモ 栖ヨ
門ヲノ家ヨ小僧ノ門ル和リヨ
門テ押ル 壬生ノ会仏 箱
門メテなまつてゐる面白さ 、
門田乃栖ノモヤヲつく 乙宙
大陸ヲルくノ門ヨ老〳〵つく キ品
門メてそつまそ 卓僧
乃門テ和ヨす門ノ秋日和 古芳

皇 ム 歩 売 面 古 岸

〈戸・垣 五去

栃ノ戸板ノテロフ夕月 小枝
葉戸門テ欠ヲ生ル 、
戸板ヨ伏シ 戻申ノ 札 越舟
冷水ノ底ヲ捻ル井戸ノマヲ 、
眷戸ルくも月ルくも月ノ新 白花
我口ヨ戸ハ立テ大ユとも 右記
ちるぴう垣根ヲうつ風宿 嵐雪
栄垣ノ古き郭ヨ茨ヨリ 箱
茸垣モ朽ル此乃花垣 隆五
垣ノ泳乃 胡瓜作瓜 りお
さ一歌ヨ忘ハちの一重 垣 自笑
跡ヨハ垣ヲ枸杞ノ和お 橋東
〈塀・隔・障 五去
さく花ノ塀ヨうりて路白一 嵐雪
ちヨ似ヨ家ヨ塀ヨ白つき 荻人
ヲ乃ヨ乃ノ宝ル塀ヨ一 枕リン

あ

拾 枌 蓼 夕 行 芸

釈也ニ娶する 娘の事を お杉風
△但烏柱 魚去
去そうり乾すお住乃侍 落指
山伏住て 人吟るこヤ水
雪毎ニ梁たなむ住ひうふ 低水
誰うむらむ 碑の語乃春 西向
烏ニ大灯ます十夕の 呂お
一茎入ーて文廣烏乃月 文叶
樋をひる烏の烏乃月使て キ角
たゞぬ戸ちる楫春社 烏 春雨
小売ゝ行き孝ちる楫在 紫友
脳室の中ニそちる此在 枌討
△店棚琴 魚去
去へ多くの仕事の店も荒果て 朱椒
娘娘 素店あり一の山疾 垂天
たゞ事の泰初不伝て枌の上 柱文
枌の四ちる 神の魚 枌 史邦

戸 難 ユセム ナ 奚 苹 岁

古ちの魚をふめいおけ 風茶
妙方ニ面ととゝてる袖 、
社巳ちむんを ユむ住事ま
月ケを入て事ニ蔺乃白 文忘
△居隣 お去
△居隣 お去
琴ま花ち所を結ひく ソラ
尾ち花ある町の老ち塗 汝至
黒谷の庫ま白きけー畑 采麻
何ちもの陸乃 熟ー ま冑
陸ま内交のるま乃春角秋 摘朱
よんおく隣の人乃まうて 昨ち
△風呂 お去
新団の辞交のそそぬ居ふろ 伯風
居衣一つく ふろのタくれ りお
山ちの団ちのあつふるの玉て 栗ル
ゝゝ社をおちます あふろ 岩航
△秀清 お去

三日　ふさわしくうんと人をいふ　葉浪
ふんしてそそもとも門子　案ぬ
△家蓄家根　打ち
お言え目と鍋てきて座敷　都度
おしまの席ろくふで布川　松吹
雲　句　笑　中てろくる家根のまろう　許六
百ちの陣の代は家根ふきて　り由
梯の実ろ家ろおれくきろと　ヤハ
戸てうくみ一居ふうのお根　、

□蕪

本図蕪句のるの式を用す其家嫁娘治療頭痛
の文字名目ろ悪といえす手呉句の云ふ悪
あくろ文字ろ拘す蕪句を生ろ人一般あま他つう
蕪を句ろてすとるはし悪い風雅の花実ろ
出い二句より五句よ多ろとも先三句ねて
張陽の乃理を定ろる独更文字名月ふ拘
すほをもとする故ふ陽て応句も五句ふ要ふる
時い必ず残の跡あくろ拘て一章の要化て
拘る故ふ多くい二句ろて仕ろてよろし
▲張て字二度の服之法ふ往ろ張る時い句ろも嫁治
式故ふ張てするるを楽ろ意門ろ二句ふ張る
とふ名ろ式下ふ蕪を張る法をとくを見よ
本図今の他此ふ悪い必五句ふとて古ねろ

カイ印三

ひる哀の字を並へまた哀の下に心あるまた
似寄ものにて似ざるもの多し哀は悲と相近くして甘きまた哀の字よ
もちてなすもやうをもてうちあつむ點

第一の先よまられやとまた
見ゆるやうをめぐる人のたれも後の作者の眼
哀の作者は其哀の深情を又分られ彼と
哀の二句と等て哀の決て二句とうつへ
哀風の二句を以て其次の詩るも歌よりは陰
哀調もまた其次の詩るも歌よりは陰
詮するまた哀のみなりて句まあすとし

今日後若い誠五十句百句とも哀句多き時ん
一生ともいを守端おと守かくもう大切のおよ
哀句は泥く僅二句一首は出る時の幸として初
て老年哀句稀く又多く哀句ようもうり
ひをく一生不出来まあれるおよ哀句出ざよう心

時に二句五句もあるもよし一首を守ようむ時に依て分守
ると句ともを捨ととりて句ともよし
もよく哀句も多く出よりとうふ句
▲客は二句以内句数のうち第句のうち
て二句ともに捨すまた哀句決
んのさとし去来伝なまた哀句を読め人多く
法に依ると今もまた文おて哀を読め人多く
•哀句仙二伝ようてまと 南栗 ア 句に句あり
•白句ともに一あすくと八句を出てう
句句は以下のおい梅依伝記のもし
•垂糸の老い みむさ古句 梅十伝
十句伝ようまた哀のまこい影ーうまでも
伊氏と上ようい垂糸の老ーまこ
熟句哀のまこを関るまあり彼句集よ
おやうに君臣父子夫婦兄弟朋友のまこをはえ
かくて哀をつくり老後世の集れ哀新よ関し

されい蜂ものうの川あてもそ人の伝連ふ中い
云俗もらいふあうナひあむ毎亦のをも氏理
あ了或い父まの指或い君皮のの奥を指すあをう
るふい彼海ひの述うくく其敷さあて亦のうろ
へあく遍おるあるみいあさ人まちあく対彼れ
強ないそで止すとえ色元字面のんいいまかるか
き時より皮日の挽指を掏まて席よ法くへーさて
白出船定り寺二と変りて省てみ工指うくく文
ま能て又特ま立を寄神教亦喜弟名伝伐也李
月むの配ま頂更も油ひちまの七寺と以ても連底のん臣
あれい兵没ぬ変あ了或い勧て皮亦をを
矢寸速よ主を油尾寸兵天程よ法ふ正風の
設之州くくて亦亦多名指ここの数席毎よ
変るこ必古俗を概とて已ら抜き停よ亦亦の設す
るあかれさとそ在する省おるあきよ亦七む
いまで止める方指あむ法の設も皆志う全

〈亦二去 ホ
刃云の恨を文ま出そ——箭
琴爪をーむ袖乃橋多 叩偶
髪おろ寸估信ら姫裏て 相楽
面白のお女の林のおすや 箭
灯央風を男ふる四 偶
川中あく琴を角ま結分て 楽
寿まそ女ま琴婦ろり 箭
花屋風の声ま波くく 偶
初秋ま恵まそぬ男を 秀估
他ていすする偶のふ袖 嵐雪
を乞ま亦のんをおせそや 箭
目の紙ま先千ふ去てやて 洒里
も妙ま当寸孔のさむりさ 川午
女まそうげおふ みる 許六
頭悔のん中吐一そんう 徐ま
おそひの先口えま照初て 汉村

十あらう古き卵いあ〳〵ひり牟
種の亦固よりて見せまらう コ尼
死ぬ子を亦て亥亡ぬやめおを伯免
子皆いあ〳〵ても独いひく合亦 茎二
亥をする天実よ亦死の元 合 涼ト
おらうめい悟ゐもセて伯子抜 杜茅
世の哀あをれ〳〵ぬもちまおき おりと杜
頭悼も僧よ 伎没の弘抜
先悼しみ ちん文イ入 を胤
人中ひとり行くてろ 九十
△亥字面云 古おお去
亥の立まをお陽そおまみけ 仕事
亥の剛あよおあ〳〵人おあり 、
补代も守する石文の亥 表定
亥許沼ふ志人あ〳〵も指ち 、
ひん命亦をうりてやや〳〵悟 弱
亥衣弱の杖よもち〳〵おりて 、

ムツ
、
包
警
氏亥

亥稲やムの祖を売名 沸立
挙句ま亥を挙る接抄 、
大抵か月を和〳〵する亥 り
まをくてちくいれるあね亥 、
孫ちきい爵と財と亥 病 ばお
茉蜘の友々〳〵亥 杖を
訳字をよめて人も 水南 き
関の地亥も亥のたのり 及朱
亥すう〳〵汚あ踊殊日 前白
訳又の謂て亥亥ます 、
亥猫そる白志門依生世亥の使あきある
ま投込 ヒテ 和する亥 ヒ ちく引める亥見あく
亥和て分て亥促あれいる ま そ と学合
りそい亥字生おおよめて拙一夜今古傑あり
とも支汚矢生拵て学ふへし
△非亥亥字亥る載不確
猫麻雅の妻亥試い訳生亥友をちるまの

亥字い亥の載を嫌さそのゆえ三去
みんい亥生亥用の亥字い姫もぬ(ぬ)

・亥とする麻ま角のえあま寺 一イ
れそのの果乃小栄拾よう之仲
ニあく仍やそのまいそぬ化ん了冬
さりとい涙掏ニセきよ 朴人

△亥生孫る人仍
小文 秋拾の文て床とる拾ととる 史邦
成秋拾の月まのろひ寿き彩法時の振ー
浮れて一秋の寄よ袖をひちりむとえて

百里支侍舟のきあく 莉
振と足て舟と航向きあくと侍る仍の亜よ
作也をそう作去百薄の二支之佐法阿二百の悪
満れとも支侍ら河未亜信みと舟字を称る
よコ八船次の湊をよ彼就をの契と結ー を
只そうめ吹風ようん行帆よおあく拾とえて

教別ー土侑対木の行只 貸永
対未様の舟ととういそて走花ようろまい
家う明乙あむ家よ変化の悪を結くい亜乃
師い潤れとも加くとカを入るお句よ音イの
みるむい次の化去の拙うむと支持の用を向く
向うよ走侑対未とう改拙お局を拾禹の光寿
桟の亜侍るへきたろまるあく伍承のひえた
イて只加よ盈あうとえて

寿も原れぬ中い生孫云 邦
とかうう孔只始亜亜あく次い対亜下足久
三い闇亜ー変行ー作の恨悪ド五い初亜ド古化
亜古の畑亜八い屋亜九い初亜十の契亜とよ
拾よ一句くよ亜信を邦て新向よ走少男女去
特法弱文俊寒亜実を分て侍句く付い句
千句とえとる変化自生あく

△哀をおろ〳〵自由よ哀法ある限之仮令分合
九哀を除るる自由よ哀法ある限之仮令分合
うる自哀よ除き悪情を止よ除るも可救て為のみ
みるる自出あそそを限よ悪を止よ除るも可救て為の
も自然仕之人情さる法を含さる有よ或い孫
あき伝を依て除むとう或い残情ある自を云
程よ以て有るのみ哀を失くるのあり等く
己下よ挙さる哀の終の分自を為之よ

△花よ陰よ哀　冬〇月　七ノ有

花よ恵を仕るる法あと制する古哀之捨へ
まさるるあ〳〵花よ仕るるあ〳〵花よ仕るる
あ〳〵花を挙あり何しそ〇一注百之

哀凡　〇あの月も悪哀よ哀む拘のいさきよ　翁
花仕至　　春之情む拘のいさきよ　翁
　　△陰猶よ時めくむの陰うし　ソフ
式号よ哀あ〳〵るすむ不あ

三匹
　おれう痩い芋と云哀　支考
　ひろ〳〵と肉そおを見くや　及来
　うのきて哀哀きて恵　行基
　もちう姫をむとおうり　乙由

雑
　〇月を平陰う恵〳〵おを月　フ郎
　きうるとむこ角乃情し　千化
　放て吹ろう梅のトう　キ角

秋ノ夜
　〇月む い男あて　陰月実ろ　乙郎
　　秀衡も哀あ〳〵悟乱陰　小枝
　　頭悔の二字う陰れいむう　桃如
　　情あ〳〵たの油を引さく　翁

拾
　△冊子の除まよ〳〵冬笆　丈艸
　△花生都う翁をかくこて　翁

七十
花部
号風
　　媒乃声　杏皆
　きあ〳〵をるよて脱る冬生　重行
奥　　恵髪ま〳〵東風と吹する　呂凡

若
〇老妻の後姿のおもむき 正去
〇子供等 彼もうりそや、
冤
〇二つある児と云を自と云 少風
我人も来る出代の去 来水
〇あつほしちりの君もむの数 机り
台
梅と柳の印うげホー 来例
〇沼の冬泊所に望をちさう 民杖
凡
去まえて 又く
〇むかうものを眺て 伸仲
和辰
もむ起こ
人に兄よ角おと寺麻 小去
〇数詰あるむの新町来て云 イ杖
拾
口挙
又て去く 柳山次 世明
〇うむ中て著とす 机茶
例
始めるのを去をします 業云
白兄
〇あの折ふ甘と等て 店祖
〇次おて 三人乃云 キ角
挙句は始て云を生きめ 不興ある旅

こゝにおのあるよう死付あれい挙は苦々寺
〇行有
只行有只君子有の中云月まあ氏あよ
日ま行るお我てもう和あり又行有の月
上行る句も旅ようてい云あり
いとをき人の又さく引きて 不気
例 取去の面を 作くり 羽
柏白
・行有のうをよそや要む 妙
〇茅ヨ行る 月の さ楚 庵柏
例
・〇姉妹宗の神月三月を入て 有伝
・句を行有く行一白業 気是
只苦まあるあの此ユ投入七 重衣
姫あのみれも行を得ム 已百
栗
・行有ユ柏要姫のあのめきて、
〇横川三月のまろる中重 不五
多行有
〇妻意
拉ヨの句に古姫ユ共ちく作ユく必今あり行

を老ふるまでかうされと祝れそうさるを世の名を
又るよ家に毎に妻を娶れと男の慶は稀とあり
居続妻妾の絶より自を容む女房「召文と呼き
今母の伊右「衿よつけの雲まで哈り役日
別妾の後合「妙な人もろそう「根引「別文のたり
新「伯父の美又も守入寸柔い弟弟の男の文
房ともやれて容世のさぐあれい文人の活曲く
云のそうすまをもゆ他性とんだつるそ
れ意のおはる休き人あるむ

難　歌く拍子はそろく　佳六
代物に拾女の化粧あやあるまそを怪あ歌く人い
必列度の妻あれとさすくるされ乱る容を取
ら伝代文のそ程空の底をお抜一文人と
公もも文物よ文人の妻すする討を伝て

廓へ来後くすま列　女伝　竹を
とかう家は妻の意をちるま廓の居勤され

いり女伝の人取よお扱の妓女を好一彼方たの
頭女はおをえセもと画ふ情を表て

菩薩おくろ井
井よおくろの冠を令くるる略字とて彼極楽の
北方井さく大和の仮名はわきて勇翁あるを
とお白くんを招セくうえ一妻をちるま女字
招をを出され家ろは押印を妻女の口拍子と
又左井はさて字来原のに合され左は大林を招
右は旅おを載て一生をやす討を作く

旅も成原るも事来の恐　気角
かくい旅くうに白廓を出すて妻化白生之
かる白法をはる時く方文を抑て手句を書
法男を掃して三つおまで御む入一

冬

雪の粗生のお社会所き　カう
衿よう旅々斤袖をとく　羽
化人と招を抜ま次おさむ　を五

おなじ人田舎わたらひ　ソラ
芳恵　芳恵う恵き君ゟ名もみて　前
髪いそ〳〵そ〳〵と　小枝
を世恵二ふ生時く二ツ必幸恵と定一人あり
弥よ和伝の幸恵を分むよう恵あさ方ゟ
うむ仮令一生恵を望のさそそ白毎よ
変化あく何の足蹈ふゟあむ
根本　七ふ内　丈二　実恵よく生自慢の一名是　コ弥
舟よおよく〳〵　名あきく〳〵　ソを
き一甚ゟの伏を二ねろ　キ角
桟吉出於の業を指をむ　才九
丈三　きめ〳〵のお恵ささそ佐　弥
いろまきに生ての人の経一や　ま
和女ゟく〳〵あ　清風
丈八　情一ゟ分い芙令のおてう　前
志の人の乱痛　百ふひ　角
丈五　深世とうき向井を厚一め　九

かく三尺五ト読ゝ白ふ及妻化いう
〈芳恵
今世の房人の分い大方「ま中凡ろき「さとゟう
幸苦「深を他「郭南の庇「伯又指ろ「村のセを業い
「深なうちまやニろの度「判木ニ押ろるう
ろるとをもゟあ　弥
衣　新ゟの物も今う　川向七と
芝伝「のうきニ法ゟ「分のおゝをきは毎の生伝
ふ〳〵ゟ分ゟ座て教ゟの伝もふ〳〵明ろ女ゟ
新ゟのゟ庇ゟ招くかく会む時い風ろあり
七ゟゟ　扨ろとうきくいろくよろも　一イ
ふをお法悪莫作とゝて一　添ト
扨ろきつさを又出一分ろう
菜はろと人の振を石速てり下
ここくの中ニ人の振一石おふ一　キ風
待ろのうまいろくろ前の中　前
なく一ひきのおうきの声　仙化

古拾
室生の未葉あり今は刀弁千葉
別てやさ〳〵と合の妹セむる様
号ゆゑて蔬の
小歌の恨きまて見去セ見
招くの意いまて見去セ見
招くの意を寄て文ぬるこゝ
さ向ふ七中の方をおれ
葦いとくあるき者むし
七合の歩乃恵冊まこゝ
添ふ之のあるに日 池川 秀年

七ノ有

◇盗人意

ゆるおとろ〳〵行義の法 治安
盗人を連之妹う方を法て 箱
行るを及実〳〵の 神ソラ
古ちの乃をこるに称あれし 已百
おなく〳〵勢る盗人の書 梅牌
成ま事あめて裏をく 春盛

◇男之

男之ホま柄そのくちの表裡ましきこと
きめて立居哀ほく作るへし

ほ　むり性う治安帥の泊を云て 箱
きぬ〳〵方の陣の 打打う乗出う 治安帥の新う抜ひう 帳子う秋のくきめきて 美京の合志まつそ神乃為 陣の声をよその 小夜衣の一抹乃う町 云分のちく〳〵と 立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう 帳子う秋のくきめきて 美京の合志まつそ神乃為 陣の声をよその 小夜衣の一抹乃う町 云分のちく〳〵と 立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう 帳子う秋のくきめきて 美京の合志まつそ神乃為 陣の声をよその 小夜衣の一抹乃う町 云分のちく〳〵と 立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう

ほ　むり性う治安帥の泊を云て 箱
きぬ〳〵方の陣の 打打う乗出う 治安帥の新う抜ひう 帳子う秋のくきめきて 美京の合志まつそ神乃為 陣の声をよその 小夜衣の一抹乃う町 云分のちく〳〵と 立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう

恨　小ふ人 市仲 治垂 忘森 去来 呂杯 羽盤 京乃 位置 位寺

零　陣の声をよその 小夜衣の一抹乃う町 云分のちく〳〵と 立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう

低　小夜衣の一抹乃う町 云分のちく〳〵と 立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう

去良　立の至乙う おむ茎生 合彩う函志張る 治安帥抜ひう

他あ仁　合彩う函志張る 治安帥抜ひう

◇七食意

秋のおもく乃文陸奥り和
冥　雪人も亦之亦久て袖の雪　茶巻
ま把のワらみれ乱そめり　芭二

△老の意
老の意を伝ふ〳〵んやるやきあて一ま
まろ〳〵の杜乃七思ふ方もあろ〳〵

象雲　理為の夫も袖のぬれて　羽
閑　七のちら〳〵娘布〳〵る　倩川
人を手寺老〳〵ダ天宮を神ちり　糸巻
育　見えとやうみ時をぬ、
狐童を庵部も有ろえろてり和
牧　後の母方をを宿す　も　嵐牧
臣居をちとそ　伽　白史
未初夜もみぬむのちれ好　由之

△後家意
夜やや〳〵夫人の姿おろくて　ソラ
旦夫ある日それ芸まろ〳〵　素英

拾

祖　秋風ら時の状を出ちら　拳白
　重昊物ら青〳〵青井　湖水
俊知　男文ら糸る　大腸
　後家きくえ初てき　三井ち
三正　初てみ寺の宝ろきれて　菜小
　後家の庵乃竹よ乙のろ　秋ら坊
茅州　お女のお袖ろおるむ　支考
　木乃跡のもし　相之
貊　古君のやりまとありてやき
　戒んまろてあ　亥人　店著
雪白　寿保卅よ去ま馬てろ　李夕
　寿ら馬てろ〳〵物て郎れろ　れと又五人ま馬ろ町い
　のてるる乃つくとて古ら云を乃よや馬ろ遍
　昭の伏をろて寿保等の姿を当て
　乙ろめてを引るとろ甘扇も　和泰

と行くりさて一変を拵えむをおるい蒸汽
車きい文七人ゐを未まと発し申こえて
ま向のお乃ほうぬ井　南に
松白　ひとり嫁の久乃あらく　住ま
まる男やあこ引くて車掛の隙ある小船む人
のさそあこむ庄為田の宿あこうさくも
加めきの祖と文化人の句を作り
条の弟を頂き恵をて　盛水
と行こう依おりの老をきろめて准こる条の
あをちくこハ名井おの教発こて文たつきこ教
名き夫名もぐむしこおきの乱の哀を俚て
候くくむ　称庵るし　前
と行こる文杜の記おこて文母の実俤おこむ

△俤恵

俤の恵筋ら乃あ一只俤
あ一俤俤を為す併のるんきつさあむ

きて宮住の中こ分をおこ
てれくを恵りこて今ちる乃こ
為あむきあ彼恵母のこ乗ほき安をこる
男麻さ思恵
麻と山中の抗あめこす木扇　き次
居女中の世をと足ちるこ文俤こ出恵こ男に悔ホ
忠門除あ一俤俤の法跡まおむ文母の抗を述て
　条俤あこさそ茸抗　巴号
と俤跡の時を他こ吸ちるに作ちホこ
年抗　男こ忠乃ら
式ちの姿に血こ熱こて持て口合する効れあむ
あに俤俤の名先と抗けさえれあこ文母を
住こきこき恵人のお合こえて
　抗行こ教けさちこ恵て　壷平
次こも字を始て衣ち礼言ち抗こる俤と

又之次住こうたる乃の戯をもて
扇を匿すり乃あの曲を添え
とうう此頃いろある人の記念や
印　初恋ノ又ノくすもなくくし　コセム
甘きれて傍の　婚く　翁
拠灯を頃廿ュ秋ある　ものまさ　寛子
地をするむうう　空のふり袖　ソラ
五六人天台坊と　色めきて　石乗
ほもひるの此芳も十八九　五羽
仍を彼ノ秋姓名語も　午御
り拆　豹ノこのきを那け小性尻　辰化
ろ　乳号ときのこそすりの恋　支考
一号ノ頃二三更　仕ノ　万子
義のおちくよ　味ひ比丘尼ン　呂風
字きら物ろきを兵ュせき払　化
あれそと下ま
△発ん訳お恵

茎　為羽ムの髪きる女愛ュ来て　卯陽
恵を尺彼る新兵の月　翁
亮をさつ独念山の奥ル一　秀佑
売ある夜を白ふ風菜　翁
発く新生活くおうさよ　戎人
尺よあるへきちのきぬく　口通
月影ュ昇きとやらを透入て　翁
忙りて入すもの亮の豆栗　汉村
招まおろくと傍つれるき　許六
尺よある雪の乙ひそる洗髪　木孕
△うまあり赤
仙柴　卯乃月後雪おまりの山振白　翁
庫の内文おあ乃寿　仕き
ほろむ兎のめ今の袖枝　杉風
只のけふり帛を参焦　翁
菜刀の先ュ根いを守ま一　風
後雪おやお起乃寿　翁

△下女衆

氏乃の法を施こす他社の表あれとも最初ゟ
えらき下品の意味いんきよく体ほく哀ふ作ゟし
昔お法の考こゝお女ふ志工の程こゝも海の形も
大ゝさ物の分よそあめれさるを此界の内を
き下位をよもしい作法のんあさまゟむら
八夕　陸奥ニ名古屋の城乃殊ゐて　之川
コハまの往三そ一ニ舎ゟまろ方をおもてして
ゐゝ西ゟ〳〵似気ある孫も宝まあ人ゟ人
ニ別〳〵き女一又古て　摂る意もすゟ　イ人

松のなう摂ゟ
コハ萩敷やのおゝ下おの店を跡ゟ海ゟきれニ
古人大方二句そ止ゟうさるを次の作法の名を
ゟう志ゟ歩ゟ女物ニ支店を一変一て

発士のネろゟとおを只初　ま
と分ゐいみゟもみずると仕ゟ一ゟ松ニ店き名の

うゟ〳〵てまの松山の陸記も強去ハ女姫の
路ニ松ゟ枝ゟそて神ゟ歌ゟ意法の子し起
ゟあき物の意意ニゟもかく作ゟ時いと云みて
原氏さ衣の伊を跡ゟうゟゟふゟ〳〵をゟ一

弥月の小松ゟもゟや陽子む　莞
一次ノ　ゟと云根の下女い言す　似去
存法ゐめ原をたてめゟ　莞
次句　井の戸を人ま下女ゟ森志て　オ凡
おそ保ゟ恨てゟく　莞
松白　陳ゟま一妹をあゟ人ゟ寿
原ゟくるゟを以て佐ゟ一　昌碧
ほ　ゟま一掬ゟる麦の形　莞
ゟま下をまゟ意つき井戸のむゟ　洒者
目枝一髪を洗ふゐみゟ一　許云
又ゟゟ節一陽ま一枝　失放
君ゐゐ我いほ一と冬の来て　去来
女陰梅のおろき乃意　支考

△蛇灵という哀

三匹　白々まいとそ逃灵のさま　及朱白なれいの猟男をみれば女の居する指と入立

打あけ時面目を失て　汀蔦

哀嘆と悔を重ねる白浪次ぎ次ぎ入立向て吐す指とうとうる事定法こされい化人の女をあふるさまあむこは立方いすれるお気の人と入て

糸ホ〻痛も及もれ存　乙由

シ、　逃灵い木りをもれて杖たれて　丈志

哀所の雪と成あ〻気の花もつきやく

コハ差き男の声号と成あ〻人の眺る指く

ぬれ毎〻の困所を哀と入立

山甲　新茶古柔より出ら一云　由

哀逃あと先お茶と指出すをみつもれあくを

糸ホ〻茶よりも思ら女恋と載る女情ら

大恋の指山と入て女あいなあ〻びは女

えよう一おあれいらさやつ〻的とる立信よう曇する指を作り

新茶ま給押ふる哀をて　添ト

おこ茶よりに後こ新ま信と知てしてお指の指

女左女人の仏根を明くさるを次ぎ明くさる

ある化哀のきぬ〻こ曇さあー指とそ生

お乃床　面目もあー　杜妖

とかくるい和き哀哀とを哀こ哀ふるこ哀法女のこ

おるく人の面あき姿とこ哀ふるこ哀法女のこ

明きの月の汚く化粧る法気の入明きの打

うお乃の化ら立困てあるさよう二性おり

来一契もお明為の声こ人目もて己ら欣

仏こちつる森き哀衣の白〻しき指を作て

逃灵ら階子ま指白小袖　里朗

山琴　新女人落て後おのち　呂仙

庵おりろる逃灵もあり　汉上

公居さおもて奥へ入るを見て戸口をも
るる戸口をも押ひて次の間へ入る
伏見高白く冷さま男のそばちかく居を呑
て夜城の指を伺ふに女同男の袂を取て
お治の旅さへ逃失あらばおもひ切れるかしみを男
か補あるへきやうあるへきやうと泣声の外に枝声
おまするにあら人の刃交を見
ちむとするを見て徒ある後合する
一字の意語を用ゐ体文のおもむき法令の寓居と自ら
姿をも一変おりふし出仕体をスセニ刀の刀ニ云
字の衣を合すり仮令みりの時も一字の姿を
ちて作り叶ふ事を陪とも叶ふ事あり

△お後日教高の意
姫姫又今ら意のいちまき　嵐雪
小糸更木そ男を守くる　キ角
味噌さまを等のさ意男　雪

今でむと云ふ
火焼ふる出すなおすり　角
姫姫又今ら意へよりうスふ
あむるり小枝白梅ノて髪もそしき
小糸更木を男を守くる用をみそ焚
見ふくおふ次の更木をふふ
とスち白と枠との中よき
の意友ふふれて
床い全枯恋ふを次ふ枯作の恨とスち
ふ逃ふ来て次き与も帰すあふ友を号へセ
るや何ふくと載ふ笑やきいふふ
次て女恨い見ふとお宮る船を分ふ

拾
戸　悪いる声を明ふて投ふ全れ　聖衆
　戸まあ声さんて　逃てふ了ぬ　箱
伏又の意を入おふきく　曲翠
伏ふりの刃をりスえふ比のふ　価重

宿名

死うとい契あるもあ大ゐ　涼ト
今又版　男ちく生　卍臼
小町あれ山路をあり井あり　乙由
赤ん小袖ー巴山の井　臼
月あり秋よ亦よ　由

旧

雅为のよも亦い　公東
業平も振をおさう　水壱
ほふの上も四十の　老乃波
ちつと悟れをさセて　ト
きるおの形ょつくそ　昨ナ少
てんぐ洛い忌の極とあり　失放
乃ままもてうのあれやもうき忌　枝東

ヤワ、

亦ゆて来ょ亦ょおれとも忌　麥お
さきて医ある　けんちんの文　号雲
うりつづく文をちうし　号翁
ゐ亦の衿より歌く忌ま　支考
頭悔の文すーろる秋　月　洁凡

夕テ文

奥、

カイ印三

亦
舟　つゐ山ゐ舟やりんき仕ゐく　英幸
　　保和

〈亦のき
猿吉　眉掃の春うつけーの旬多　巴凡
まん　岩清ょと帳の袖とく　仏化
小頭悔りてゐつなまの春　キ角
表　所巾すろ仮の姓お　渓石

コハ白掬のく亦くそみ為件之妻あり度の花
ょ旬あり主中　亦二三ホ出てるよー

白　我や来ぬ一秋吉承天の河　嵐雪
栗　名とりの夜表又よ旬　角
力仙　花の宴に密文の少ありく
挙　義入室の白をちのろく
白　初亦のもものいてておりり　菜太
　もぬれの松乃君ょそよ悟　独
鳥タキ　西東おろるる花の年
白匂　掬をちうよ夢ぬう眸
挙

以二仮い意のこと分続さう

白 友持て行たさう一意の先 秋之
表 里恵芳さう一ものの袖笠 キ角
裏 号さう一ムの約う 新き き
挙 上下の表はおおろ〳〵と 雪ぬ
コお一打意読後一打 旅続く

△非意白

白 赤さま烟を打ろう扇在里 禾ラン
松めつさよねるひくも 胡布
頭博の果ゃ髪よ会入て 艾凡
限 仮うるんやう猫のセもき 知ら
月む音か油の袖セもく
読者 なの住を 出代よあく
あるを意あるまと又て常の居と改う
松 表ん母中の供よ墨紙 りお
矢おの八卦よ意をこれちく 七百
表き女の奴妾連来うる矢おの占あむを文号

表のよ合点よ行人と号打一をうこハ
はおるを人く意と点人一をは作者意あるまと又
ヤ分て一在を新ち一由百白き点意之

棒
・ちくく矢会よ白き村かち 伯楓
・め入きひてまこの口 ね
・八卦よ手をお向るく砌さ 苔二
・ものくまいまい二性うまぶ 百
・主をこ文をい風の次ちし 仲去
・おそやくそ母のうお 有琴
・上さそうまう許状さ使 梅光
・意をま教てる 雨
・まさ泊ろ 雪

梅十注十九仏よ意あきいかる百之はう点今一百
意をあらく時おもをそ意よあるをロさと
常のまこ文彼一かよ反よ意を会うる点
ユ引きて意をめうう

□旅仲越不通三句続

旅人伝ふ雁ノ玉章おノ〻文認家を主と手乃の隔りも旅ふあれ矣海乃一面も狭き心人の風雅ふ元来おき叶ふおもむと雨空乃う掛幕ふ仕め匂ひ中の活水汲て飲ノ〻他人の旅情ふ詠きふ色ふ母の意ほ水辺矣物ふの俗ふ宝ノ〻

ひさ　ヲヨシ
ヲヤくう方やふ白子　若松　翁
ヲアよむむの國乃一刃田　孫於
吹れ死る　乃の師考　曲水
ひさ
芸社宝ノ刃をうれる口画
義務
又出てれむ俟乃うみ熟　翁
印
なひノ〻旅くふふ。　白之
乃乃地義ふ　桜ふ桜うもや　歌生
入おノ彩の声も　鴨　文
考を追る宝華の舟　ソラ
何ひ用やらふよなるら也く　小枝
有琴

桜中

分の世ふ西云そくの月とも　梅史
旅りの内いちめ去ふ　七弓
旅人。
俳もおるそ　水
ひさ　三体
月まて夜の内裡の司石　翁
元拾
あノ引の試方をもひふうみ　孫於
故の門ふ二枝春うノう　円入
ヲ
元拾
ふ宝ふ愛い世中の地義そ　呂九
連ふノふ小刃武士の仮桜　木導
ふの中ふそのそく旧迫　許云
遊
世系そ宝宅名系の灰弓　千那
うき旅の出ふ時弓て去ア者　、
、
ふのをいおうまノする　千梅
指迫ノ指を分る琴の去　那
ク馬家のちそ　キ角
琴つのふを有ふ旅力　誠人
穴一ふちノおちひま桜　、

△旅字面去　杖の下接の下　カ三云　京三去

冬

去

ミ

雑

コ八

そ九ハ衣留ミ名所もみれ　お笠

ま七旅そろふ　笠

旅九あさまそろふ　笠

旅ま店ノ下て茶も　屋呑　茶荘

ち十山地も　ろへい　ろへい　山りン

旅をそろふそろて　仕る寺ニ　キ角

山八井のんをまれや　旅の汁　、

国ま也ろ　旅　別　去寺

五月ろ　納も　をき　路の　旅　行荘

ろき　旅ミかき　候の　魅　魅　西去

□名所　二去

れカ仏ま名所国名地名ま　京三去　多所者　ハ

吉の月日ろ月ろの名二去ま出てもは　旅名ふを

亲おとする　旅泊の　哀和懐古の　趣情

雪月花の哀を　記せむ　くさるを　御艾

名所ニ出て名所分ろうと思ふ人のあめる

咲母の枝茶もおかふむ　作者乾坤を掌

まて木林荘万像の深　等を尺よ

ある志ろく住吉須广なきれ　キ角

旅名　おれ元田の　孤あてろう　杖名

負　答人のろ名ま　荘已

吉地も　枯てみ　来ま　名所

すまの宮七条世九六一　毛孔

返らさゞまと　田入

秋杖ま名和田の　り角

尺をあまさ分今の　十丈

就　れもあつろ　為町

頭つる松にの　跡笑

あろの月ま　東七

用て不二を　千那

文科く通れ　千栃

南北を生て　千個

ま　名所

笠　名所

梅　名所

戸大和 木枝はもさむかく山の竿 風雪
あゝ出て勾玉と呼ぶ苦を告ぐ、
又後い麓も走さ寺 徒山 舎仏
七さと 乳のすゝく呂もをれす 之仲
松風の雪井志枝実うま 一イ
△名伝地名伝名伊と独て二去
十軽う住くさき呂倚の月 仙呂
十メ受うの夜よりの〜 約親郷
十有うある寺ュ抽 生閑
赤堀 ク穴村い東をロと少及 右衛
哭 又教してうの夜きく ヤハ
十メ弟連ま本務務の竜田川 、
辰 雪住の名乃社ま川旁 西村
十 竹月や老舟手 おれ
午 寺馬形 次い 何やう 風雪
馬あの翁老ュ月をお眺 右琴
△国名二去 大玉名同

豚 ま行の田住うの〜 加〜む 朱弦
つ〜と人の娘を石連てり下
奥 ゝや糸枝及一ま人ュ 支考
ゝうゝうゝぬ依の之九 杉ル
戸 れおり乃枝房宝う为投公 席月
因情老ゝて ゝて老て連 、
いまの夜乃ひ〜と彩き 白巻
吉 支ュ向をゝうュいセの神 オ木
馬城い夷の玉乃占うゝ 老五
冬大空 日年の孝白う坊ュ月を又て 、
△名伝ぬ糸おま名おお戎遍
旧新 花の雪い古き彩 さあの町 造 ソラ
ソノ まを残る玄仍の名 箱
も京さや志う浪花の景を 小枝
雑 京悔の海志ゝ年ま女 キ角
けあお月ゝろ白華のたび 泊老
喀〜糸いねおりをち云て 、

月冬を乳の宮うつこまう　支考
仙　あくちうと申猫さうり　卅里
・横埜をそそて冬と夜出る　空芽
綾雀清水死の行もあれと
有名・夕月の淋しき雨の
かも　打籠の庭のすゝきの
三度もあらの久しき　意仲
、　・杉苔を西へ流れん庚洋　柳士
野　怙佛のきりゝ雪頃　昇角
おそそもあんこ雨の
、　・花も落下ちり町いちり仕已　左把
夜大根の　の　逐籟　流幸
ゝ蛍ゝ木もゝの蟹も当る　比谷
ゝんのけの今ゝ青葉　杉丈
仏　・七海の裏を中ゝ笑れて　百朱
有　・ち町のそこゝ殊救を誂ゝ　李門
百仙　降てたゝふゝく　万州

雪
唱　・初のその叶くの
おりゝけもゝ
おそそゝ木ゝの幸も
・降てくの名紙ゝ小会
妹の意を　
艾行　占をきくゝる
、　・江戸住ゝ
奥　さく花ゝ野ゝ
小会の琴くゝ
、　・ゝよゝ兄ゝ
異　入院のゝ
ゝるの画図
ゝ
ゝ

一格　一
ろ九　白
有吉　一
一庵　麦
舎朱　茂
唐風　考
風　松
可昌　琴
冬松　
佃房　

●系ム

号　伊丹俗ニ李白つまり一房の月　寸松
、　・李木俗ニ李にて又れい生いり　葉凡
十三　りともちろんを接て生る実　莖之
　　為ゑく俗ニくゞ抱一つ付　云水
　　世をつる人乃山降の系　り下枝色
　　おちが祖行孔扱ニ云ゐりきて
私ム　おゐ・君伊和り会稽方の聲　キ角
　　・耶郷の牛乃ま猫の銀　表系
十七　セそき亭ちやう候ニ五云行　コ杜
　　乃姓の御ニむの系ーの山　有風
雪白　菱らつ雪ニ試砂のおゐ　風州
、　・唐去の花のまものとあゐ　李夕
　　系業杉系小会帯ホの名おも試若うま
莖　△系と訪　面去　一在ニ
　　まゐ紙ニ訪の君ニ事ホ分て　箭
　　おゐん俗系の時を占ゝ　立山

莖　　殊系　　雪　　莖　　指　　一指の風㊀　　莖　　指　　一指の風㊁　　莖　　指　　一指の風㊂　　莖　　指　　一指の風㊃　　莖　　指　　一指の風㊄　　莖　　指　　一指の風㊅　　莖　　指　　一指の風㊆　　莖　　指　　一指の風㊇　　莖　　指　　一指の風㊈　　莖　　指　　一指の風㊉　　莖　　指　　一指の風㊊　　莖　　指　　一指の風㊋　　莖　　指　　一指の風㊌　　莖　　指　　一指の風㊍　　莖　　指　　一指の風㊎　　莖　　指　　一指の風㊏　　莖　　指　　一指の風㊐　　莖　　指　　一指の風㊑　　莖　　指　　一指の風㊒　　莖　　指　　一指の風㊓　　莖　　指　　一指の風㊔　　莖　　指　　一指の風㊕　　莖　　指　　一指の風㊖　　莖　　指　　一指の風㊗　　莖　　指　　一指の風㊘　　莖　　指　　一指の風㊙　　莖　　指　　一指の風㊚　　莖　　指　　一指の風㊛　　莖　　指　　一指の風㊜　　莖　　指　　一指の風㊝　　莖　　指　　一指の風㊞　　莖　　指　　一指の風㊟　　莖　　指　　一指の風㊠　　莖　　指　　一指の風㊡　　莖　　指　　一指の風㊢　　莖　　指　　一指の風㊣　　莖　　指　　一指の風㊤　　莖　　指　　一指の風㊥　　莖　　指　　一指の風㊦　　莖　　指　　一指の風㊧　　莖　　指　　一指の風㊨　　莖　　指　　一指の風㊩　　莖　　指　　一指の風㊪　　莖　　指　　一指の風㊫　　莖　　指　　一指の風㊬　　莖　　指　　一指の風㊭　　莖　　指　　一指の風㊮　　莖　　指　　一指の風㊯　　莖　　指　　一指の風㊰　　莖　　指　　一指の風㊱　　莖　　指　　一指の風㊲　　莖　　指　　一指の風㊳　　莖　　指　　一指の風㊴　　莖　　指　　一指の風㊵　　莖　　指　　一指の風㊶　　莖　　指　　一指の風㊷　　莖　　指　　一指の風㊸　　莖　　指　　一指の風㊹　　莖　　指　　一指の風㊺　　莖　　指　　一指の風㊻　　莖　　指　　一指の風㊼　　莖　　指　　一指の風㊽　　莖　　指　　一指の風㊾　　莖　　指　　一指の風㊿　　莖　　指　　一指の風(1)　　莖　　指　　一指の風(2)　　莖　　指　　一指の風(3)　　莖　　指　　一指の風(4)　　莖　　指　　一指の風(5)　　莖　　指　　一指の風(6)　　莖　　指　　一指の風(7)　　莖　　指　　一指の風(8)　　莖　　指　　一指の風(9)　　莖　　指　　一指の風(10)　　莖　　指　　一指の風(11)　　莖　　指　　一指の風(12)　　莖　　指　　一指の風(13)　　莖　　指

茎 ㊀枯くる実をとりうちまくきの
一次ノ高サ三尺 ㊁赤き玉の時もいでやはせ
△玉と云分
白竹 ㊀の団のごとくおうて 葉
二枝泊の つくし 竹 嵩
拾 いせそろし ㊁菱 ㊂詠
うのみや 捨毋の名よひ 俗化
うのくやく人とおもうの上 去来
枝めとやくおもう ㊀玉俗の記あり 俗化
白扇 其ほかの ㊀の葉中 是むし
市九 ㊀ 献立 ㊁おうてあめをは 歴史
琴 ㊀玉用捨の 俗おうく 俗吾
△玉名と同玉名不分
或書に玉を生ずと分て地名を挙る玉と名ふ分てる俗

先そろもく又実みるを
多くれども挙ず

冬 三法うもむ 不彼の実人 重五
乃終このてお冬を姿をこる 葉
白紙るはまの田ノ一枝植て トヨ
実の如月を以生ずるく 中水
ツノ 小畑もをくいもの神用 葉
疱瘡の葉名日永も成りを 小枝
初ひといもの施のとれ初て 葉
狗棒 ㊀やく宮川乃上 嵐之
△同玉名以分
浴人の記念の枝吹をくれ 葉
冬 去をく実祇の名を分くれ 玉
実 ㊀ 不仮やう 俗
ちるむ 俗をうろ用 嵩雪
ころの一七ノ月の泡ろう キ芝
ささ 蒸ろろてる実の吸くを 花ワ

[illegible]
伏えの舟を入おさきく曲水
矢そりの舟いとゝね附 素拵
木芍藥あれとやもの拵も 鞦吹
萩紅葉毛朋の 改る 葵葛
杉て末令寺 かしさきの素屋 小枝
ちくしのつくま高坊塀井 呼継
手洗の柏朱とやうを脇 白み
庭金の図をトえ入り由
武夜叉毋の教乃勇亟 山 許六
啓会とえあくるき用えて武夜
えと分ろ分るおるまて万化あれとも
時ありさるみて只並むい拙き限あむ

古八三玄 ㊀

〔神祇二玄〕 京
神祇を系おとする序因のよろ代を兼めて
陳の乃え誘ふ設るを今の人のさうらよ
神宮の次い神勅化と待り名居の屋ま

ほりてそを開松ちと人仍ろ
みひそる仏神て天地を指拳て徳の情を催
さむるおのれ歯て知きい方 京
那智の山もまた
町中の名所あり
月時くの いもひする み 方九
行する事の中を押き出、
さあ呂今てみる 宇ちり 七百
大木のええても宮の小さよ 仲志
毎年の社の祝る 山 被 杉風
まんもりを毎拵ろむの中 子サン
梅て吟ろの象をわつてる 風
庁芍木の来社い挟と称もよ、
力仏神ちう出て尺生ある尺ちる宝て神前
もあり神祇い振向ひきあ多出るいの
百明 氏神のもも盛ろ暁 拵 支考
多句 多弁を残て返る書 柿、

カイ印三

神祇部の例い多クハ二字

〈神宇〉 西去 古八ウ五

表の表も神くらゐ許り 湯帷
庭 踊上戸のくるくるまわる 神 雪里
十 次巾きてそれも喉乾の神ん 汝東
一 未明いところ〳〵ふの神 遠里風
雑 俗名をあもう神も不 柄 扨水
乃祖の神のくるまを頂きて 船
塵 まを連て四れ条ま勢の神 芝山
楼台ある神の苗字 門
ほ名をい彩の神もとらへやう 小枝
夕 おもとめてこ疱瘡の神 八宗
〈宮 西去
宮門にする拾ふ月の丹 キ角
神 十二 さひ子む 伝一乃宮 宗幸
我こまあれ弁天の宮 只九
むすびの古 宮 伊良

〈表お去 古八ウ六
末の生れおそれのさくら 和秘
門松のうちも中伸る初ま 芝二
松の内のうち数のまくら
角もの望ま発ま手次ま 宇中
載も磨仏字の 生ま 高像
ま乃大名 東羽
士官 白杜
おもてや業硯
出て社 宮 物コ
おくもち 建般
〈神こ尺寸台句 多行有
出ておる字の材 木 箱
世ま国こ乃あるちのセ キ角
ま力雄大阪ひをちるふ 佑砂
山の生れ まま設ま 文章
死すて人のねこまるつき 土芳
神風や伊勢ておん宮え 箱

五代帝　男の儀にてはなくて名にあるべきもの　嵐雪
　迂て名にあるべきもの
　△非・神お神祇就不始
　名にあり　表来宮氣玲　雑七多事長暦天文
　占初午　去秋附名に作
　・名にも称す除夕の称　凍ト
　嵐雪　あらそふ雪つく附くらん　巴兮
　引くらさ一ら矢八まん　雪ホ
　・年の末なる名にや雪の月　秋東
　秋　雪把こん降ぬ千丈の竿　矢作
　ふる　ふるさと梅のふるき神の杜　亞之
　△神尺就不始　七乃多仍有
　神釈お就を始ての吉凡の皇恵之蒸門まで
　有ありきるまに吉始をちすお除夕の中空を
　ふて今も降るまふ名にの雪ともふまで侍の人
　新吉拾すお称乃仍ともまにたもあよ
　始まるまでや吉日乃をさくまふをまて始とやく

因に重ねの乃ち再に三文乃も有多故と
宮代ら白神仏え一件あすや吉日芳祖翁
ハ今の弐を改ふお限あ乃ふ乃を法一出みくとも
一程ふ通まに去お就に来あひて解こそ
仍ち改も法も之一件ふ
うりをふまあるふる再おあく思うまく
とふ件の人ふをふあつせりる

一反　正就結しお乃ちかん　似去
名　ふつく新お称世の乃ふと　翁
　海ふ仮ち並ふまのれ　嗒山
　傷ふちる西ふあのれ　ソラ
　形代ままお名あ手毒の内　翁
　ふるひるお　おまおへ味ひのとく　演
　山ち乃てる神の　ち手　支氷
　称ふの称ふ風ふあく為　仙翁

天河

士

ムツ

拾

葦

拾

みる　田舎よりあれて月のおさひ一　雲之
　　支度の風ニ　人死のある　支考
あ〳〵悔る幽霊のきぬ　信風
一格（九仏）　まさ赤き　梵
（二）
（三）田の平ニ煙狩る　石の塚　風
（四）住ム人祝の　（八）　（六）
（五）ナシ　懐の書そうろふ　丸
　　△同伴雲第　夏
茎　死人　秋の為乃　人ひとゝもく　芥
　　ま捕ニ　〳〵きえうせの　考
印　　何ゐむえや　（七）甲の下乃　基
　　幾　きぬの写乃　骨い白さき　コセム
拾　（死仏）　去ぬる　ぬ大空の白　希
　　秋風　（九）ぎ〳〵義弟の　秦
芥川　（老死）　ま寿の　乃あすいま　牧童
喜名　何の　ふ人てあ　為水
　　幽霊い来る　嵐七

あ〵南浮　ふ〵ひて　弁の杖　志丘
　　△云常二句統　（多仏有）
世ニ云乃二句　挨ゐ　挨あるゐ非く悼のある　猫を
大方　雲乃ニて住ふる　おみれいさる　情あき　定
汐　灯をそく　幽霊を世ニ　キ角
　　古きうゐ　ぐ〵　髪引　弁
汐　浮世の　ま　を　ゐの尺　納　手
郭　悔ま〵　布の　木槿のち　夜ニ　文り
　　何をつゐ　ゐとち　ゐ　ゐ　ヤ水
艾　　△死　お去
　　秋ニ川　挨乃　吃死ニ　ク〵　弁
　　已　死すい　人の　何ニ　ゐる　へき　去方
　　死ま〵　人の　状の　ゐ　よむ　乙由
　　（三）死ゐ多　（十）おの　うちの　果　ゐく　唐　左
　　□釈教二去　（六）去
経　ゐ　ニ世因果を　汲て　六乃　道　を　ゐ〵　もゐ

拾

鬼地狄 古名の村名 俗云谷古町 殊殺屠里十
殊殺を略 盆祝多寸狄 問答之俗 井樹けんの類
(七字浪) 年武の名多を表とす 寺家多を類す 箱
日多を尺とらく 正月神祇おむとく

彼岸ちく 天王ち山 松里
台 ちるむ風 吹てむ 竹 枝葉 及 多 ソラ 外我
イン 旅葉 及 多 箱 つし き角
ちと俗越て 美店広 れいよ
ア いまり来 梅 尾 ソラ
新月の 存 る 作乃面 岱水
る や 俗の七 さよむ声 家 彼
元 仏 分 カ く や 秋の 俗 箱
笈 笈の門 る 美 ス ス 巳 通
着 狄の 吉 中 名 て 利 左
負 頁 十のせき 成 松九 夢 字 庇
カ 風 る 一 折 く 主 白 風
病中を新母の尺 多 く
角 狄

白兄 笨の下 植 何 を 入 り む
分 左広 て 余 仏 皮 み も 陸
十 俗 十 俗 て 杖の 俵 を 多 く り 茎 二
梅 梅 て 笨 瓢 の 李 を 赤 き 左 松川
内 陸 云 て や 多 と 新 の 多 仲志
衣 衣 さ 多 い 牛 と ス ス ぬ し 柳 コ
脊 衣 梅 包 め 已 て 多 の 狄 り 人 嵐 枝
着 狂 て 赤 み ス 敷 い 汗 公 布 和
古根の 金 仏 う や す る 店 士 衣 嵐 多
小 博 い 根 の 中 主 俗 つ 主 箱
麦 杖 て ろ 左 及 ろ 砧 上 ま し 香
久 久 一 さ 西 行 の 辺 林 和
浪 釜 おの 笨 毎 主 ぬ 行 の 辺 林 和
風 き ろ く ち の 月 の 杖 胡 中
長 ぬ と 俗 世 幽 さ む 山 の 奥 多 更 今
松 凡 の 多 地 表 又 也 る 柳 主
園 き ろ う ん の そ る 定 の 月 主 志

壬
布袋

山伏よりひ成て来れる　苔ソ
一りうもあをる　掾　玄庫
をおの布袋の形　雪芝
先祖のたびく　阿を入てる
夕色　ちくとも　りフ
又名の平い古仏　大圭
籾のろちやう　白風
狢や毛の衣よ　仙去
尸孝く　翁
地秋彼やせ　翁
小栖ぬき汐の　伝兼
滅令の光　伝徳
一名の天目　孫子陶彩
和畑う　孫舎
イセ　桑二
一通ひんのむ　東里
日影ろさがやを　嵐雪
未来　キ角

△ち青訓そうねこ云
石甲あれい亡孫ちあうま 箱
亡夜ょあう〜ーちのいさうひ、
一枝うる宿いうるふちあれやヤれ
屋や三井の末ちの祝あう。且菜
山をそ五ろくふちめ今 甚二
ねえんの秋う〜ーちの返侯 七百
△仏井おそそ云
花の体生の ちその歌き キ角
角力仲うう〜ーわる自己仏 才先
次やうる現まるうも我力 円入
何井む白きを侯ようする 我笑
宏根ふこそき地義を荷持 角
子声 罗ふる歌寺の口名、
△仏字面去 古八方仰打去
毎日の滝もけえて仏生世 号ふ
先大仏よ 打ってふる 涼ト

方 叩く宏存を仏石も尼そま 和菜
仏刑 金仏の根へ片も命〜涛 東君
石仏ろまを欠めふうり 口通
仏よ崖の花を奉る イ拡
△侯尼。溝面去
答 乃へりあて侯生の月 正秀
号村ま森広形る切拵侯 文卅
ふの山仏侯侯のよ〜吟 扇冰
批 要ト 栞乃侯止ゥ谷 フ舩
云 そるや 侯のセ云きよ声 宗波
まふ〜侯のもろ〜きそや 盛水
天 尼ちのむさ存ちそちもれ 艾芳
祢生ま尼今乃田州財 楚由
涌海も〜涌る空侯の秋 木等
号め内ふれ家海押ふ 千那
△釈迦常浅不廻
古今の変化振功の清景人界の臣ある生仏乃

□乾坤の注

蒼天の去住と天象と日月星辰と係り係あ共
函蓋高卑と地勢と郡邑城郭と人民と風
俗美悪と経緯わ山河と谷岸の山水と属する
いよ森羅の西郊と没くる稲妻電光い之れ出天宮和漢陰陽天象照晴
閻魔おい乾坤の雅部ま入るかく云ま分て各
説を存ずい付句の旨あ云めむれ之れ前の客
観と日月日星と陰後風雨未を捲まめ早宵の
おのれいさもあめと天空を蹴あい文程呼ずす
倚て日文天宮と更く三光文中を巡る文云ふい
て思く人おま上ま生すれとも芝を富守天何そ
日月を仿らむや又向照時閻魔の数い三光とい
体用ありや拾り人位の残ま悟支体悟無差
ま忘さるよ宝一般向雲い風と乾く風ま
詰る何そ就を厭すやあむ除て日雲雪烟雨の

於風と空よ時の必動くおまのこおすおよ
木おひきる沖り限逆ふるこ万像風気を変
さるおか客旨注末の注明うよ初め今そさ
詰各せよ乾坤のおの句去を定れるを微笑
して曰三光い人位二去ま代降往年の生徒友食
あの二去ま表す稲妻閃光おとおすめと三光な
説を痛そぬい鬼仏の人位ま変あるちく降往年
風雲天時まの各おりて説を降めも山水物
居位の立てて注あきかー夫のを夜よ乾地乃
載る不何そ二ツの理あむむそー天地の制度よ
おみといそくそい人理の遂雪そそ年う的完
の陰よおうむとうまれ文人大悟の横をさおめ

△画云く 三去 カユニル

東篁 あさあまそうそい句ま云ちも七もあくきく

禅とう日す 夕ベの新 格脇
発句 今夜作ー日も 叶ありり 革香

コセム（ツユ ちる）　白ちや　立秋の日より　ヤウ（ろキリ）　立九（クモ）　小又（ネイ）　神代のひろう　発気（ソラ）　冬

コセム　蒼生　改至
白ちや　立秋の日より　ヤウ　立九　小又　神代のひろう　発気　冬

△降おち　降おち　降おち　

△露　面去　カ仙ニ百ニ六ノ七

柿ヨ芸のとまる露哉　栗枌
樽弓矢の相乃露をはらひけり　ソラム
仁といそれて露ぬ白露哉　翁
ちらくと笠伝柏の露の音　千川
壱の〳〵雫裡ヨ露ノ音ヲ一我ヲ哉　翁
雫哉曹同案の夕哉　川
畑ヲ一露の　浩然の雫　移花
然ほい雫もうや〳〵冠木門　宝雨
雫の方ヲ富沢丁の社ノ松哉　長水
いと〳〵糸ホヲ雫の昊机　基之
壱　穂乃下雫　杉風
山を役一　灰吹捨るあとの夕雫　翁
一ヲつく　雫ノ雫さひ一社の下雫　風
匂　木戚ヨりうる吉行地の雫　翁
小徒一の雫もあしと宗ヲ
雫まおやお穂の雫、

△雪　面去　本ヲカリテモ

雪ニ古式ヨ雪乃匂ヒヲ又ノ今式も印一
▲支那の士俳仙雪ヨ五あり又白雲共伴雨記
号の力仙ヨ三出る仮もあり印面雪ヨ之ヲ
ヌる五雲位のおいれカ仙ヨ三い許ヒり

物　牡　月雪の作やそ花一叶ヒる　支考
雪の来る板の雪ヨ日のそ一て　子重
拾　ハ和の乃芸狭坂ヨ残る雪　走
炬おこきて雪ます去、
三　雪ヲ升よちろつと降　蓼太
雲のヌる雪ヨ義の屋根ヨ雪の山　雷笠
ゐ　日キ一俤画の具ヲときて雪の山　百り
雪降て底元ほヒおやす
又俤　又乙雪ヨちきの柏木哉の森　嵐雪
雨雪の名一手の板戚　空之
雪ヨ板の雪も降一　白ヲ

去

去

去

朱云　舟を出て西くる方の風　秋隆
月と風との外こゝろ人　幸孝
秋宝　秋ふかんとする風の姿　伯楓
七良　風の拍子よき落も一さし　仲志
水仙　あら荒のかくをうつ秋風　杏雨
○川風のきそくしき音、
棒　さくひを惜さめ風の吹てわり雪　玄
笠　花おの雪の風うみを　幸平
わくるおきなれ風ひく　幸保
雲行をはれと風や少遠　幸保
さてもさまけの風そうく　まち
枯風と枯のかたまる落葉入て　京玉
月うれてこゝを根まる風うた、
風次第の年のくれ乃掃　翁
神風や吹記されて松見ぬ、
△嵐風おを降て降くく

已元
名五

寺二　嵐　おく　初風初やの　秋の嵐う
萩松　嵐うたゝむ　昔浮うり　雨雪
嵐を考る　嵐の口をさきのうすく　朴人
去　嵐の一ふん山の　行ひく　お宇
帛　狗秋風の　板史ゆく　菜少
角ちそうる　以中山乃風、
△去風・秋風　お去

六泊　新弐今集ニ去風一首ニ二百脉修ニ春の風ト
今一ツあるく　秋風お降うる秋の風　翁
一ツ嵐　いそ浜翁ふ　めるふ翁ふも　春の秋風　仁幸
去風の　地ニ落を掃玉す　摩附
みの　去風ニ教ふる　春風　翁
只西去そ門　去風よあら春の風とそく
西去そ可るむう

△風ヲ吹ヲ越不煙

キソ　雪関の扉下て弥灯吹消て　ヤハ
　山のあちこちの初き雫の冬　岱水
　おく行の小神を名残る秋の風　ハ
　ここそこそ尾ハタ体吹入て　竹於
土　風ふるひ〳〵経巻を　舟竹
　○
みの　字を持る風の一吹　一機
　吹落も吹日　刷乃巴やき　以水
　作ふ〳〵ふ〳〵ふる月のやを　志水
扇　ふ仮ふ生てこそきくさめ　永麦
　もゝき十日ろくろい木この色　朱室
　雲をさそふと吹落る風　祠碧
矣　△風ヲ降葉越不煙
キリ　風の声も南よりも土川　翁
　小舟の形を浮ふタを　柳風
　おもふ〳〵棹い声ふ捉れて　木端

漆　庵水のふ〳〵落る雪の風　翁　伯木
アメ　門のたいろぎ一村ある雪の子通　ふ芝
　ちろりやの並ふ落る　白雪
ユキ　茶　おろ〳〵噂みふたるの味て　机リン
　ふ〳〵ふろの吹てるく　蓼丁
　入透〳〵る　丑　おれ　京徒
低　みろむのろぎのそんまうする　信化
　金扉をそよもる秋の風　呂風
　樋をひる嵐の岩乃月定て　き角
陵　平さ〳〵ふ〳〵脇る筏士　春秀
　ちろ〳〵と更ふ杉をう〳〵
板木紙の陽そろそ此筏士の白を投一次の子と
書白を並出さるを古写ふ　ようにて実ふ補ふ
　忍陵の雫を見る秋痛お　林張
低クモ　今ふ〳〵人も田在一枝　支秀
　面白ふ方ふ風のそめきて　相之

春風のおさ閑十き住手吋 秋故
ひろんのもの秋るときくき 秋函
吟雪と霞くら雪徑亜山 松宇
△徑年お 二去 東今日 (ハ)
白子のた支我きりの油工山
笠抓て霞うたやセ男 翁
去 山子む月一吋千赤立て 西相
芥様や水田の上乃林のき 俤里
保 き之卅 棚る乃のきり西 小ヨシ
支湾 雪のまれてくくてみり 陸陳
綉 名雪井ま吉の西く 吋 招旅
お 奥山の五宮ま朱をむむり 杉風
岬 落きり汚る山のくきとり 涂陀
ひんようとねをいまきの声 桃妖
△雲 三去 東今日

古裕 降雪の消てあるうきき 招帆 風
探函う筐の雪きま 秋る月 翁
雪きれの山のそ落くまし 書偕
文 くくと宮の芹つく横きま 嵐竹
棲の花ま雪むきれく 周以
附 ろろくと西のてれて田のて 宴昇
先月ううい木のて 許六 松
ヨ八 木やする采う挑る花のき
きろろとや
百躬 りのくくと宮 夕市
月ま又あそ 茶生
雲くうの雪井るそ一仏在 市
△霞・霧 お去
俤の吸く工徒手む去 秀招
(十) 名を多生掃きてる お公 イ松
桃の日れそ山や霞むむ 口松
木砂ま俤の子む 山中 凍ト

ヤ
門毒の抹香うり
ふるもむる店のうち
御 ユウエ 山も雪降もとをつてく
挙 雪のみ
さや行る雪のうへ
一枝の風 古代う模点をしく
一枝の風 多雪降徐福う
出そーやりんと
きりゝ妹の声を降
きりそひやる
ヤヘ
△烟降そこ降積哉不堪
烟の火作降そ水乱れ降積哉妹
作つも栗の秘さく神楼桐茶
独うけるみ降の松立山
為雪ん定の天を降みて東屋
雪坊の烟楼川立そみれ格枝
つき走そこうる格の雌羽貝寿
寿実

一枝
学をする文のうち私出て一昌
二枝三枝面をそろ
林下の雪そーう山のそり袖る
門去のひと降世う惜れて
人も降そ系も降ちし 学
限
△往年お分句そ雪のあそう 巴蕉
雪の用意 雪のあそう 十丈
林下う降て学る雪 此柱
そうそう降うそのむくを裏 巴秋
わそんのそ乃雪も彩を
又とろ〳〵と神代うまる 嵐竹
風雪のそる乃雪の月 青陰
古式の同体おの分句二枝そ
かて分るかそうを降心若つ仮令白雪
来そこを並ても云の変化を栄をする
小風そうまさ出る雪の声 巴蕉
只降そる文のうち 清風
学をする文のうち私出て一昌
二枝三枝面をそろ
林下の雪そーう山のそり袖る
門去のひと降世う惜れて
人も降そ系も降ちし 学
限
△往年お分句そ雪のあそう 巴蕉
雪の用意 雪のあそう 十丈
林下う降て学る雪 此柱
そうそう降うそのむくを裏 巴秋
わそんのそ乃雪も彩を
又とろ〳〵と神代うまる 嵐竹
風雪のそる乃雪の月 青陰
古式の同体おの分句二枝そ
かて分るかそうを降心若つ仮令白雪
来そこを並ても云の変化を栄をする

△宴ニ天人ノ時ニ照我不睡

ソラ
茅ヲ以テ屋ヤムヲ
ヲ葺
ハレ
ヲ
ヲ
ヲ

△園、景、史、天、雲

園こゝろざし月まえ人よや梅花 里八
門前の園と小僧の問ねり和
あれ月よのくもる 今 文リン
雨さくそ竹うるひまうるひまうコ秋
宮つめ王西の風乃昭帝 伯急
寿よまも月まも雨まも花帝
秋の光そうさまうさま又 宇中
ばその光をもとひちし
院上てるやうみ 時 天 伯風
ちくりあそれ天気を史令
詩や我おそして 秋の天 角上
三河のまりい天下一まん 去来
まも天ちり四もの著く
△天気 お去
行をえ送てあまよん天気 朴人
祝まの著も及ぬ天気令 祖巳

□時分日字 三云 多佐者
郭夕著秋立明おの日字各力花ニ尾つく
何あり六合て十余も生て
南 静ある家い郭
陸つをニ行ニ陸
ニ花ニそ月
郭もん人の大をそ
三日 郭夕
郭夕の著をな
著蕉 郭夕
みの
方 七九
著陸物をく
ま士の立ねニま
夕日ニ称す木像の 松 里拾
限 夕 けしいなち夕立のあれ

萩ノ　紙衣もむ夕あめふる月夜哉　白之
　　孔雀て人をよぶ夕まぐれ　葉石
三冒　夕やの仕　今ふるあめ　きくの名出す　芝船
　　名月や梯下の掃の音　梅口
葉川クレ　雲をつく〳〵と毋井の門さして　其流
　　雑入いとまありでたく〳〵月の雪　枝重
白角　屋の村〳〵秀佳の俗の雪うり　十枝
梅ヲ　みふねの雪も消えて　孝
　　夕雪を冊子にし窓の月　子詰
野百ヨ　月おぼろ園も郭こゑく　考
　　折ふしとゞく雪の降　及朱
きゝ　ありく月をうそ牛あふ　ウ中
　　こゝかわもわすれず小袖衣　涼卜
梅十　まのよの明れば雪の打出浜　梅史
　　月よりも園もきれぬ雪き　仲志
　　ゝてよろひるあるく春　呂林

七ノ卯　海の声岸八枚ふるさる　松川
焦ヨヒ　雪を山ぬの祝なす雪の里　扉答
　　雪の夏祓い雛のかぶりもの　豆泉
　　ぞろ出て今雪いかゞと雪の石　同芙
射　　今つの月松　雪〳〵ふえて　孤角
　　月ふる雪の夜初のそらみて　竹湾
　　雨あの松年の松すゝや　翁
　　三股の丹　庄川の　松
　　雪い松浪の　あとはしも　、
　　風ふく大まの松のセつきく　湾
　　△矣時分戌之廻

法事時分と松分二表ハ古式のさゝ次の例書ス

時　弐日の日もうこゝきてんやく　如風
彫　　時革末の　出る川口　冬夜
来　探すと聞ゑて　夕すゝみ　翁

此写ハ日時分あれとも時々よ革ハの例ハ
浮もり此表ハ革ハの例ハ弥ゑ

山もと霞て狐のさまろくて 作者
花とも未やとゐ遠るし 蕪
夕雲雨日ゝ雲あるうすの雪 青店
殘る桜も稀きてる 松宇
雪之
千 ヨタ
雁番ゐ〳〵ゝ又千る湯あ也 蕪
名月の老る樣に実に等て 士芳
ゝ川ゝ亟帋僧の鞠つけて り由
袋 尤吟
幸実の新を此出てる 汉村
まそよう秋の夏き山の月 木琴
天月も青の新も新てある 涼ト
七きゝ 青吟
よその花をこちで合する 矢吾
揺人をゝ送る月の吟汉 一夕
仏 青鈴
新〳〵日もゐきもの来て 机ゐ
ゐ〳〵ゐくの帋を此出てる 汉村
七ゝくの帋を芳ゝ青の月 支考
多の秋の霧い神本大里 西青
夜をきる矣をゐひても 汉由
夕〳〵

ヨ鈴 種会に活ゝ吟て新の月 山り之
種歌ゝる 八郭の新 陰汉
お 秋の水ざる輪を引て、
タ多 ゐ〳〵ゐ 新の神る夕月 杉風
湖ゝ庁汉 新る新の月 仲志
神 野吟 汉人の名きくある秋の雪 羽撃
基ゝんおれとうのお人色 伯祇
常新の旅ゝ立ゐ〳〵 芭二
△秋分 二去 古六三玄 ㊇
秋分ゝ著て雪文秋周秋 鳴き里吟ります
猿井 文徳の文結て続ゐ秋をさ、
修ゝかれもの遠ゝ新ゐ 可夕
月の秋ゝ修もお湯ゐ下 今汉の 意 芭汉
辰 今ゝゐきゝと今汉の 意 芭汉
雪の夏殺のおる 独 枝 永細
雪吟て打ゝゐ月秋、

△秋仲哉不堪

李 蟲酒の哀い秋のふかさそれも面白う寺される秋
分よ秋今ゝ丈ゝ丈ゝ丈

□時言

㊀今まで我こゝろの字を二句
續ひおのおの七十八十とゝきゝてまきもの
と細字の雜字を以て 本文ぢゝ八上下ヨ有
武陵の石あ我武の仮名を作ゝ多篇まで字うそ
千の仰ぎ一そ下ゝ下ゝ七十の字とゝんゝと四今
ゝうゝと支考雜て字と字傳の一そ下のゝ下ゝ
トシの畧のゞしとゝて堂矢旅支考時法うて
我武の半とある乃正一ニハトレの約を千。とゝゝ
そゞとまゝ二句さゝきゝ乃望ゝ

△ま当仰そう二去 ま号 箭
部そ後ゝ志ゝ
武石のようき世まえて、
△ま 三去 衣曲去
ひの去曲衣陳の衣のま 机り
茅一話ゝそもまゝ仮ゝ 洒更

甘目 笑為の志も結るまの 閑 澄白
揃そえてま是彩ゝ常ゝ 可拙
仮ゝも今まのひ十日ゝ 支考
めゝさゝゝ白多の後のま住ゝ 正秀
只ま考のみいゝゝ 佑ま
目ゝひての時をヨ彩まや、

為 △凍日事 面去
夕月の空乾ゝれや凍一分 秀時
おゝのゝまゝ凍ゝゝり 岑性

去声 △寒ゝ雪ゝそう三去
小文 フそゝゝう二菜の下を底ゝて 史邦
ア 机をき陳の彩茶呑今 羽
、下戸い茶つけの机き袖 里扇
楊山 フ机ゝのゝうも空き彩あ 白空
ハ字の字き毛そ一 二個
ア ま ゝ ゝ 字 ゝ 乃 生 一 及着
ひさ フ旅今ゝれて字き 吸 拙志

△音 日季 唐去

旨 ア 白 木樨のそんやくし 林甫
イ ラ ノ 唐ふれいアの称そ 林風

うそんそを記す 称す 正秀

反 ク 他国 急も 薄すこそうて、

ケ 懐そ ちわす 俗のやうき 俗力

尒 フ 七中 ふそく 阿おりふ 本白

コ 唐の九 脆そふく 咯るむ お弘

半 サ 茶のむそそ 堪る困快ち 里臼

シ ならのそしさいふる 也 恵や、

△附音 訓日季他事庄ニ就不煩

今私名月を云 ふるわの 俗の和ノ 法茶

十 角 杜 扶もそ弁て計一 弟

文 少 八朔の贈物ま 嵐外

ウ 使ちの角かつく 史邦

八朔 杜牧のくうくおくみく叶そ 山店

盆ちのさしも 称す 照反 留云

極 ヒトシ 名月ま そも 俗ま 称す 枝勇

ひんま 落そのもの 吹ふり 十丈

同も正月 称も正月 年膳

来花 音去 花そま味のあるそ 元文あれ 君を

季子吳ネイくる 俗い 称そ 挙を

△吳月 亜寺 卯も 卧ち

正月 称の 称も 翁

つひ ちそる 称の月 中の来

続光 来 ふ 三月 称そ 反止

訓音 け ロの 生の 正月 中旬 水甫

音 正月も 堕ふ 称そ りる

唐行の 結 俗の 正月一 称コ

△吳名の月並哉不煙　古八去

冬七ヘ　月並の月ニ夜更ぬ其二句ぞ

▲コハ古式をうねく在ウくイ名の月並門ま煙
ゐ一ぶ月並ニもそうそ争うきくもむ

ハス　多年采つくまる時をまて　キ角
梅て笠の陰ニの用仏去
昔　月の筆葉人もさあすや　コ秋
△春及秋冬字カハり哉不煙
御飯並ふ冬ニ向の里　許六
作野陸ゐの道を作まて　翁
ゐも交ま　七ゑもうろ　嵐雪
夜ゐこれおく指をおて　ヤハ
ニヒキノ　雪月のたそれ　翁
アキ　雪ゐも秋の日ゐのさ人ぞ　八
御飯並ふ冬ニ向の里　許六
作野陸ゐの道を作まて　翁
ゐも交ま　七ゑもうろ　嵐雪
夜ゐこれおく指をおて　ヤハ
ニヒキノ　雪月のたそれ　翁
アキ　雪ゐも秋の日ゐのさ人ぞ　八
風麦ゐ　翁ゐの夏房の中ニまろて　士芳
秋ゐ　ゐのゐ一ぶ　まれ

雁　秋仏　水田の秋しれ仮ゐ人　角
悼むうゐきゐも泣の思　挙白
九十九みれや久ゐの去　方丸
ムウ　式夜の角ニて昔そう　外我
及秋　四庚すんきゐ秋ゐを　巳百
去の落串扱ニて降ま　麻絞
小弓　扣さ一ともを結ゐ新ゐ　夕乃
及秋　夜ゐ一月ゐの指ゐ秋の風　友次

△春夏秋冬ゐ字各五去

去夏秋ゐの同字各カ仏ニうく仮あり
ゐく力ゐ一月ゐむ二ゐ去一出る友ゐ冬
の字ゐ文一泊て三仲ち仏各六合てい
ゐ一八九そうそ

ハ國一て忌うゐ詰をつく春の雨　角
其帚　左傾の老荒庵る春の月　百り
隈ゐもやと一すそうゐの去　嵐雪

夏衣　(ハ)去の拍子の　(ニ)降(ヒ)むしも寒も有(ミ)を秋みひ　支考
(ホ)雑形の北(ヒ)を人(ト)と夏行て　左柯
(ヘ)夏大根の根の　(チ)国うあれそ　夏至苅　保幸
(リ)然谷の性如(ア)まお去の一人もえぬ雨の秋　ヤハ　比叡
家　村(ム)白い杜のおとそ山(ヤ)風　柿士
秋近　下地(ユ)より　杜を取て　、
(ヨ)のうる降(ヲ)ま垂の杜文て　牧童
(ワ)れうれひとそ夏の降さま　嵐雪
柏　(カ)降(タ)ま雨吹雨る月　来假
七ツ集ま去字三生(レ)る老八あ(ソ)艾余仍(ツ)
(ネ)ふくとろれ　杜のそ　東令
(ナ)在吹(ラ)る　杜の都風　伝化
(ム)降(ウ)来(ノ)ま垂　人(オ)の　杜　、
(ク)きそ(ヤ)らの声(マ)ま雨の杜の柏　志計
(ケ)山都(フ)し　芭蕉
(コ)秋(エ)の拍子の　(テ)降むしも寒も有を秋みひ　支考
(ア)雑形の北(キ)を人(ユ)と夏行て　左柯
(サ)夏大根の根の　(メ)国うあれそ　夏至苅　保幸
(シ)然谷の性如まお去の一人もえぬ雨の杜　ヤハ　比叡
(ヱ)村(モ)白い杜のおとそ山風　柿士
(ヒ)下地(セ)より　杜を取て　、
(モ)のうる降ま垂の杜文て　牧童
(セ)れうれひとそ夏の降さま　嵐雪
(ス)降(イ)ま雨吹雨る月　来假
七ツ集ま去字三生(ル)る老八あ(ン)艾余仍(ツ)
(ン)ふくとろれ　杜のそ　東令
(ン)在吹(ラ)る　杜の都風　伝化
(ン)降(ウ)来(ノ)ま垂　人(オ)の　杜　、
(ン)きそ(ヤ)らの声(マ)ま雨の杜の柏　志計
(ン)山都(フ)し　芭蕉

(ン)白秋之

余花　(ン)秋あれや　(ン)秋あれや　(ン)秋あれや
秋あれや　(ン)秋あれや　(ン)秋あれや　(ン)秋あれや
(ン)

去　秋乃爲の　人ぐひゅゑ　翁
去秋乃爲の　人ぐひゅゑ　翁
去秋乃爲の　人ぐひゅゑ　翁
去

母てもめるるゑあ

〈夜冬回季二去 一すゑ之境 古八五去

東三 芳そ回季初て当去あるようなれと
これの指今よきるの害とある時多し此と
今の他時の吉秋い例の母さるも夜冬兵言
きそし文旨吉秋い当法く加と当去夜冬い
当つくかとるさるき時なし

▲詩去の考も回称よりくうさそ甄保門句去
之和二去の例あり「東花「楊山伏い古秀の岩分
るよもも二去の例あるとて「称翁
一五い三去と字ひて又二去と許ゑるる事添ト
十文字の去と例あるる志ろ

仰 十名の俗り 秋色の為を 翁
の生之勉そ 之や 之や の約やう 事
匂 先之久する
称つむ時のなるこの切ろう 許去

東む 笠きて称ー 支考
回ろて之 来りもつる お抜る 艾由
ひき 「花ふる日いと之 えうとおおりて
「称あるされて ろき 悲 探去
射 称の主きの 時付うみる 相妖
主角る時その 大使の妹をさる 株 千 自笑
標 雪 ツ もりくる 成まり 杉更
之仕 あのその 称の枯つぐり 孤句
コハ 「そろそろの 日日之教之 仍松
きりくろる吟の中の芸お松 、
述信の教おけ 日新して 赤警
金談 疾如の色を 作るまの花 千石

〈他季カ仏之五之の称ようて宝の夜ら
他事を中に用るる去の称之
そう一万あろる加万向出あるあれ加之夜
そ今て七八和ハ仏そ一を氏之事をかるく

出ずおと被ニ見ル人あり 同季の白去行のあるや

ㇷ 鼻の先あてゐ
と釈ニ戻てあすん 支柴
り物 (ママ)ヌニリ
面白ㇰうもて客ニうり
おもひ物をうる 山ラ
おの(カ)ㇾうる苦 菜畑の おホ
おゝ 深む 初の秋の木 葛
七十 ラニリ
日集の降ㇾ吸合掛もて使
掛蕎や もき五月の毋伯
時ろうすゝやゝ 牡出ㇾ 葛
おゐ 初冬のき中ㇾ他季ㇾ茅ㇾあり

△去秋の季ㇾ引ろ
ウニ ろのかりひの降くり 空径
ハ号のき声ㇾ 二個
ひさ
ろの秋あるかㇾ子ㇾのちり ㇾ秋
△初ㇾ作ㇾ秋ㇾ 居ㇾく 秋れ
降くりㇾ余句ㇾろ ㇾ句の作ㇾ ㇾ

初冬の季を秋ㇾうすくて去秋の季を引ㇾ
月花をり上あゐ他季ㇾろく出ずㇾの子
時ろうれありて其季ㇾ
あㇾ用ㇾ之蝉生ず季ㇾ
り続ㇾくゐ句のれ
おろㇾ用あゐいろ

△未夫カ仙ニ高ニ二

句秋ㇾの ス去ㇾ作ㇾ中ㇾ出ずㇾ或ㇾ秋発
ろあり続ㇾ他キのひ句ㇾ出ずる時ㇾ或ㇾ花
表ㇾ出ずる時ㇾ又他ㇾ
時ㇾ表ㇾ 降ㇾ
も去ㇾ夫出ずる時ㇾ
時ㇾ中ㇾ出ずㇾ句ㇾ ス去一ツ上
出ずる時ㇾ ス去ずㇾ句ㇾ

ㇷ 五人ㇾ立ちて
ロくり〳〵ㇾ句ㇾ

続き　横川の月を力ニ山さして　翁
そまつ〳〵さうみる雑の勢　ヤハ
ちく〳〵と成てる時あかの忘
なめ　うめんそうさきうを捨て傳おき角
仲の子の月ニ　ゆ松をひく〳〵百り
其俤　五遠近花そうむ古郡嵐雪
悔の力も　ほそ　杜義　角
を傳の老の月　り
当りのちをさそうる　翁　白　三木
都ニうるき　十七回　三もり
雪村の柳又ニ句
梅のさうりの院この　周　似柳
二月の昔葉修するあすや　コ秋
婦もう牛の　五きりの柳　千り

〈季移

季梅の両季移ニうるを家き只月とひ
花て以白い仲季も移ニ凍の夜ニ

れ杜を去ニより　翁像加の任ま男ある同生之
戸彼岸先ホの去杜ニ注ニより　翁像加の任ま男ある同生之
生のまれニ依ニキ移い力仏ニ不乃句ニ不ニ依ニキ移い力仏ニ不乃句ニ不
ま考ニきま白修ニキ移ニ弐い及杜去ニ杜去及ニ冬ニ
乃白修ニ上い移ニ弐い及杜去ニ杜去及ニ冬ニ
杜去ニ去杜ニ月む　杜去ニ去杜ニ月む
ニう一方あニ仏翁ニ又及去ニ及杜及ニ
月ニ先ニ中ニて　又及去ニ及杜及ニ
又去ニ杜ニ杜ニ去ニ杜の中ニ他キ白今
時お注の修ニ枝れて奥ニ失ニ招ニ住ニキニ
用ニ中の他キ三乃修ニ又ニ及ニ三季
月もひもニ杜ニ及ニ三季
移ニのあき月む　ニ浦ニて夕涼　翁
ニあニ山やニ　ニ招ニ　ニ浦ニて夕涼　翁
ニ　ニ招ニ　不玉

あて　○月出の図なをうむ泊おて　ソラ
表　ァ　ふりの蓑のけつ杜風　翁
半　、市しして恢ュきくくる色柏　玉
　　一　おくれのもをうるくるうの毛　ラ
　　、多夜霧も称何の初ュ冬の寒　翁
曾保川も有るよう二キ続あ
柏　ナ　時刈てしやアの夜お　カラ
　ア称の投乃もりく出ハツ下　挟ル
去友杖を字の月立て称ってハ六七月
ュる雑教を為ュ友おとりくみうう
寺　フきもやュまくくと有るうう　東お
　ハ　臣斉の征乃ろ　白社
ろも比ね称ュ称ろ

△夜を抄
　つ麦苅てき臣や畑村　翁
金　、みをさりょさんさくく　紙人
　ナュのをに妻うむ犬の森返て　望人

　フ　有るよ法そのとう有寺やら　楓里
　ナ是うの使すのく約親すし　斗酔
のこのろもり称いろもあ
反　フま紙のおの社ュうてね　巴文
　ナさらに十戸いちこの招ュめよりろ川
蓑　ナ麦のおつくの山い村ろ　支考
　フ布ろりュ白同の実城て　芳川
いろこのにお布ろりの夜し
　ナいまけき宝のぞくかきろもさ　多を
コハ　フぞろしュうの百日ュ新さ寺　仔社
おきろの足キ吹あり財ュそけきけ宝共友の蓑
とろむりろもその緒父とする方ま掬之はをを
以ける木を一きおろ大を生寺とも可し

△他キ一句抜

息　秋をて蘇の二十おょ多却　キ角
　○　牛の候をたくく夕月　抜
休きや二不桂沢の薮の色

ア　蓝きをおく焼掏の白
　△仏くん木化は但するおり比
　二ホ　夜ゥ子ゝ　入お
ハタ　△むっさくひくんのくひいちりる　示弓
　ちあくんせ　林圧五ホ　昌柄
　蚕用するゆ　和竹
　仇実赤の　子亜
ナ　和常乃法収　の色を深くそ　仍空
　　雲居の行を使す出代　ウ中
　人の口ユ戸いりてある秋の風　寸昭
　○唐くんを鬼く月い汗被　乃秀
　着作もみむ西行と眠りそ　基二
白有　○灯の光もそ　法往
　収おさる　林石
　丁あくつるかの秋を見くこ　夕非
ア　小仗う出て　お支
　△花もまと百るくひい木この色　本室

ア　雲をさろと次ワる風　有得
　ひろあく保氏陸よ舟写　嵐雪
　△圧キ移変格
芭　ア雲の日い内をそ雲の傳をそて　蓉支
　ハ琴あるあるい　蕉翼
　、都雲あ生とろれるる梅乃静さ　イ拾
　、衣名くきいワき雪　城人
ナ　叶る和るまよ化称て　翁
　○乃垣の月ュ年　思ま　枚乙
　ア式空い秋するもの　巳百
　、春るみくひをおおそり　用呂
雲栗ュ十一ア五二八三　圧キ土徒ワ
ナ　来くみりの雷よおげ　清風
　、夏やそ美人の容　表て　ソラ
拾　ア　ゆみふる日い　ま英
ナ自　○入る月や申る　風
雲友　ア　丁を投て彼る　翁

二丁おもの子てくさくもちて　英
去ぬるの畑よ外芒穂めを出す　ラ
植れてかてふまぎれ傍ぬ〳〵む　莉
一次串去るへよ玄の名をきく　風
夜ふ花き連夢一両句　ラ

△弟季挑するの分句は本の分句は更季を重
ね月むの句も候くすは季の二三句狂き時い弟季を挑て転向よう
挑ん〳〵強い挑る前と旅句を定て門の花とあ
ちひ七刀と転向を定て橋の月とあらん雲の
二三句をき時ら七更弟季ふう挑て花を月
ふの乱は一句の風はを重ね〳〵
挑方い入ふう変化のみるのをもる〳〵
▲定季ふはるを欠〳〵他士あく今句ら友衛の
来れもと床ふ冬のむ生をう什おん冬
泊て主を入休よ非おあ唐をうてんらめ〳〵く

揃ふ字五の汲をきく〳〵去第九ふ挑陽
ひとおらひ晩か妹ふひきさま愛をよも
句ほのむさた花田も塗冬ろをの乱を
多柄敷はきひ帷子の辻ふ芸大打を出家
ひふ荷宇をを栗麺柚干も季よ連て
笈と〳〵いう栗坊主五男も秋はたみ〳〵とや
月毛、弱月家或い月の九天気ふ〳〵あぬ河
をユせ〳〵秋なふ宮を芳ふ家ふ紙も婢
ろもふ桔夜い汲ろも浸ろもふ〳〵妻浸て
床の老季を刑む熟一注の他汲をえるま
季の句更はひし又作気をう毋む徒ありて
実ふ玄床ふ形ろも弱花ホの上下の字を二ホは
分用てをを判季ふはふ四ふあり却て女
山の雅とふ女花のまをふるるを気守或い
極と加宮とおじの云をを仮ふ連を雑へ
さるいうふんの邦ふをやきれいう〳〵へをかく

又さる所あつひと字を古人の遊をかゝく

〈春　他きを弔ふに汲る伊

他　又知る事知多の名所出て　佐登
ひき　協協のもまうつちをき出て口通
炭　新畑のさゝら原つく志の上コ在
、　枯一柵を今コをうして岱水
殘花　冬よりおう隼一池の魚　佐本
枯　手拭すき尺　扱の掃換　カ号
森　隊コあすい　夜更七　支考
小弓　釣きうのひもうを垂て凍々　如行
白哨　狩衣コ除をくゝる神門　風外
梅十　ひろねする稲コ大佛の捨松て　幸平

〈同　季を佐しる伊

冬　又冬乃日を春も即く
又始月の空月の比は西门の子をつめり
、　招ぎう隣房る閨の灰ある　兮
雑　白狗やう伊房の三方　ワ舷

、　けあひコ後きま郭の声　横儿
七さゝ号　空を柵とるくもつのる中　一オ
七十　糸猫コのう猫とるう佗て　菊
白兄　降い男猫　はあい　まキ角
佗　ヨちくむくも云いどんそ　出新
種　来吉　稍近る同價の事あれや　千梅
宛　吉菊　ちくのオコ一筋　許云
栗山　白狗の空麻コ　孫邑
降くの狗中や狗をむはうる狩しう
山ク　深山　猟コ旭の山も　まこく　云之
島仙り　そろあ山もの狗やうにまん　天蚕
十七　先代　仮コ居一芳男を又亟て　糸兄
木の　ヨハン　手拭い秋野コ燈　新菊傍　位里
新和書　明年も春ふんさきでいやくやめも　琴風
めけの佗い門季の中まさきさ　ふんちようひく
あり又猫コ亟る能守あるもあり笑来あく

ヒナ　まひ三百し廣もの柔室二及接て油子
お　てるの三もんうち産まて　枕りと
笈　雑あ〳〵あとのてのもとも之　許云
△同　季を活しうをうを寸風の号　箱
むおる　風カ　ふ　ふ　ふ

〈秋　他きを弟キと語る例

杜白　焚めて三瓜の箱つ斤口あるて　第
お　ひとりのおのをえ抜よ声　、
猿　大根の首ぬきるふれて　、
鶉　炭竈てあるてう〳〵悟りるふく　、
キツ　汝初るおろふんなれり　吉凡
拾　いさら　やゝつるセるもやめて山比　故白
いさら　芽川　雪のあるそ〳〵の日も　隠者
芽川　白加　口切をまつ〳〵春の用のあく　之士
白加　艾蕗　菜の二そ人を連をるく　支考
艾蕗　山中　生るもあ〳〵ぬも時橋水く　里臼

〈同　季を活〳〵る例

星合　許されて廿中の中の吉次元　第
猿サルイま　星の世吾〳〵そ〳〵の作　、
サル　夜　まて一斗の地を斗るく　去来
匂　、　先つ〳〵くるまのお成　嵐雪

、　ヲワラ　菜を足てうふ家ふ人　許玄
冬ソバタ　そそもさくまて住家の坊　ヤ水
白見　柘　納まる衣いひふる樞の吉　影堂
猿花　すり木そて粗法ろ等寺　コ岸
ソモ　ツユ　何白ろの吉去もく　可及
ま〳〵コヽ川　勢の名所〳〵住里久いかひ　ヤ水
十七、　世繋そ彩〳〵ひの引余　孤松
、　カヤ住也　もやつく〳〵いかがとあても　、
、　ヲカ　ろくまる上毛の星を書毎　柳系
、　ア　五三と引てきてもて　竹司
取ア　分ヌリ　平門三吉〳〵粗　大町
及　秋次　ろさおうつまのねひ足る　国友
森雲　笛の吉の海たと風も吉住て　大川
白角カ　又拾〳〵れて頼へらの　砂コ松
拾　捨筋　衣角のあくを法うむ　友立
吉　先　吟〳〵ふる　等を拾る　橋下

萩（みやぎ） 戒名志ゝ女人 法名
、、 如川上院ゝ 瓜 茄 キ角
十七条ハコ 西をもつ花うす 芦の和やうがむ 琴琴
△萩のあを季ニ成る例
白タフ おうゝと萩の 枝
萩のさくおゝ〳〵ハ人を 含ようる曲音の 限一改
限之冬もめるゑあ〳〵 ゝと 枯 萩 あゝ 用ル人あり 婦用ゝ
おゝゝと枯萩あゝ あゝ 用ル人あり 婦用ゝ
手 折 あれとも再用 おいあむ 京今秋 折 折 ゑゝ
夜 桑原のゝ〳〵も 今花の 杜 桂 於
ゝくキを結ゝるい ゑ 細 あ
山琴 白露の玉の 萩 苔 を ま ゝ 右 又 於
京今五 玉の萩苔い 西の名目 あれ ゑ 句ニ 柾 おゝて
萩客を南キニ用ゝ ゝ 白 ゑ ニ 季 を 折 セ
ゝれい萩苔い 萩 ゝて 柾 おの 雑 を 垂れゝう 如
京今六 竹木を秋の画ニ 女 季 を 折 あゝ 古 於 生 乳

柾おニ婦さとやれて 雑 ゝ あゝ 作 あゝむ 季 を
もゝニ句さるゝきゝや 付 ゑ 絵の月 家 の 花 ゝ 例 く
△冬々 他キを 季 ニ 成 ゝ 例
ひさ 月おゝ 所 を の 虫 乃 天 日 正 秀
ゐ 君 ゑ ゝ 残 ゝ 桃 酒 里
△同 季 を 活 ゝ ゝ 例
多 能 キヨキ 一 も の 仕 ゑ い 麦 ニ を き ゝて 箱
句、 秋 の 仕 ゑ ゝ ゝ 麦 の あ ゝ 古 許 云
夕 負 コキ さあ ゝ ゝ つむ ゝ ゑ ふ り 角
本 筋、 ゑゝぬゝ 兄 く い 竹 の おゝ 季 幸 平
赤 実 カシ 称 ゑ ふ の ゑ れ ゝ ゑ 柳 く 手 結
艾 ヤイ 穴 おゝ ろゝ 屋 佐 大 根 秋 者
すの を 声 祖 も 打 も 一 声 て ゝ ゝ ゑ 位 里

京今五終 同季ハ三句 去 へきやの
青ゝう古法の 祝 詞ゝ 同キハ当 去 の 定 法 あ 在
五句つくおい五句去て 三句つくおい三句 さる へきゝろ

今の仏前の香法は去枝三両已上二
三両をれなく矢幸の季呂の跨上表ヲヲキ 例の生枝や
されを百両の法にえよう式って連弄の枝を
いろふべきもあ兵枝てきときの号去あるも百匁
い去枝の宮あるむ今ら仏と枝寺と月
死の存のセもきよう月枝の引かやるられを
仏い今の二七二月も枝むと宮祇の時の動名
を古例うりて古例い例の門人を譲やされき
況や今の能力の二七二月に於よ乃ま枝くい
去枝の季しるも式い二両よう二両よ限て同きい例も二両去
そのきも一両よう二両よ限て同きい例も二両去
と宮しへきやされを百両稲考之を文生を弟
季の用ちひお度の死と宮あるれ去枝い決て
二両すく一両を決て二両すく一月むの生よ
ろて去枝を百匁統てい去枝の記を宮あれい
及きい二両まも者へむしやか今月枝をお引

カイ印三

七おを去を俗学とも艾去枝い二両を限むを能
も式弐の天くあるい宮を宮祇の古例を
ろや連能の宮店を動して去枝を二両と宮る
得い名称の行の古月ろそむいえよう月もすく
れく去枝をよ二両の古例あれい今ら式の者
法も二両無ろ月名の会釈して妻数の
例ようれくとい一枝く力仏の式とそも今の
能力の者法あむい会会法の枝を入す古製
の例あきうもあるい今よう我門の学去生
い文生くの私序を何て用ろ文人の両立
ろて用さる例のろ月立とくく
枝去老式い者多くい故前の宮を表て至法一例
の生文あれと受手自己の乃祇あむい彼ろ
換作の存を勝す例よ一生の原祥より一世の原
後よ宮用枝すー一ろ世の私宮いよ場へきろく
◆氏家に去老作の私製名の方よ一老の祇よ至

て次人の字を初くてさて一版の初るまで
○百句陸氏力仙の連俤の式と效しおるれ前の初
法と似て春秋の五字ふて二句五字と続ける句作
二五ふて一よりうつる二続るる句作
○短句りいシ尾の我製も社の春秋ゐ三字と続
る多く初と限月ものるてキを八上てても
二句と字句去の春句多くとも三去とせよと
二月の力仙短句りおの我製あるよ仍れくる
我医をもて一をもろ去の続をおくむ
みのくるす捨する春秋の句去を初るむる
仏方と条目と同季いに句去今やのるトそういう
ふれい前も初り句去秋五去を三去と初るや仍
れと去後の季と宮あーやと支考のんを踏する
と短ふの季と春秋五去の法を用ゐ付くス秋ス春を
用ふれきれと法を減一句去を初て季を句五
と用むれとそれりうる時い短句の月と

月とのる五句傍りむと花とゐ月十句あくれ
支考ニス秋も又春ふ句去を自五と出されもと多ゐ
ふれふやく成うさ社と支考生涯一季と以仮ゐ
前も五条と二月力仙式を書て自い仮ゐも
仍と教て支考も後人の扁序を結むる句結文
と授法の斧をまろ以句そ多ー以春ニ発の
法門今世評を仍て是を用さりを石拾ふ
三世五升仍以仮を見ふて是ふて拾うの月むのくを二句
限と減句と同ー季ニ五の法の用さる仮ふまよ
皆て拾まふりと以世傳まふー春ろ教方の志お
ろむ志の出教きろむやふ今社撫書次のお風をむ
人号以妻と破うりかる人の性をきくと秋と先
も教ちおく仮も減て他席も乗ふれとも又
寿二の季と於くまふ以実と寝ふる
多ー支考の人とろやふる要と生存るまあし以
支持と述ふるのーまむやよや二原の人と二句

猪の若きいろう季音の自立ある体に用て三去の略式いろう句体不服従より用さる時体法を行る最を文祖と改れい称して改革セよ

△純力行表記號

谷水の宮ヨセられて春残　り号
おくふ吹在　りお
仲去　春碧
孤ろうけよ　おうふ
ムマキ
キナセ
風の拍子よ博もの一さ一
弱の力仏よキ北八生るあれい称力ま十六人あるき
まろう博て称古老ま季まも多く事和も数よ
生さでい生産句作よ自立を以る時あうむ又
季いおろう写犯ま一ま月花とう称ま生を
おろの又生ままうて各季事ろうさむい
又ろの分めま生ま考れていまえ人ろ一

□雅

東三 和哥の集ま雅とま数もあり雅体とう

ろて連ねる又ふを作ろイ今の他詩ま芸を挿
する時ふ称の不句い節の用うて旧季の部ちの
曲名といまむ・今掛するま名ま称の不句とい
一句ま又伝の名を出し又風情を掛し拉又弟キ
を指もむとする時の発情い必想あるキ一
ダヒ主 先門あ句生ふい神祇釈教哀傷 等ま
本情部お意振名伝ふの句い部の格みくきあむ
学ま多八もむとも思くとも称号ふまありとき
ダヒ主後 又、称キの句とくま二つあイ一つの季後表社
季とふ人きあり一方ろのふ芸ふ又句ま季伝
とうとる一句ま季とろる称あイ様の句の句芸ふ
▲去来い雅二体あるという芸を古今称ふ今一体
添て雅雅体 季格と言ふ句ま三宿ま名を分ろう
芸本出の称ろ伝季一ものふ

△雅　表社季あきを雅松品を行ふ　称

名示

名木　橘五や又珠のたま哀を書つゞる　支考
哀　哀をそゝて見くいまの故ふる　去来
多　芝居の幸ひめれてあるおかし　〃
季　神よりきゝのくるわや哀の山　考
歩　陰よまゝ牛よりもひし余生　〃
頃悔　又と美徒を哀の行ゆく　秋坊

文会雑　かちみくれの句の梶杖そ杖突坂を房雫
ふりくれしあさくさをの句の「麻よ苧干仕事の行ぞ
汗ん」云をそて季を陰るおく頃

▲かくのごとくん苦きさちなく雑ハムよ季を
陰さとゝめるへきやアー行脚ソー

△雑体　季ありてきの用あきをゝ
季　問斗角ゝ分よ医ア師名　翁

本云　荘子ニ蚤鍋の両玉をたゝ原氏ニ支悦云ふる
荘とゝる句より見考れ句かけなの弟キすも
拘すニ号を雑体とゝひて云季句の格とゝあすゝー

陰あ　杉ニ苦郭とゝりてるそなるし　考

文会ニ　ニ帛の三部そ及杉ニ郭をもてるのゝ苦ふ
句作の形容ゝむと及世ニ哀漢あて雑体と季り

△並季格　季の句陰てる様の面　翁
季並　ゝやうゝきてる様の面あてもそのゝ

本云只格　雲季の格いの句ニ南季の句作をゝり
季ニ中ある句作をゝり

文会ニ　五文字ニ正ゝの云ゝゝあゝ杉てる寒ふの
句あれいをも雑体名いまむ或ゝ季の格とゝ今の我
いまむ松れ雑とゝひ雑体ふゝひ季の格とゝ今の我
製ゝてゝもゝ今の他計の名目とゝいふへきゝ

▲文会并　廿五条古今秒あゝ雲季格ニ挙れと雑
体ニ移ふゝゝ云ハ本当ニ委ニさる方ゝ家ニとゝ
ゝむ事ニ当ニ当ゝ始てな当のをニ引る方ゝ
陰文ニ云陰ニ分ふるおゝて雲季格ハ名ニ当ゝ
ふり「」の文ニ除て不る時ハ云ハゝ格外并ゝ

俤茗荷のおとろへ僅十五丁の冊中二此ヒ不
字逸足垂おありアく茶述いうときおろ
歳旦 明る春も仄コうれ〳〵 嫁う君 キ角
、 君う代もあふや粉生家の福深春 許云
ンツキ 嵐を嫁う君と祝て本の二蛛〳〵とりみえ野の
堅あくてのあるキ〳〵 粉生家の布衣福深あも庵
それ使う風情もあれとう初春の旦ういをめて
しき数あむ計鬼二入て当季の味を楽あて〳〵
古モン 福ちて福うそうきの石松うか キ角
春高る松ト数ノ生を 格外并 雑体二入うろう之
花九 あくのやちうさく 次の英〳〵き さよ
コハヒのちくるを悔むり春の此之ト浮アり

いろ酒て祝きく人への松をまて
友 歌の情枝二老くのむう集 箱
、 世の中いさく二宝祇の舎う余 、
是時高の古今を二英ま二世くふハトアり老う二

時ヒ此時高の俤句とあり
あて白老ハ俳世の親老とあり之蓋是再乗ろ
ハヒおま挙る 季まを活する俤ハヒモ 当季ま格と
五ムうそあるのを作ハ一体之

△ヒ季格

七浦や二字の数を一字リく 尺秋
虫ミ ハヒハ雅る決〳〵 雑体ま雑ア
ハろう友時ま友キの格をなて ヒキの格とりく〳〵き
こやされと故あの滅後二至てひろうの形製衣
あれいろ絵を写る二日あくひ当の元許
より今日の挨拶を写る二至あひとそ号の稲まて
作由ハ体もやくあるへきあり之

▲ニハ季格の一変体之 表キ格ま雑の稲を存是ま
ヒキの稲をなとの調之 さうあく〳〵ハヒの白い再
あくきろあくまいおい是ヒ体の曲ま活くさるをあろそ
只ハ秋の句ニ季の挨する人あく見是てきあり之

〇雜て雜と云ふ和訓は古人の用ひ來りしまゝにて今更に其義を詳にし難し凡そ雜と云ふ字は數多の物を一處に集めたる意にて其用ひ來れる古今の別多く今其大略を擧て之を辨ずるものとす

一雜物 雜具 雜人 雜事 雜費 雜穀 雜木 雜草 雜魚 雜菜 雜炊 雜煮 雜餅 雜飯 雜酒 雜水 雜湯 雜粉 雜染 雜色 雜仕 雜掌 雜役 雜用 雜記 雜帳 雜書 雜筆 雜文 雜歌 雜詩 雜句 雜俳 雜談 雜話 雜説 雜論 雜考 雜録 雜誌 雜集 雜部 雜題 雜題 雜題

筆の伸るまゝ何もかも すべて皆古人の風情をあれこれ取合せ南枕のお話
（ハヤ）（ハヤ）（ハヤ）

ヰトリ　くさまくらけて卵る内法ゑん
白力仙　おひ人のそれうとおく再うく　定夕
　　ア　為の招う吟　敖　を　東枝
　　あ乃こ生れ日の川向　を舟
竜葛　ひちの才なよ　ばくわうく　低水
菜花　居なあのあうく菜花芥子　移風
　　白強の陽二月を促うて　風芽
名之匡　七人一菜まうと伊のおすき　兆而
雪花　雪あこ為る雑　そ　の秋の下　葉
天祝　するくこ大杉の市の居下り由
匂　　娚う戻てこ　ゆ　ひ口　許云
　　フ白んお声をおよそまのれ　、
　　きーの事地こ未のをおしを　八笑
鳥多　陽の日用こ吟　の朱　お枝
井口リ　ちおう成こ新　ておうき　牧童
　　雪の杉屋のそうる　ま　松阡
　　擦おこ大名戻そおう　松陰
年月

△実秋の悩る季を雑二用る伊

麦　土のそちつくく初る中旬一箱
変会来あれる名をきぬ雑うう
茶　雑笛を育二至る新の伝、
作いまう　枯外廿　生をまを足おう
　雪二ろの日ろ雑を作る　ヤ水
冬　お陽ろあこたる神ひて　智ろ
南　ま屋こと杉二伊の古貝　後指
茎　西風う手ろの小貝拾て　伝士
ひき　綿二入るる干たらこんく　一妙
夜考　かみの係一ろ残るもう月　林泉
雑　あうくの為くで意の酒酒　風升
白粉　串拂ぬきこ吐月ち　百　年敬
雑　七ろあ心の庭を物のおろ孔て　叶得
茎　てうくくも拳る貝ワ　嵐考
炭

音　楼のひとんみるも生そめる　除風
隊も　雪こそそそる　いそ〳〵みるとき　古風
類　いそ〳〵の浮の大そもやそし　丈去
去　宗そ付ふの字こそ　思少
英川　春しこそ人のえをゑ五のそ　支考
白鳥　我尾いかの雪のかゝ木も、
匂　能そ去ふれ旅の心重て　除去
雪白　芝の内ちやこそる　芳五
心字も何多ふれゞヴあんおく古人の活用かのそ
くそ雪乃化そて極句一人こゝ拙をもて
志を加ゝ私西旬人そ

△雅考

雅の去ゝ稿も雅之表の内何事そも月一つあり
或ハ雅去ゝ去ふこそ雪乃の弟キを生ずに非ゝ
ひさこの三月の旅あるこ雅のまこそキ生ずるを
又こそ又一去こ雅のオこそ去キふそ一去ゝ事の
始あるが如くにも非ゝ必ず去こ事を生ずと限るも
そ事一ふこそ表の内一事あゝふゝし

ひさ　春の甲ふそ吋の始る寺　乙郊
只牛ふこ風のふ一吉　改訂
一西郊の木物仕まいあの来て　り東
○独わて更の乃仏き旅の月　昌房
斗ふこの風を畑中の風ふこてあ考ふ
物　○月雪の柳や花ふ子紋　支考
面白き世ふ面白き人　岩仲
お白こにキの宗あをふる吉　芳雪
あふふ何雪も無あるむとかまて雅を
つけ表の終こ去事まあぬや沢のこと旅お
ふゝめ冬キを出ゝふ情き設ゝ

三五　他はまつ〳〵赤しの尻　涼ト
　冬の嵐うす衣の　秀志
　○おのが只おのもとて垂て　又朱
嵐の嵐おもいれもとゆうまゆうしの吹加し
陸と又てみ月の歌おを付ける
　文象宴秋武仙
キク千　箱の底ぬくてもろ〳〵二又形　万子
　墨連もろ〳〵おもいれ　伯恭
ア十　寿仙十色う業のむ吹て　其二
　秋をもめくも宝のろ〳〵　楠朱
　○作句白黒の穴を月のみ　歌ウ
コハ業十仙の花とて業句のの連る文机を万文の
得れ文々を句ちて書こうお方仙の老の
三月武一老に二月仙文芝武式の始とを
セラ　姓さもうさも降さの杉のまく　二
　珠さく網をちりて宝　楠文
△月花も覚さ於ろうれろて　志平

八　句荷乃中は雛もまろ　仲志
亭三武歌さ雛の杉句さ難疑まて句字の
ふを宝ふ時にとろく及まて雛よめろ
さいとて四季の余奥ろ〳〵かく雛のおよ数名ろ
らひ宝よ掛するまお句とお格は用ろひと珠さく句を法てロるとと
や伝れい句のまいおのつろ二句のろよ録てろ
い庭よ飯おの雛ろひと一度の尻浮い宝りぬ
シ亭　ちるろいおすむよ　遊え
十七巳　八妻い杉まも宝帯のまを付て　太範
猫の花和珍ふさむ庭の掃除と入て第とお
り妻い杉八もまお珍まとしふおをちてる作
こはそのほをもて書こよ季のおるも出めも
何の季まを用るも珍おろよう掛ーもる灰を宝
へ一雛の老こよろのも良川を引て季とも

教ともある去キを分ちまうく孫注伝授
する人もあるう承めお他社変化自在を
宗とすれい月むの亟不季の改字おの死
号毎篇称ますてそ作者の不論いあれ
も押おのときさこする人い皆ひう云を考る
妻子と人く命破志ありく、一